

Oracle® Developer Suite
インストレーション・ガイド
10g (9.0.4) for Windows and UNIX
部品番号 : B13571-01

2004 年 2 月

ORACLE®

Oracle Developer Suite インストレーション・ガイド, 10g (9.0.4) for Windows and UNIX

部品番号 : B13571-01

原本名 : Oracle Developer Suite Installation Guide 10g (9.0.4) for Windows and UNIX

原本部品番号 : B10579-01

原本著者 : Joe Malin

原本協力者 : Poh Lee Tan

Copyright ©2002, 2003 Oracle Corporation. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致しません。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation, and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしました、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。その他の名称は、Oracle Corporation または各社が所有する商標または登録商標です。

目次

はじめに	vii
対象読者	viii
このマニュアルの構成	viii
関連ドキュメント	ix
表記規則	ix

1 インストールの概要

1.1 Oracle Developer Suite インストール手順の概要	1-2
1.2 インストール手順について	1-4
1.3 Oracle Developer Suite コンポーネントのインストールについて	1-4
1.4 インストール時の新機能	1-5
1.4.1 DVD 版インストール・ディスク	1-5
1.4.2 Solaris 6 および 7 のサポートの終了	1-5
1.4.3 SuSE SLES-7 のサポートの終了	1-6
1.4.4 オペレーティング・システムに必要となる新しいパッチ	1-6
1.4.5 インストール時の /var/tmp 領域の不要化 (UNIX のみ)	1-6
1.4.6 前提条件の確認項目の追加	1-6
1.4.7 Configuration Assistant の機能拡張	1-7
1.4.8 制限事項の廃止	1-7

2 インストールする前に

2.1 ハードウェア要件	2-2
2.2 サポートされるオペレーティング・システム	2-3
2.3 オペレーティング・システムのソフトウェア要件	2-4

2.3.1	Windows オペレーティング・システム	2-4
2.3.2	Sun SPARC ワークステーション用の Solaris オペレーティング・システム	2-5
2.3.3	HP-UX オペレーティング・システム	2-7
2.3.4	Linux オペレーティング・システム	2-9
2.4	1 つの Oracle ホームでの共存	2-10
2.4.1	Oracle ホームに関する注意事項	2-10
2.4.2	Oracle Developer Suite の複数インストールの実行	2-10
2.4.3	Oracle Developer Suite のインストールと Oracle データベース	2-11
2.5	インストーラによって使用されるディレクトリ	2-11
2.6	インストールの準備	2-12
2.6.1	全般的なチェックリスト	2-13
2.6.2	ロケールの設定	2-13
2.6.3	ユーザー補助機能の使用 (Windows のみ)	2-14
2.6.4	Java Access Bridge のインストール (Windows のみ)	2-14
2.6.5	環境変数の設定 (UNIX のみ)	2-15
2.6.5.1	ORACLE_HOME	2-15
2.6.5.1.1	他の Oracle ホームとの競合回避	2-15
2.6.5.2	DISPLAY	2-16
2.6.5.3	TMP	2-16
2.6.5.4	TNS_ADMIN	2-17
2.6.6	UNIX のアカウントおよびグループの作成	2-17
2.6.6.1	インストーラのインベントリの UNIX グループ名	2-17
2.6.6.2	Oracle ソフトウェアの UNIX ユーザー	2-18
2.6.7	コンポーネント別のインストール準備作業	2-18
2.6.7.1	Oracle Software Configuration Manager	2-18
2.6.8	インストール中に必要な情報	2-19
2.6.9	システムの移行またはアップグレード	2-19
2.7	インストーラを起動する前の準備	2-19
2.7.1	Oracle Universal Installer について	2-20
2.7.2	インストーラによる前提条件の確認	2-20
2.7.3	インストーラのインベントリ・ディレクトリ	2-22
2.7.4	インストーラの起動	2-22
2.7.4.1	Windows の場合	2-23
2.7.4.1.1	Windows システム・ファイルのインストール	2-24
2.7.4.2	UNIX の場合	2-25
2.7.4.2.1	CD-ROM および DVD のマウント手順 : Solaris の場合	2-25

2.7.4.2.2	CD-ROM および DVD のマウント手順 : HP-UX の場合	2-26
2.7.4.2.3	CD-ROM および DVD のマウント手順 : Linux の場合	2-27
2.7.4.2.4	インストーラの実行	2-28
2.7.4.3	サイレント・モードおよび非対話モードでのインストーラの実行	2-28

3 インストール手順

3.1	Oracle Developer Suite のインストール	3-2
3.2	インストール完了後の作業	3-9
3.2.1	全般的なチェックリスト	3-9
3.2.1.1	更新	3-9
3.2.1.2	NLS	3-10
3.2.1.2.1	コンポーネントの言語	3-10
3.2.1.2.2	追加フォント	3-10
3.2.1.3	TNS 名	3-11
3.2.1.4	ポート番号	3-11
3.2.1.5	Oracle Developer Suite 用の OC4J インスタンス	3-12
3.2.1.6	ユーザー補助機能 (Windows のみ)	3-13
3.2.2	各コンポーネントのインストール完了後の作業	3-14
3.2.2.1	Oracle9i JDeveloper	3-14
3.2.2.1.1	旧リリースからのユーザー設定の移行	3-14
3.2.2.1.2	JDeveloper の拡張機能の有効化	3-14
3.2.2.1.3	ソース・コード管理の有効化 (Windows のみ)	3-15
3.2.2.1.4	フォントの問題 (UNIX の場合)	3-15
3.2.2.1.5	ドキュメントのホスティング	3-16
3.2.2.1.6	Terminal Server / マルチユーザー環境での JDeveloper の使用法	3-17
3.2.2.1.7	JDeveloper で非埋込みモードの OC4J を使用	3-20
3.2.2.1.8	JDeveloper でのユーザー補助機能の使用法 (Windows のみ)	3-21
3.2.2.2	Oracle Business Intelligence Beans	3-22
3.2.2.2.1	データベースに関する注意事項	3-22
3.2.2.2.2	Oracle9i リリース 2 のデータベースを BI Beans と併用するための準備	3-23
3.2.2.2.3	その他の作業	3-23
3.2.2.3	Oracle Reports Developer	3-24
3.2.2.4	Oracle Discoverer Administrator	3-26
3.2.2.5	Oracle Forms Developer	3-26
3.2.2.6	Oracle Software Configuration Manager (Oracle SCM)	3-27
3.2.2.7	Oracle Designer	3-27
3.2.3	コンポーネントの起動	3-28

3.2.3.1	Oracle9i JDeveloper および Oracle Business Intelligence Beans	3-28
3.2.3.2	Oracle Reports Developer	3-28
3.2.3.3	Oracle Discoverer	3-28
3.2.3.3.1	Oracle Discoverer Administrator	3-28
3.2.3.3.2	Oracle Discoverer Desktop	3-29
3.2.3.4	Oracle Forms Developer	3-30
3.2.3.5	Oracle Software Configuration Manager (Oracle SCM)	3-30
3.2.3.6	Oracle Designer	3-30
3.2.4	その他のドキュメント	3-31

4 アンインストールと再インストール

4.1	アンインストール	4-2
4.1.1	インストーラを使用したアンインストール手順	4-2
4.2	再インストール	4-5

A アップグレードに関する注意

A.1	Oracle Developer Suite	A-2
A.2	Oracle9i JDeveloper	A-3
A.2.1	リリース 9.0.2/9.0.3 からリリース 9.0.4 への JDeveloper ユーザー設定の移行	A-3
A.2.2	移行に関するその他の注意事項	A-3
A.3	Oracle Business Intelligence Beans	A-4
A.3.1	リリース 9.0.3 からリリース 9.0.4 への Oracle BI Beans プロジェクトの移行	A-4
A.4	Oracle Reports Developer	A-6
A.5	Oracle Discoverer Administrator	A-7
A.6	Oracle Forms Developer	A-7
A.7	Oracle Software Configuration Manager	A-7
A.8	Oracle Designer	A-8
A.9	その他のドキュメント	A-8

B コンポーネント

B.1	Oracle9i JDeveloper	B-2
B.1.1	対応するデプロイ環境	B-2
B.1.2	オラクルの Web サイト	B-3
B.1.3	Oracle Business Intelligence Beans	B-4
B.1.3.1	デプロイの要件	B-4
B.1.4	UIX	B-6

B.1.5	Bali	B-6
B.2	Oracle Reports Developer	B-6
B.3	Oracle Discoverer Administrator	B-7
B.4	Oracle Forms Developer	B-7
B.5	Oracle Software Configuration Manager	B-7
B.6	Oracle Designer	B-7
B.7	その他のドキュメント	B-8

C サイレント・インストールおよび非インタラクティブ・インストール

C.1	概要	C-2
C.1.1	サイレント・インストール	C-2
C.1.2	非インタラクティブ・インストール	C-2
C.2	要件	C-2
C.3	インストールの準備	C-3
C.4	レスポンス・ファイルの操作	C-4
C.4.1	Oracle Developer Suite のインストールに使用するレスポンス・ファイルのサンプル	C-5
C.4.1.1	Business Intelligence (Windows のみ)	C-5
C.4.1.2	完全インストール (Windows)	C-6
C.4.1.3	完全インストール (UNIX)	C-7
C.4.1.4	HP-UX でのレスポンス・ファイルの使用方法	C-8
C.5	インストールの開始	C-8
C.5.1	サイレント・インストールでのインストーラの起動	C-8
C.5.2	非インタラクティブ・インストールでのインストーラの起動	C-8
C.6	インストール完了後の作業	C-9

D トラブルシューティング

D.1	始める前に	D-2
D.1.1	ハードウェアおよびインストール前の要件の確認	D-2
D.1.2	リリース・ノートの確認	D-2
D.2	インストールに関するトラブルシューティング	D-2
D.3	Oracle Developer Suite Configuration Assistant のトラブルシューティング	D-4
D.3.1	Configuration Assistant の実行状態の判別	D-4
D.3.2	Configuration Assistant のエラーの修正	D-4
D.3.3	致命的エラーへの対応	D-5
D.3.4	Oracle Developer Suite Configuration Assistant の説明	D-5

索引

はじめに

このマニュアルは、Windows または UNIX システムに Oracle Developer Suite 10g（従来の Oracle9i Developer Suite に相当）をインストールする手順を説明します。UNIXへのインストールの手順の説明は、Sun Solaris、HP HP-UX、Linux x86 の各プラットフォームを対象としています。

ここで説明する項目は次のとおりです。

- [対象読者](#)
- [このマニュアルの構成](#)
- [関連ドキュメント](#)
- [表記規則](#)

対象読者

このマニュアルは、開発者、データベース管理者、および Oracle 製品のインストール作業を担当する方を対象としています。クライアントとサーバーから成るアーキテクチャや両者の関係、データベースの概念についての知識があるものとして解説しています。

このマニュアルの構成

このマニュアルは次の各章および付録で構成されています。

[第1章「インストールの概要」](#)

インストールの概要と使用可能なインストール・オプションについて説明します。

[第2章「インストールする前に」](#)

Oracle Developer Suite に必要なハードウェアおよびソフトウェア要件を説明します。また、インストールする前に行う必要がある作業についても説明します。

[第3章「インストール手順」](#)

インストール手順と、その完了後に行う作業について説明します。

[第4章「アンインストールと再インストール」](#)

アンインストールと再インストールの手順について説明します。

[付録 A「アップグレードに関する注意」](#)

旧バージョンの Oracle Developer Suite コンポーネントからの移行またはアップグレードに関する情報を紹介します。

[付録 B「コンポーネント」](#)

Oracle Developer Suite のコンポーネントについて説明します。

[付録 C「サイレント・インストールおよび非インタラクティブ・インストール」](#)

サイレント・インストールおよび非インタラクティブ・インストールによる、Oracle Developer Suite のインストールについて説明します。

[付録 D「トラブルシューティング」](#)

インストールにおけるトラブルシューティングの方法を一部紹介します。

関連ドキュメント

リリース・ノート、インストール関連ドキュメント、ホワイト・ペーパーまたはその他の関連ドキュメントは、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) から、無償でダウンロードできます。OTN-J を使用するには、オンラインでの登録が必要です。登録は、次の Web サイトから無償で行えます。

<http://otn.oracle.co.jp/membership/>

すでに OTN-J のユーザー名およびパスワードを取得している場合は、次の URL で OTN-J Web サイトのドキュメントのセクションに直接接続できます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

表記規則

このマニュアルでは、次の表記規則を使用します。

規則	意味
固定幅フォントの小文字	固定幅フォントの小文字は、実行可能ファイル、ファイル名、ディレクトリ名およびユーザーが指定する要素のサンプルを示します。このような要素には、コンピュータ名およびデータベース名、ネット・サービス名および接続識別子があります。また、ユーザーが指定するデータベース・オブジェクトとデータベース構造、列名、パッケージとクラス、ユーザー名とロール、プログラム・ユニットおよびパラメータ値も含まれます。 注意： プログラム要素には、大文字と小文字を組み合せて使用するものもあります。これらの要素は、記載されているとおりに入力してください。
太字コード	コマンドライン・プロンプトへの応答として入力する固定幅の太文字。
固定幅フォントの小文字のイタリック	固定幅フォントの小文字のイタリックは、プレースホルダまたは変数を示します。
固定幅フォントの大文字	固定幅フォントの大文字は、システム指定の要素を示します。このような要素には、パラメータ、権限、データ型、Recovery Manager キーワード、SQL キーワード、SQL*Plus またはユーティリティ・コマンド、パッケージおよびメソッドがあります。また、システム指定の列名、データベース・オブジェクト、データベース構造、ユーザー名およびロールも含まれます。
.	垂直の省略記号は、例に直接関連しない複数の行が省略されていることを示します。
.	
.	

規則	意味
...	文またはコマンドに使用される水平の省略記号は、例に直接関連しない文またはコマンドの一部が省略されていることを示します。
[]	大カッコは、カッコ内の項目を任意に選択することを表します。大カッコは、入力しないでください。

1

インストールの概要

この章では、Oracle Developer Suite のインストール手順の概要を説明します。用途に応じて、いくつかのインストール方法から選択できます。説明する項目は次のとおりです。

- [Oracle Developer Suite インストール手順の概要](#)
- [インストール手順について](#)
- [Oracle Developer Suite コンポーネントのインストールについて](#)
- [インストール時の新機能](#)

1.1 Oracle Developer Suite インストール手順の概要

Oracle Developer Suite 製品のインストール方法には、次の 4 つがあります。

- **J2EE Development:** Java、HTML、XML、および SQL を使用した Java 2 Platform Enterprise Edition (J2EE) アプリケーションの開発に必要なコンポーネントがインストールされます。また、Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) によるテスト機能も含まれます。Oracle Business Intelligence Beans (以下、「Oracle BI Beans」) を使用して、ビジネス・インテリジェンスを活用したアプリケーションの拡張が可能になります。
- **Business Intelligence:** (Windows のみ) ビジネス・インテリジェンスによるトランザクション・アプリケーションを拡張するための開発ツールがインストールされます。関連する Oracle Application Server ランタイム・サービス、および OC4J によるテスト機能も含まれます。
- **Rapid Application Development:** (Windows のみ) Oracle Reports ベースおよび Oracle Forms ベースのアプリケーションを素早く構築するための J2EE Development コンポーネント、および開発ツールがインストールされます。また、データベースや複数階層アプリケーションの設計や開発に必要な、ソフトウェア構成管理ツールおよびツールセットも含まれます。関連する Oracle Application Server ランタイム・サービス、および OC4J によるテスト機能も含まれます。
- **完全:** Windows の場合は、Oracle Developer Suite のコンポーネントがすべてインストールされます。UNIX の場合は、J2EE Development コンポーネント、Oracle Reports ベースおよび Oracle Forms ベースのアプリケーション構築に必要な開発ツールがインストールされます。

[第 2 章「インストールする前に」](#) では、Oracle Developer Suite に必要なハードウェアおよびソフトウェア要件について説明します。

[第 3 章「インストール手順」](#) では、インストール手順について説明します。

[付録 B 「コンポーネント」](#) では、Oracle Developer Suite の個々のコンポーネントについて説明します。

次に示す 2 つの表に、Oracle Developer Suite のインストール・オプション、および各オプションによってインストールされるコンポーネントを示します (Windows は [表 1-1](#)、UNIX は [表 1-2](#) を参照してください)。

表 1-1 Oracle Developer Suite のインストール・オプションとコンポーネント (Windows)

コンポーネント	J2EE Development	Business Intelligence	Rapid Application Development	完全
Oracle9i JDeveloper (9.0.4) (Oracle Business Intelligence Beans を含む)	○	×	○	○
Oracle Reports Developer	×	○	○	○
Oracle Discoverer Administrator (従来の Discoverer Administration Edition に相当)、Oracle Discoverer Desktop を含む	×	○	×	○
Oracle Forms Developer	×	×	○	○
Oracle Software Configuration Manager	×	×	○	○
Oracle Designer	×	×	○	○

表 1-2 Oracle Developer Suite のインストール・オプションとコンポーネント (UNIX)

コンポーネント ¹	J2EE Development	完全
Oracle9i JDeveloper (Oracle Business Intelligence Beans を含む)	○	○
Oracle Reports	×	○
Oracle Forms	×	○

¹ Oracle Developer Suite の全機能を利用できるように、UNIX 版には Windows 版のコンポーネントも同梱されています。

1.2 インストール手順について

Oracle Developer Suite のインストール手順は、次の 3 段階に分かれています。

- **インストールの準備**: Oracle Developer Suite をインストールする前の準備作業を行い、Oracle Universal Installer を起動してインストールを開始します。詳細は、[第 2.6 項「インストールの準備」](#) および[第 2.7 項「インストーラを起動する前の準備」](#) を参照してください。
- **インストール段階**: インストーラの指示に従って、Oracle Developer Suite をインストールします。詳細は[第 3 章「インストール手順」](#) を参照してください。
- **インストール後の作業**: Oracle Developer Suite のインストール後に必要な作業と設定を行います。詳細は[第 3.2 項「インストール完了後の作業」](#) を参照してください。

注意： 旧バージョンから移行またはアップグレードする場合は、インストールを開始する前に必ず[付録 A「アップグレードに関する注意」](#)をお読みください。

1.3 Oracle Developer Suite コンポーネントのインストールについて

Oracle Universal Installer によって、Oracle Developer Suite のコンポーネントがデフォルトの設定値でインストールされます。また、ローカルまたはリモート・サーバー製品にアクセスするために必要な、基本的なネットワーク要素も設定されます。

Oracle Developer Suite をインストールすれば、アプリケーションを実行またはテストするために、Oracle Application Server (OracleAS) を別にインストールする必要はありません。選択したオプションによっては、Oracle Developer Suite をインストールすると、関連する OracleAS ランタイム・サービス (OC4J、Oracle Application Server Forms Services および Oracle Application Server Reports Services) がアプリケーションのテスト用にインストールされます。ただし、実際のデプロイ環境においても、アプリケーションをテストすることをお薦めします。

一部の Oracle Developer Suite コンポーネント機能を使用するには、特定の OracleAS コンポーネントが必要です。各コンポーネントの要件の詳細は、[付録 B「コンポーネント」](#) で各コンポーネントの章を参照してください。

インストール中に、Oracle ホームの名前とパスを指定するように指示されます。1 つの Oracle ホーム・ディレクトリに複数の Oracle 製品を指定する方法や、1 台のコンピュータに複数の Oracle 製品をインストールする方法については、[第 2.4 項「1 つの Oracle ホームでの共存」](#) を参照してください。

1.4 インストール時の新機能

この項では、インストール時の新機能について説明します。この項の内容は、Oracle9i Developer Suite (Oracle9iDS) リリース 2 (9.0.2) をインストールしてあるユーザーには特に便利です。

この製品の新機能の一覧は、Oracle Technology Network Japan (<http://otn.oracle.co.jp>) をご覧ください。

説明する項目は次のとおりです。

- 第 1.4.1 項 「DVD 版インストール・ディスク」
- 第 1.4.2 項 「Solaris 6 および 7 のサポートの終了」
- 第 1.4.3 項 「SuSE SLES-7 のサポートの終了」
- 第 1.4.4 項 「オペレーティング・システムに必要となる新しいパッチ」
- 第 1.4.5 項 「インストール時の /var/tmp 領域の不要化 (UNIXのみ)」
- 第 1.4.6 項 「前提条件の確認項目の追加」
- 第 1.4.7 項 「Configuration Assistant の機能拡張」
- 第 1.4.8 項 「制限事項の廃止」

1.4.1 DVD 版インストール・ディスク

Oracle Developer Suite は、DVD ディスクにも用意しました。また、従来の CD ディスクも利用できます。DVD ディスクを使用すると、CD ディスクのようにインストールの途中でディスクを交換する必要がなくなります。

1.4.2 Solaris 6 および 7 のサポートの終了

Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) は、Solaris 8 (2.8) および Solaris 9 (2.9) で実行できることが保証されています。

Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) は、Solaris 7 (2.7)、Solaris 6 (2.6) およびそれ以前のバージョンの Solaris オペレーティング・システムをサポートしません。

1.4.3 SuSE SLES-7 のサポートの終了

SuSE Linux SLES-7 は Oracle9i Developer Suite リリース 2 (9.0.2) でサポートされていましたが、Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) からはサポートを終了しました。

注意： サポート対象の Linux x86 のソフトウェアとバージョンの詳細は、[表 2-8 「Linux x86 オペレーティング・システムのソフトウェア要件」](#) を参照してください。

1.4.4 オペレーティング・システムに必要となる新しいパッチ

Oracle9iDS リリース 2 (9.0.2) には、Java SDK 1.3.1 が付属していました。

Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) には、Linux 以外のすべてのプラットフォームに対応する Java SDK 1.4.1 が付属しています。

Linux 用には Java SDK 1.4.2 が含まれています。

これらの新バージョンの Java SDK には、サポート対象のオペレーティング・システム用に、パッチの追加または更新が必要になる場合があります。必要なパッチの一覧は、[第 2.3 項「オペレーティング・システムのソフトウェア要件」](#) を参照してください。

1.4.5 インストール時の /var/tmp 領域の不要化 (UNIX のみ)

UNIX 版の Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) では、インストール時に /var/tmp ディレクトリのディスク領域は不要です。一部のコンポーネントでは、実行時に /var/tmp に書き込む場合があります。

1.4.6 前提条件の確認項目の追加

Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) のインストールでは、従来に比べてより多くの前提条件の確認が実行され、コンピュータが最低限の要件を確実に満たすようになります。確認項目の一覧は、[第 2.7.2 項「インストーラによる前提条件の確認」](#) を参照してください。

1.4.7 Configuration Assistant の機能拡張

Configuration Assistant の新機能は次のとおりです。

- ログ・ファイルが中央の 1箇所に書き込まれるようになりました。
- ログ・ファイルに書き込まれるメッセージが、従来よりわかりやすくなりました。

これらの機能の詳細は第 D.3 項「[Oracle Developer Suite Configuration Assistant のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

1.4.8 制限事項の廃止

Oracle9i Developer Suite リリース 2 (9.0.2) に存在した制限事項がいくつか廃止され、次のようになりました。

- サイレント・インストールや非インタラクティブ・インストールで X Window が不要になりました。X Window はインタラクティブ・インストールには必要です (UNIX のみ)。

2

インストールする前に

この章では、Oracle Developer Suite のハードウェアおよびソフトウェア要件について説明します。説明する項目は次のとおりです。

- ハードウェア要件
- サポートされるオペレーティング・システム
- オペレーティング・システムのソフトウェア要件
- 1 つの Oracle ホームでの共存
- インストーラによって使用されるディレクトリ
- インストールの準備
- インストーラを起動する前の準備

2.1 ハードウェア要件

表 2-1 に、Oracle Developer Suite の基本的なハードウェア要件を示します。

表 2-1 Oracle Developer Suite のハードウェア要件

ハードウェア構成要素	要件
CPU	次のいずれか。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Pentium またはその互換プロセッサ (500 MHz 以上を推奨) ■ SPARC プロセッサ (200 MHz 以上を推奨) ■ HP PA-RISC 64 ビット・プロセッサ (300 MHz 以上を推奨)
メモリー領域	128 MB ¹
ディスク領域 ²	J2EE Development <ul style="list-style-type: none"> ■ Windows: 568 MB ■ Solaris: 528 MB ■ HP-UX: 1.1 GB³ ■ Linux: 600 MB Business Intelligence (Windows のみ) <ul style="list-style-type: none"> ■ 636 MB Rapid Application Development (Windows のみ) <ul style="list-style-type: none"> ■ 943 MB 完全 <ul style="list-style-type: none"> ■ Windows - 943 MB ■ Solaris - 865 MB ■ HP-UX: 1.6 GB³ ■ Linux: 850 MB
ページファイル・サイズ、TMP、またはスワップ領域の合計 ⁴	<ul style="list-style-type: none"> ■ Windows: 384 MB ■ UNIX: 500 MB
ディスプレイ	256 色以上の表示が可能であること。

¹ インストールに必要な最小のメモリー領域です。Oracle Developer Suite のコンポーネントをすべてインストールする場合は、これ以上のメモリー領域が必要です。各コンポーネントに必要なメモリー領域については、表 2-2 を参照してください。

² 英語のみのインストールに必要なディスク領域です。実際に必要なディスク領域は、インストール時に選択した言語によります。ただし、その場合、通常は C ドライブに、さらに 50 MB の一時ディスク領域が必要になります。

³ 他のオペレーティング・システムに比べて、HP-UX では必要なディスク領域が大きくなっています。これは HP-UX 用に、クライアント側の Oracle ライブラリが、32 ビット版と 64 ビット版両方がインストールされるためです。

⁴ マルチユーザーの UNIX 環境で Oracle9i JDeveloper を使用する場合は、1 GB のスワップ領域を使用してください。

表 2-2 に、Oracle Developer Suite の各コンポーネントに必要なメモリー領域を示します。

表 2-2 Oracle Developer Suite のコンポーネントに必要なメモリー領域

コンポーネント	メモリー領域
Oracle9i JDeveloper (Oracle Business Intelligence Beans を含む)	<ul style="list-style-type: none"> ■ 最小 : 256 MB ■ 推奨 : 512 MB
Oracle Reports Developer	<ul style="list-style-type: none"> ■ 最小 : 128 MB ■ 推奨 : 256 MB
Oracle Discoverer Administrator	<ul style="list-style-type: none"> ■ 最小 : 128 MB ■ 推奨 : 256 MB
Oracle Discoverer Desktop	128 MB
Oracle Forms Developer	<ul style="list-style-type: none"> ■ 最小 : 128 MB ■ 推奨 : 256 MB
Oracle Software Configuration Manager	256 MB
Oracle Designer	256 MB

2.2 サポートされるオペレーティング・システム

Oracle Developer Suite は、Microsoft Windows NT/2000/XP Professional、Sun Solaris、HP PA-RISC HP-UX (64 ビット) および Linux x86 の各オペレーティング・システムで使用できます。表 2-3 に、オペレーティング・システムと、各オペレーティング・システムにおいてサポートされる Oracle Developer Suite コンポーネントを示します。

注意： このドキュメントでは、「Linux」は Linux x86 オペレーティング・システムを指します。

表 2-3 オペレーティング・システムと Oracle Developer Suite コンポーネント

コンポーネント	NT/2000/XP Professional	Solaris	Linux	HP-UX
Oracle9i JDeveloper (Oracle Business Intelligence Beans と、UIX および Bali のサブコンポーネントを含む)	○	○	○	×
Oracle Reports Developer	○	○	×	○
Oracle Discoverer Administrator (従来の Discoverer Administration Edition に相当)、Oracle Discoverer Desktop を含む	○	×	×	×
Oracle Forms Developer	○	○	×	○
Oracle Software Configuration Manager	○	×	×	×
Oracle Designer	○	×	×	×

UNIX に関する注意

- UNIX 版 Oracle9i Developer Suite リリース 2 (9.0.2) には、Windows 版のコンポーネントもすべて同梱されていました。ただし、Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) の Windows 版コンポーネントは、初期の UNIX 版に含まれていない場合があります。
- JDeveloper では、次の UNIX デスクトップが動作確認されています。
 - Solaris/CDE
 - Linux/GNOME
 - Linux/KDE2

2.3 オペレーティング・システムのソフトウェア要件

この項では、Windows、Solaris、HP-UX および Linux の各オペレーティング・システム要件について説明します。

2.3.1 Windows オペレーティング・システム

表 2-4 に、Windows オペレーティング・システムに Oracle Developer Suite をインストールするためのソフトウェア要件を示します。

表 2-4 Oracle Developer Suite の Windows ソフトウェア要件

ソフトウェア構成要素	要件
Windows オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Windows NT 4.0 Service Pack 6a ■ Microsoft Windows 2000 Service Pack 3 以降 ■ Microsoft Windows XP Professional Edition Service Pack 1 以降

注意： Windows の新しいバージョンでは、C 以外のドライブをシステム・ドライブとして使用できます。このマニュアルでは、システム・ドライブを「デフォルトのシステム・ドライブ」と記載しています。そのため、デフォルトのシステム・ドライブには C 以外のドライブも使用できます。

ただし、このマニュアルに含まれるほとんどの例では、デフォルトのシステム・ドライブに C が使用されています。

2.3.2 Sun SPARC ワークステーション用の Solaris オペレーティング・システム

Sun SPARC ワークステーションで実行される Solaris に Oracle Developer Suite をインストールする場合は、Solaris 8 (2.8) または Solaris 9 (2.9) のいずれかである必要があります。表 2-5 に、Oracle Developer Suite をインストールするための Solaris のパッチセット要件を示します。パッチは次の Web サイトからダウンロードできます。

<http://sunsolve.sun.com/pub-cgi/show.pl?target=patches/J2SE>

注意： Solaris で実行される Oracle9i JDeveloper には、CDE Windows manager が必要です。

表 2-5 Solaris オペレーティング・システムのパッチセット要件

ソフトウェア構成要素	要件
Solaris 8 (2.8)	<ul style="list-style-type: none"> ■ 108652-74: X11 6.4.1: Xsun ■ 108921-17: CDE 1.4: dtwm ■ 108940-57: Motif 1.2.7 and 2.1.1: Runtime library patch ■ 112003-03 Unable to load fontset in 64-bit Solaris 8 iso-1 or iso-15 ■ 108773-18: IIIM and X input & output method ■ 112138-01: usr/bin/domainname patch ■ 111310-01 /usr/lib/libdhcpagent.so.1 ■ 109147-26 linker ■ 111308-04 /usr/lib/libm_malloc.so.1 ■ 112438-02 /kernel/drv/random ■ 108434-13: 32-bit shared library patch for C++ ■ 111111-03 /usr/bin/nawk ■ 112396-02 /usr/bin/fgrep ■ 110386-03 RBAC Feature ■ 111023-02 /kernel/fs/mntfs, /kernel/fs/sparcv9/mntfs ■ 108987-13 Patch for patchadd and patchrm ■ 108528-24: kernel update ■ 108989-02 /usr/kernel/sys/acctl, /usr/kernel/sys/exacctsys ■ 108993-26 LDAP2 client, libc, libthread and libnsl libraries
Solaris 9 (2.9)	<ul style="list-style-type: none"> ■ 113096-03: X11 6.6.1:OWconfig ■ 112785-26 X11 6.6.1:Xsun

表 2-6 に、Oracle Developer Suite をインストールする場合の、Solaris 8 (2.8) および Solaris 9 (2.9) のパッケージの要件を示します。コンピュータにオペレーティング・システムのパッケージがインストールされていることを確認するには、そのパッケージ名を指定して `pkginfo` コマンドを実行します。このコマンドは、記載されているパッケージごとに実行してください。`pkginfo` の構文は次のとおりです。

```
pkginfo package_name
```

次に例を示します。

```
prompt>pkginfo SUNWarc
```

コンピュータにパッケージがインストールされていない場合は、システム管理者に連絡してください。

表 2-6 Solaris オペレーティング・システムのパッケージ要件

ソフトウェア構成要素	要件
Solaris 8 (2.8)	<ul style="list-style-type: none"> ■ SUNWarc ■ SUNWbtool ■ SUNWhea ■ SUNWlibm ■ SUNWlibms ■ SUNWsprot ■ SUNWsprox ■ SUNWtoo ■ SUNWi1of ■ SUNWxwfnt ■ SUNWi1cs ■ SUNWi15cs
Solaris 9 (2.9)	<ul style="list-style-type: none"> ■ SUNWarc ■ SUNWbtool ■ SUNWhea ■ SUNWlibm ■ SUNWlibms ■ SUNWsprot ■ SUNWsprox ■ SUNWtoo ■ SUNWi1of ■ SUNWxwfnt ■ SUNWi1cs ■ SUNWi15cs

2.3.3 HP-UX オペレーティング・システム

HP PA-RISC HP-UX (64 ビット) オペレーティング・システムに Oracle Developer Suite をインストールする場合は、バージョン 11.00 またはバージョン 11.11 のいずれかである必要があります。表 2-7 に、Oracle Developer Suite をインストールするための HP-UX オペレーティング・システムの要件を示します。

ティング・システムのソフトウェア要件を示します。HP-UX 用のパッチ・ファイルは、<http://itresourcecenter.hp.com> からダウンロードできます。

表 2-7 HP-UX オペレーティング・システムのソフトウェア要件

ソフトウェア構成要素	要件
HP-UX オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"> ■ HP PA-RISC HP-UX 11.00 (64 ビット) ■ HP PA-RISC HP-UX 11.11 (64 ビット)
HP-UX 11.00 のパッチ・ファイル	<ul style="list-style-type: none"> ■ Sept 2002 Quality Pack (QPK1100 B.11.00.58.5) ■ PHKL_27813 ■ PHSS_26559 ■ PA-RISC 用 Java 2 SDK 1.4.1.05 に必要な HP-UX 11.00 のパッチ・ファイル (http://www.hp.com/products1/unix/java/patches/index.html、または http://www.hp.com/products1/unix/java/java2/sdkrtel4/downloads/index.html を参照)
HP-UX 11.00 のソフトウェアおよびパッケージ	<ul style="list-style-type: none"> ■ PA-RISC 用 HP Java 2 SDK 1.4.1 (バージョン 1.4.1.05 以降) ■ X11MotifDevKit (B.11.00.01 以降)
HP-UX 11.11 のパッチ・ファイル	<ul style="list-style-type: none"> ■ Dec 2001 Consolidate Patches (Dec01GQPK11i_Aux_Patch B.03.02.06) ■ PHKL_25212 ■ PHKL_25506 ■ PHKL_27091 ■ PHKL_28267 ■ PHNE_28089 ■ PHSS_24638 ■ PHSS_26263 ■ PHSS_26792 ■ PHSS_26793 ■ PA-RISC 用 Java 2 SDK 1.4.1.05 に必要な HP-UX 11.11 のパッチ・ファイル (http://www.hp.com/products1/unix/java/patches/index.html、または http://www.hp.com/products1/unix/java/java2/sdkrtel4/downloads/index.html を参照)

表 2-7 HP-UX オペレーティング・システムのソフトウェア要件（続き）

ソフトウェア構成要素	要件
HP-UX 11.11 のソフトウェアおよびパッケージ	<ul style="list-style-type: none"> ■ PA-RISC 用 HP Java 2 SDK 1.4.1（バージョン 1.4.1.05 以降） ■ X11MotifDevKit (B.110.11.01 以降)

2.3.4 Linux オペレーティング・システム

表 2-8 に、Linux x86 オペレーティング・システム上で Oracle Developer Suite をインストールするためのソフトウェア要件を示します。Red Hat Linux のパッチ・ファイルの詳細は、<http://www.redhat.com> を参照してください。United Linux のパッチ・ファイルの詳細は、<http://www.unitedlinux.com> を参照してください。

表 2-8 Linux x86 オペレーティング・システムのソフトウェア要件

ソフトウェア構成要素	要件
Linux x86 オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"> ■ Red Hat Enterprise Linux AS 2.1 ■ Red Hat Enterprise Linux ES 2.1 ■ United Linux 1.0
Red Hat Linux オペレーティング・システムに対するパッチ	Kernel Errata 25 (2.4.9-e.25)
Red Hat Linux オペレーティング・システムのソフトウェアおよびパッケージ	<ul style="list-style-type: none"> ■ gcc-2.96 ■ pdksh-5.2.14 ■ openmotif-2.1.30 ■ XFree86-4.1.0
United Linux オペレーティング・システムのソフトウェアおよびパッケージ	<ul style="list-style-type: none"> ■ gcc_old-2.95 ■ pdksh-5.2.14 ■ openmotif-2.1.30 ■ xf86-4.2.0

2.4 1 つの Oracle ホームでの共存

この項では、1 つの Oracle ホームに複数の Oracle 製品を指定する方法や、1 台のコンピュータに複数の Oracle 製品をインストールする方法について説明します。

2.4.1 Oracle ホームに関する注意事項

Oracle ホームは、Oracle ソフトウェアのインストール先となる最上位ディレクトリです。

- Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) と、旧バージョン (Oracle9iDS リリース 2 (9.0.2) または Oracle Internet Developer Suite リリース 1.0.2.x) とは、同じ Oracle ホームに共存できません。
- Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) と、Oracle9i Database リリース 2 などの Oracle データベースとは、同じ Oracle ホームに共存できません。
- Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) と、Oracle Application Server Forms および Reports Services 10g のスタンドアロン・サーバー・インスタンスとは、同じ Oracle ホームに共存できません。
- Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) と Oracle Application Server 10g (9.0.4) (Oracle Application Server Infrastructure を除く) とは、同じ Oracle ホームに共存できます。

注意： 前述のバージョン以外の Oracle Application Server には、この注意事項は該当しません。

- **UNIX のみ**：Oracle Developer Suite をインストールしようとしているコンピュータに、すでに Oracle ホームが設定されている場合は、[第 2.6.5.1.1 項「他の Oracle ホームとの競合回避」](#) を参照してください。

このマニュアルで記載されているディレクトリ・パスには、`oracle_home` という表記が含まれています。この表記部分には実際の Oracle ホーム・ディレクトリを指定してください。

2.4.2 Oracle Developer Suite の複数インストールの実行

Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) の複数のインスタンスを同じコンピュータにインストールする場合は、次のガイドラインに従ってください。また、Oracle9iDS または Oracle Internet Developer Suite がすでにインストールされているコンピュータに、Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) をインストールする場合も、このガイドラインが適用されます。

1. Oracle Developer Suite を初めてインストールした後は、コンピュータを再起動してください。
2. すべてのインストールに十分なディスク領域があるかどうかを確認します。必要なディスク領域については、[表 2-1](#) を参照してください。

3. 後からインストールするインスタンスは、その前のインスタンスとは異なる Oracle ホームにインストールします。
4. 最後のインストールが終わったら、コンピュータを再起動します（Windows のみ）。

2.4.3 Oracle Developer Suite のインストールと Oracle データベース

注意： Oracle Developer Suite は、Oracle データベースと同じ Oracle ホームにインストールできません。

Oracle Developer Suite をインストールするコンピュータに、すでに Oracle データベースがインストールされている場合、または後から Oracle データベースをインストールする予定がある場合は、次のガイドラインに従ってください。

- 両方のインストールに十分なディスク領域があるかどうかを確認します。必要なディスク領域については、該当する Oracle データベースのインストレーション・ガイドと、このガイドの表 2-1 を参照してください。
- **Windows のみ**：Oracle データベースをまだインストールしていない場合は、Oracle データベースを先にインストールし、データベースのインストールが完了したらそのコンピュータを再起動します。
- Oracle Developer Suite は、Oracle データベースと異なる Oracle ホームにインストールします。
- **Windows のみ**：Oracle Developer Suite をインストールした後、コンピュータを再起動します。

2.5 インストーラによって使用されるディレクトリ

インストーラは次のディレクトリにファイルを書き込みます。

表 2-9 インストーラによって使用されるディレクトリ

ディレクトリ	説明
Oracle ホーム・ディレクトリ	このディレクトリには、Oracle Developer Suite のファイルが格納されています。このディレクトリは、Oracle Developer Suite のインストール時に指定します。詳細は第 2.4.1 項「Oracle ホームに関する注意事項」を参照してください。
インベントリ・ディレクトリ	インストーラでは、このディレクトリを使用して、コンピュータにインストールされている Oracle 製品が追跡されます。2 回目以降のインストールでは、同じインベントリ・ディレクトリが使用されます。詳細は第 2.7.3 項「インストーラのインベントリ・ディレクトリ」を参照してください。

表 2-9 インストーラによって使用されるディレクトリ（続き）

ディレクトリ	説明
UNIX のみ： /var/opt/oracle ディレクトリまたは /etc ディレクトリ	このディレクトリには、使用している UNIX コンピュータの Oracle ホームの場所に関する情報が格納されています。詳細は第 2.7.3 項「インストーラのインベントリ・ディレクトリ」を参照してください。 注意 ：Windows コンピュータでは、この情報は Windows レジストリに格納されています。
UNIX のみ： /tmp ディレクトリ	インストーラは、インストール時にのみ必要なファイルを、一時ディレクトリに書き込みます。デフォルトでは、一時ディレクトリは /tmp です。他のディレクトリを指定するには、TMP 環境変数を設定します。
Windows のみ： 一時ディレクトリ	インストーラは、インストール時にのみ必要なファイルを、一時ディレクトリに書き込みます。これには、%TEMP% システム環境変数で指定したディレクトリが使用されます。

2.6 インストールの準備

Oracle Developer Suite をインストールする前に、Oracle Developer Suite のリリース・ノートをお読みください。最新のリリース・ノートおよびリリース・ノートの補足は、次の Oracle Technology Network Japan サイトから入手できます。

<http://otn.oracle.co.jp>

Oracle Developer Suite をインストールする前に、次の準備作業を行います。

- 全般的なチェックリスト
- ロケールの設定
- ユーザー補助機能の使用（Windows のみ）
- Java Access Bridge のインストール（Windows のみ）
- 環境変数の設定（UNIX のみ）
- UNIX のアカウントおよびグループの作成
- コンポーネント別のインストール準備作業
- インストール中に必要な情報
- システムの移行またはアップグレード

2.6.1 全般的なチェックリスト

1. HP-UX のみ
 - a. PA-RISC ベースの HP (使用しているオペレーティング・システムのバージョンに応じた HP-UX 11.00 または HP-UX 11.11) 用 Java 2 SDK 1.4.1 (バージョン 1.4.1.05 以降) を、
<http://www.hp.com/products1/unix/java/java2/sdkrte14/index.html> からダウンロードします。
 - b. SDK をインストールします。
2.
 - Windows NT、2000 または XP Professional を使用している場合は、Administrators グループのメンバーとしてコンピュータにログインしてください。
 - UNIX の場合、root ユーザーとしてログインしないでください。root ユーザーとしてログインすると、インストーラを実行できません。詳細は第 2.6.6 項「UNIX のアカウントおよびグループの作成」を参照してください。
 - 環境変数 PATH、CLASSPATH、LD_LIBRARY_PATH (UNIX のみ)、および SHLIB_PATH (HP-UX のみ) の値は、1,024 文字以内で指定します。これを超えると、インストール中に「Word too long」というエラーが発生する可能性があります。
 - Oracle のサービスおよびプロセスをすべて停止し、その他に実行中のアプリケーションもすべて終了します。

2.6.2 ロケールの設定

インストーラのユーザー・インターフェース言語には、Java Virtual Machine (JVM) のロケールの設定が反映されます。このロケール設定は、オペレーティング・システムのロケールに基づいています。特定のロケールでインストーラを実行するには、インストーラを起動する前にオペレーティング・システムのロケールを設定します。

インストーラは表 2-10 に記載されているロケール言語をサポートしています。

表 2-10 インストーラで表示できる言語

言語	ISO-639 言語コード
英語	en
フランス語	fr
ドイツ語	de
イタリア語	it
日本語	ja

表 2-10 インストーラで表示できる言語（続き）

言語	ISO-639 言語コード
韓国語	ko
ポルトガル語（ブラジル）	pt_BR
簡体字中国語	zh_CN
繁体字中国語	zh_TW

使用しているロケールがこの表に記載されていない場合は、インストーラは英語で表示されます。

2.6.3 ユーザー補助機能の使用（Windows のみ）

スクリーン・リーダーなどのユーザー補助機能を使用して Java ベースのアプリケーションやアプレットを利用する場合は、事前に `access_setup.bat` を実行してください。このファイル `access_setup.bat` は、CD-ROM Disk 1 または DVD の次の場所にあります。

メディア	ファイルの場所
CD-ROM	<code>\install\win32</code>
DVD	<code>\developer_suite\install\win32</code>

2.6.4 Java Access Bridge のインストール（Windows のみ）

スクリーン・リーダーなどのユーザー補助機能を使用して Java ベースのアプリケーションやアプレットで作業する場合、Oracle Developer Suite をインストールする Windows ベースのコンピュータ上のすべての Java 仮想マシンに、Sun の Java Access Bridge がインストールされている必要があります。

インストーラを実行すると、コンピュータに JDK/JRE 1.4.1 および JDK/JRE 1.1.8 用のファイルがインストールされます。ただし、Java Access Bridge 1.0.3 用のファイルは、JDK/JRE 1.4.1 の環境にしかインストールされません。

ユーザー補助機能を使用する場合は、次のいずれかの手順を行います。

- コンピュータに JDK/JRE 1.1.8 がインストールされていない場合

インストールを続行します。Oracle Developer Suite のインストール終了後、すべての JDK/JRE 環境に Java Access Bridge 1.0.3 がインストールされていることを確認します。これで、ユーザー補助機能を必要とするアプリケーションはすべて正しく動作します。

- コンピュータに JDK/JRE 1.1.8 がインストールされている場合

Oracle Developer Suite をインストールする前に、JDK/JRE 1.1.8 のある場所に、Java Access Bridge 1.0.2 の製品版をインストールする必要があります。

Java Access Bridge 1.0.2 をダウンロードしてインストールするには、次の手順を行います。

1. Java Access Bridge 1.0.2 の ZIP ファイルを、次の Web サイトからダウンロードします。

<http://java.sun.com/products/accessbridge/>

インストール手順などの詳細は、前述の Web サイトにある Java Access Bridge 関連ドキュメントを参照してください。

2. ダウンロードしたファイルを、`accessbridge_home` などのフォルダに展開します。
3. `accessbridge_home\installer` フォルダにある `install.exe` を実行して、Java Access Bridge をインストールします。
`accessbridge_home` は、前述の手順で作成したフォルダです。
4. ダイアログ・ポップスに表示される各 Java 仮想マシンに、Java Access Bridge をインストールするかどうかを指定します。

注意： バージョンが 1.1.18 以降の Java 仮想マシンには、Java Access Bridge 1.0.2 をインストールしないでください。

5. 「Installation Completed」というメッセージが表示されたら、「OK」をクリックします。

2.6.5 環境変数の設定（UNIX のみ）

以下の作業は UNIX プラットフォームのみに必要です。

2.6.5.1 ORACLE_HOME

2.6.5.1.1 他の Oracle ホームとの競合回避

Oracle Developer Suite のインストール時に、既存の Oracle ホーム内のソフトウェアとの競合を避けるため、環境内の既存の Oracle ホームへの参照をすべて削除する必要があります。これらの参照を削除するには、次の手順を行います。

1. 次のコマンドを使用して、既存の Oracle ホーム変数の設定を解除します。

C シェル	Bourne/Korn シェル
<code>prompt> unsetenv ORACLE_HOME</code>	<code>prompt> ORACLE_HOME=; export ORACLE_HOME</code>

2. PATH、CLASSPATH、LD_LIBRARY_PATH および SHLIB_PATH (HP-UX のみ) の各環境変数で、環境変数 ORACLE_HOME への参照をすべて削除します。

2.6.5.2 DISPLAY

DISPLAY 環境変数を設定すると、ローカル・コンピュータからインストーラをリモートで実行し、インストーラの UI を表示できます。

リモート・コンピュータで、DISPLAY 環境変数にローカル・コンピュータのシステム名または IP アドレスを設定します。

注意: PseudoColor カラー・モデルまたは PseudoColor ビジュアルをサポートする場合、PC の X エミュレータを使用してインストールを実行することができます。PC の X エミュレータで PseudoColor ビジュアルを使用できるように設定してから、インストーラを起動してください。カラー・モデルやビジュアル設定の変更方法については、X エミュレータのドキュメントを参照してください。

インストーラの起動時に、「Failed to connect to server」、「Connection refused by server」または「Can't open display」などの Xlib エラー・メッセージが表示された場合は、ローカル・コンピュータで次のコマンドを実行してください。

シェル・タイプ	リモート・コンピュータ	ローカル・コンピュータ
C シェル	<code>prompt> setenv DISPLAY hostname:0.0</code>	<code>prompt> xhost + server_name</code>
Bourne/ Korn シェル	<code>prompt> DISPLAY=hostname:0.0; export DISPLAY</code>	<code>prompt> xhost + server_name</code>

2.6.5.3 TMP

インストール中、スワップ用に一時ディレクトリが使用されます。インストールを開始する前に、一時ディレクトリが表 2-1 に示したハードウェア要件を満たしていることを確認する必要があります。十分な領域がないと、インストールに失敗することがあります。インストーラは、TMP 環境変数を参照して一時ディレクトリの場所を判断します。この環境変数が設定されていない場合は、/tmp ディレクトリが使用されます。

TMP 環境変数を設定するには、次の手順を行います。

C シェル	Bourne/Korn シェル
<code>prompt> setenv TMP full_path</code>	<code>prompt> TMP=full_path; export TMP</code>

2.6.5.4 TNS_ADMIN

TNS_ADMIN は、ネットワーク設定ファイルが格納されたディレクトリを指定する環境変数です。

コンピュータの既存のディレクトリに TNS_ADMIN を設定した場合、そのディレクトリと Oracle Developer Suite のネットワーク設定ファイルが作成されたディレクトリとが競合します。また、設定ファイルが他の Oracle 製品の Oracle ホーム以外の共通ディレクトリ内にある場合も、競合する可能性があります。たとえば、データベースのエイリアス設定用に、`/var/opt/oracle/tnsnames.ora` を使用する場合などです。

他の Oracle 製品用のネットワーク設定ファイルとの競合を避けるため、既存の TNS_ADMIN ディレクトリまたは共通ディレクトリにある既存の設定ファイルを、その製品の `oracle_home/network/admin` にコピーし、次のコマンドを使用して TNS_ADMIN 環境変数の設定を解除します。

C シェル	Bourne/Korn シェル
<code>prompt> unsetenv TNS_ADMIN</code>	<code>prompt> TNS_ADMIN=;export TNS_ADMIN</code>

2.6.6 UNIX のアカウントおよびグループの作成

以下の作業は UNIX プラットフォームのみに必要です。

2.6.6.1 インストーラのインベントリの UNIX グループ名

`oraInventory` ディレクトリに対して読み取りおよび書き込みのアクセス権を持つグループを作成します。インストーラでは、`oraInventory` ディレクトリを使用して、コンピュータにインストールされている Oracle 製品が追跡されます。ユーザーに `oraInventory` への書き込みアクセス権を与えると、そのユーザーはコンピュータに Oracle 製品をインストールできるようになります。したがって、そのようなユーザーはすべて同じグループのメンバーにしておきます。このマニュアルでは、このグループを `devsuitegrp` グループと呼称します。

オペレーティング・システムのユーティリティを使用して、このグループを作成します。次に例を示します。

- Solaris の場合は、`admintool` ユーティリティまたは `groupadd` ユーティリティ
- HP-UX の場合は、`SAM` ユーティリティ

- Linux x86 の場合は、/usr/sbin/groupadd および /usr/sbin/useradd

これらのユーティリティについては、オペレーティング・システムのドキュメントに記載されています。

devsuitegrp グループは、インストーラの oraInventory ディレクトリを所有します。Oracle のインストールを実行するすべてのユーザー・アカウントは、devsuitegrp グループのメンバーである必要があります。

2.6.6.2 Oracle ソフトウェアの UNIX ユーザー

このコンピュータに Oracle ソフトウェアを初めてインストールする場合は、最初に新規のユーザーを作成することをお薦めします。Oracle ソフトウェアのインストールと管理には、この新規のユーザーを使用してください。

表 2-11 に示すように、ユーザーの属性を指定します。

表 2-11 oracle アカウントの属性

変数	属性
名前	任意の名前を指定します。このマニュアルでは、oracle という名前を使用します。
グループ識別子	devsuitegrp グループ。
ホーム・ディレクトリ	他のユーザー・ホーム・ディレクトリと同じホーム・ディレクトリを選択します。oracle アカウントのホーム・ディレクトリは、Oracle ホームのディレクトリと同じである必要はありません。
ログイン・シェル	デフォルトのシェルは、C シェル、Bourne シェル、Korn シェルのいずれかです。

注意： このユーザーを使用するのは、Oracle ソフトウェアのインストールと管理だけです。インストーラと関係のない作業には使用しないでください。また、oracle ユーザーに root を使用しないでください。

2.6.7 コンポーネント別のインストール準備作業

ここに記載されていないコンポーネントには、コンポーネント固有のインストール準備作業は必要ありません。

2.6.7.1 Oracle Software Configuration Manager

インストールの準備作業は必要ありません。

ただし、Software Configuration Manager を有効に活用するため、『Oracle Software Configuration Manager Repository インストレーション・ガイド』をお読みください。この

ドキュメントは、Oracle Developer Suite のインストール後、Windows のスタート・メニューから参照できます。

2.6.8 インストール中に必要な情報

インストーラによってインストール画面が表示されます。オペレーティング・システムや選択したインストール・オプションに応じて、表 2-12 に示す情報が必要になります。

表 2-12 インストール中に必要な情報

項目	インストール・タイプ	例
Oracle Developer Suite の Oracle ホーム名とパス ¹	すべて (Windows および UNIX)	名前: DevSuiteHome パス: C:\DevSuiteHome または /private/DevSuiteHome
UNIX グループ名	すべて (UNIX のみ)	devsuitegrp
送信メール・サーバー名	Business Intelligence、Rapid Application Development、完全 (Windows および UNIX)。注意: このメール・サーバーを使用するのは Oracle Application Server Reports Services だけです。	mysmtp01.mycorp.com
Java SDK ディレクトリ	すべて (HP-UX のみ)	/opt/java/java.1.4.1

¹ 詳細は第 2.4.1 項「Oracle ホームに関する注意事項」を参照してください。

2.6.9 システムの移行またはアップグレード

次のシステムから移行またはアップグレードする場合は、付録 A 「アップグレードに関する注意」を参照してください。

- Oracle9iDS リリース 2 (9.0.2)
- Oracle Internet Developer Suite リリース 1 (Oracle9i Developer Suite の旧バージョン)
- Oracle Developer Suite コンポーネント (Oracle JDeveloper や Oracle Software Configuration Manager など) の 9.0.3 以前のバージョン

2.7 インストーラを起動する前の準備

この項では、Oracle Universal Installer の概要と、インストールを開始する前に知っておくべきことについて説明します。

2.7.1 Oracle Universal Installerについて

Oracle Developer Suite では、Oracle Universal Installer (OUI) を使用してコンポーネントのインストールおよび環境変数の設定を行います。OUI の指示に従ってインストールを行います。

OUIにより、次の作業が自動化されます。

- インストール先のコンピュータのオペレーティング・システムに基づき、製品のインストール・オプションを設定
- 既定の環境変数および構成設定の検出
- インストール中に環境変数および構成を設定
- 製品のアンインストール

2.7.2 インストーラによる前提条件の確認

インストールを開始する前に、インストーラによってコンピュータの前提条件が自動的に確認されます。次の表に、インストーラによって実行される前提条件の確認内容を示します。

表 2-13 に、Windows で自動的に実行される前提条件の確認を示します。

表 2-13 インストーラによる前提条件確認 (Windows)

前提条件の確認	関連項目
256 色以上の表示が可能か	表 2-1 「Oracle Developer Suite のハードウェア要件」
最低限の CPU 速度を満たしているか	表 2-1 「Oracle Developer Suite のハードウェア要件」
オペレーティング・システムの要件を満たしているか	<ul style="list-style-type: none">■ 表 2-3 「オペレーティング・システムと Oracle Developer Suite コンポーネント」■ 表 2-4 「Oracle Developer Suite の Windows ソフトウェア要件」

表 2-14 に、Sun SPARC コンピュータの Solaris で自動的に実行される前提条件の確認を示します。

表 2-14 インストーラによる前提条件確認 (Solaris)

前提条件の確認	関連項目
256 色以上の表示が可能か	表 2-1 「Oracle Developer Suite のハードウェア要件」
最低限のスワップ領域があるか	表 2-1 「Oracle Developer Suite のハードウェア要件」

表 2-14 インストーラによる前提条件確認（Solaris）（続き）

前提条件の確認	関連項目
最低限の CPU 速度を満たしているか	表 2-1 「Oracle Developer Suite のハードウェア要件」
オペレーティング・システムの要件を満たしているか	<ul style="list-style-type: none"> ■ 表 2-3 「オペレーティング・システムと Oracle Developer Suite コンポーネント」 ■ 表 2-5 「Solaris オペレーティング・システムのパッチセット要件」 ■ 表 2-6 「Solaris オペレーティング・システムのパッケージ要件」

表 2-15 に、Linux x86 で自動的に実行される前提条件の確認を示します。

表 2-15 インストーラによる前提条件確認（Linux）

前提条件の確認	関連項目
最低限のスワップ領域があるか	表 2-1 「Oracle Developer Suite のハードウェア要件」
最低限の CPU 速度を満たしているか	表 2-1 「Oracle Developer Suite のハードウェア要件」
オペレーティング・システムの要件を満たしているか	<ul style="list-style-type: none"> ■ 表 2-3 「オペレーティング・システムと Oracle Developer Suite コンポーネント」 ■ 表 2-8 「Linux x86 オペレーティング・システムのソフトウェア要件」

表 2-16 に、HP-UX で自動的に実行される前提条件の確認を示します。

表 2-16 インストーラによる前提条件確認（HP-UX）

前提条件の確認	関連項目
最低限のスワップ領域があるか	表 2-1 「Oracle Developer Suite のハードウェア要件」
最低限の CPU 速度を満たしているか	表 2-1 「Oracle Developer Suite のハードウェア要件」
オペレーティング・システムの要件を満たしているか	<ul style="list-style-type: none"> ■ 表 2-3 「オペレーティング・システムと Oracle Developer Suite コンポーネント」 ■ 表 2-7 「HP-UX オペレーティング・システムのソフトウェア要件」

2.7.3 インストーラのインベントリ・ディレクトリ

コンピュータで最初に OUI を実行したとき、インベントリ・ディレクトリが作成されます。インベントリ・ディレクトリには、OUI によってインストールされた製品、およびその他のインストール情報が記録されます。以前にコンピュータに Oracle 製品をインストールしたことがある場合、インベントリ・ディレクトリがすでに存在する可能性があります。

インベントリ・ディレクトリについて、次の要点を理解しておいてください。

- インベントリ・ディレクトリやその内容を削除したり、変更したりしないでください。コンピュータにインストール済の製品の場所を、OUI が認識できなくなることがあります。
- Windows の場合、最初にコンピュータに Oracle 製品をインストールしたときに、インストーラによってインベントリ・ディレクトリが、`system_default_drive:¥Program Files¥Oracle¥Inventory` として自動的に作成されます。`system_default_drive` の値は通常「C:」で、Windows レジストリに設定されています。
- UNIX の場合、ディレクトリのデフォルトの場所は、`/var/opt/oracle/oraInst.loc` (Linux では `/etc/oraInst.loc`) ファイルに記述されています。コンピュータに初めて Oracle 製品をインストールする場合は、既存のディレクトリをインベントリ・ディレクトリとして使用するかどうかを尋ねられます。その後、インストーラによって `oraInst.loc` が作成され、そのファイルにインベントリ・ディレクトリが記述されます。
- インストール中に UNIX グループ名を指定すると、そのグループに属するすべてのユーザーに対して、`oraInventory` ディレクトリの書き込み権限が与えられます。後から別のユーザーがインストーラを起動する場合、そのユーザーは、`oraInventory` ディレクトリに対してユーザーレベルの書き込み権限を持っているか、インストール中に指定したグループに属している必要があります。権限がなければインストール処理は失敗します。

この操作のログは、インストーラによって、`system_default_drive:¥Program Files¥Oracle¥Inventory¥logs` ディレクトリ (Windows)、または `inventory_location/logs` ディレクトリ (UNIX) のファイルに格納されます。ログ・ファイルの名前は次の形式になります。

`installActionsyear-date_time.log`

2.7.4 インストーラの起動

Oracle Universal Installer (OUI) を起動するには、次の手順を行います。

2.7.4.1 Windows の場合

注意： インストール中に Windows システム・ファイル・エラーが発生した場合は、「OK」をクリックしてエラー・ダイアログ・ボックスを閉じ、Windows システム・ファイルのインストールを実行してください（インストール方法については後述します）。

1. Oracle データベースなど、Oracle 関連のサービスをすべて停止します。
2. **CD-ROM の場合：**「Disk 1」のラベルが付いた Oracle Developer Suite CD-ROM を、コンピュータの CD-ROM ドライブに挿入します。
DVD の場合：「Oracle Developer Suite and Documentation」のラベルの付いた Oracle Developer Suite DVD を、コンピュータの DVD ドライブに挿入します。
3. **CD-ROM の場合：**自動実行機能を使用していない場合は、CD-ROM のルート・ディレクトリでプログラム `setup.exe` を検索します。このプログラムを実行してインストーラを起動します。
DVD の場合：自動実行機能を使用していない場合は、DVD のルート・ディレクトリの下にあるディレクトリ `\developer_suite` で、プログラム `setup.exe` を検索します。このプログラムを実行してインストーラを起動します。
4. 自動実行機能を使用している場合は、インストーラは自動的に起動します。Oracle Developer Suite のインストールをクリックして、インストールを開始します。
5. **Windows のユーザー補助機能を使用している場合：**CD-ROM または DVD を挿入した直後に [Shift] キーを押し、自動実行機能を使用不可にします。自動実行のウィンドウが開いた場合は、[ALT]+[F4] キーを押して閉じます。次のいずれかの操作を行います。
 - a. **CD-ROM の場合：**Oracle Developer Suite をインストールするには、CD-ROM のルート・ディレクトリでプログラム `setup.exe` を検索します。このプログラムを実行してインストーラを起動します。
DVD の場合：Oracle Developer Suite をインストールするには、DVD のルート・ディレクトリの下にある `\developer_suite` ディレクトリで、プログラム `setup.exe` を検索します。このプログラムを実行してインストーラを起動します。
 - b. CD-ROM または DVD の内容を確認する場合は、Windows エクスプローラを使用します。
 - c. Oracle Developer Suite についての情報を得るには、CD-ROM の `\doc\welcome\index.htm`、または DVD の `\developer_suite\doc\welcome\index.htm` を参照します。

第 3.1 項 「[Oracle Developer Suite のインストール](#)」の手順に進んで続行します。

2.7.4.1.1 Windows システム・ファイルのインストール

Oracle Developer Suite では、Windows システム・ディレクトリ内に必要なファイルがいくつかあります。Oracle Developer Suite のインストール中、コンピュータにすでに存在するファイルが、Oracle Developer Suite の要件を満たすかどうか確認されます。ファイルが存在しない場合や、存在しても要件を満たさない場合は、必要なファイルがインストールされます。

要件を満たさないファイルが、インストール時に他のプロセスで使用中の場合、インストーラが停止し、エラー・ダイアログ・ボックスが表示されます。これは、更新したファイルを有効にするために Windows を再起動する必要があるからです。インストーラは、自動的にシャットダウンしてシステムの再起動後に再び起動することはできません。

Oracle Developer Suite には、必要な Windows システム・ファイルの補足インストール機能も含まれています。インストールが終了すると、必要に応じてコンピュータが自動的に再起動されます。

Oracle Developer Suite のインストール中に Windows システム・ファイル・エラーが発生した場合は、「OK」をクリックしてエラー・ダイアログ・ボックスを閉じ、次の手順に従って Windows システム・ファイルのインストールを開始します。Windows システム・ファイルのインストールを実行しないと、Oracle Developer Suite のインストールを続行できません。

Windows システム・ファイルのインストールを開始するには、次の手順を行います。

1. 「終了」をクリックしてインストーラを終了します。
2. CD-ROM の場合はルート・ディレクトリに、DVD の場合はルート・ディレクトリの下にある `developer_suite` ディレクトリに移動します。
3. `wsf.exe` を実行します。

Windows システム・ファイル・インストーラは、既存の Oracle ホームを検索するスクリプトによって制御されます。Oracle ホームが見つからない場合は、ファイルの場所ダイアログ・ボックスが表示されます。このダイアログ・ボックスから、Oracle ホームを選択します。

必要に応じて自動的に Windows が再起動されます。または、インストール終了を表すダイアログ・ボックスが表示されないで、Windows システム・ファイルのインストールが終了します。

4. Windows の再起動後、または Windows システム・ファイルのインストールが終了したら、Oracle Developer Suite のインストールを再開してください。

2.7.4.2 UNIX の場合

注意： root アカウントへのアクセスが必要です。

自動マウント機能をサポートしないオペレーティング・システムでは、インストール CD-ROM または DVD を手動でマウントする必要があります。CD-ROM または DVD のマウント / アンマウントには、root 権限が必要です。CD-ROM または DVD をドライブから取り出す前に、必ずアンマウントしてください。

注意： Oracle Developer Suite のインストール CD-ROM は、RockRidge 形式で作成されています。Oracle Developer Suite and Documentation DVD は、DVD-ROM 形式で作成されています。

インストール CD-ROM または DVD をマウントするには、次の手順を行います。

1. Oracle データベースなど、Oracle 関連のプロセスをすべて停止します。
2. 次の該当するオペレーティング・システムの項に進み、マウントの説明をお読みください。
 - [CD-ROM および DVD のマウント手順 : Solaris の場合](#)
 - [CD-ROM および DVD のマウント手順 : HP-UX の場合](#)
 - [CD-ROM および DVD のマウント手順 : Linux の場合](#)

2.7.4.2.1 CD-ROM および DVD のマウント手順 : Solaris の場合

コンピュータに自動マウントを設定している場合は、CD-ROM または DVD ディスクをドライブに挿入すると、そのディスクは、自動マウント構成で指定されたディレクトリに自動的にマウントされます。

コンピュータに自動マウントを設定していない場合は、CD-ROM または DVD を手動でマウントする必要があります。

CD-ROM または DVD を手動でマウントするには、次の手順を行います。

1. Oracle Developer Suite Disk 1 CD-ROM または Oracle Developer Suite and Documentation DVD を、ドライブに挿入します。
2. root ユーザーとしてログインします。
3. CD-ROM または DVD のマウント・ポイント・ディレクトリを作成しておく必要があります。たとえば、ディレクトリ /cdrom を作成する場合は、次のコマンドを実行します。

```
# mkdir /cdrom
```

4. 作成したマウント・ポイント・ディレクトリに、CD-ROM または DVD をマウントします。たとえば、マウント・ポイント・ディレクトリが /cdrom の場合は、次のコマンドを実行します。

```
# mount -r -F hsfs device_name /cdrom
```

5. root ユーザーとしてログアウトします。
6. 第 2.7.4.2.4 項「インストーラの実行」の手順に進みます。

2.7.4.2.2 CD-ROM および DVD のマウント手順 : HP-UX の場合

コンピュータに自動マウントを設定している場合は、CD-ROM または DVD ディスクをドライブに挿入すると、そのディスクは、自動マウント構成で指定されたディレクトリに自動的にマウントされます。

コンピュータに自動マウントを設定していない場合は、CD-ROM または DVD を手動でマウントする必要があります。

注意: 次のいずれかの手順を実行する前に、`pfs_fstab`、`pfs_mount`、`pfs_mountd`、および `pfsd` の man ページを参照してください。

CD-ROM または DVD を手動でマウントするには、次の手順を行います。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを使用して、CD-ROM または DVD の `device_file` を調べます。

```
# ioscan -fun -C disk
```

3. CD-ROM または DVD の `device_file` 用のエントリが `/etc/pfs_fstab` ファイルに存在しない場合は、これを追加する必要があります。root ユーザーとしてテキスト・エディタを使用して、次の書式で `/etc/pfs_fstab` ファイルに行を追加します。

```
device_file mount_point filesystem_type options frequency pass
```

例 :

```
/dev/dsk/c5t2d0 /SD_CDROM pfs-rrip ro 0
```

注意: この例では、`/SD_CDROM` ディレクトリが存在することを前提にしています。存在しない場合は作成してください。

4. 次のコマンドを入力します。

```
# nohup /usr/sbin/pfs_mountd &
# nohup /usr/sbin/pfsd &
```

5. Oracle Developer Suite Disk 1 CD-ROM または Oracle Developer Suite and Documentation DVD をドライブに挿入し、次のコマンドを入力して CD-ROM をマウントします。


```
# /usr/sbin/pfs_mount /SD_CDROM
```
6. root ユーザーとしてログアウトします。
7. 第 2.7.4.2.4 項「インストーラの実行」の手順に進みます。

2.7.4.2.3 CD-ROM および DVD のマウント手順 : Linux の場合

コンピュータに CD-ROM または DVD の自動マウントを設定している場合は、CD-ROM または DVD ディスクをドライブに挿入すると、そのディスクは、自動マウント構成で指定されたディレクトリに自動的にマウントされます。

コンピュータに自動マウントを設定していない場合は、CD-ROM または DVD を手動でマウントする必要があります。

CD-ROM または DVD を手動でマウントするには、次の手順を行います。

1. Oracle Developer Suite Disk 1 CD-ROM または Oracle Developer Suite and Documentation DVD を、ドライブに挿入します。
2. root ユーザーとしてログインします。
3. CD-ROM または DVD のマウント・ポイント・ディレクトリを作成しておく必要があります。たとえば、ディレクトリ /mnt/cdrom を作成する場合は、次のコマンドを実行します。

```
# mkdir /mnt/cdrom
```

4. /etc/fstab ファイルに、次の /dev/cdrom の行を必ず入れます。

```
/dev/cdrom /mnt/cdrom iso9660 noauto,owner,kudzu,ro 0 0
```

注意 : ファイル /etc/fstab には、この行が本文の表示と同様に記述されている必要があります。これ以外の書式が使用されている行は、本文の行と置き換えます。

5. 次のコマンドを実行して、マウント・ポイント・ディレクトリに、CD-ROM または DVD をマウントします。

```
# /bin/mount /mnt/cdrom
```

このコマンドにより、マウント・ポイント・ディレクトリ /mnt/cdrom に、CD-ROM または DVD がマウントされます。

6. root ユーザーとしてログアウトします。
7. 第 2.7.4.2.4 項「インストーラの実行」の手順に進みます。

2.7.4.2.4 インストーラの実行

インストール CD-ROM または DVD をマウントしたら、インストーラを起動できます。

CD-ROM または DVD から OUI を起動するには、次の手順を行います。

注意： OUI を起動するときには、root ユーザーとしてログインしないでください。root ユーザーとしてログインすると、エラー・メッセージが表示され、インストーラが停止します。

1. Oracle 製品のインストール用に作成したユーザー（[第 2.6.6.2 項「Oracle ソフトウェアの UNIX ユーザー」](#) を参照）でログインします。
2. マウント・ポイント・ディレクトリおよびそのサブディレクトリ以外のディレクトリに移動します。たとえば、マウント・ポイント・ディレクトリが /mnt/cdrom の場合は、/mnt/cdrom およびそのサブディレクトリ以外のディレクトリに移動します。
3. **CD-ROM の場合：**次のコマンドを入力して OUI を起動します。

```
prompt> mount_point_directory/runInstaller
```

DVD の場合：次のコマンドを入力して OUI を起動します。

```
prompt> mount_point_directory/developer_suite/runInstaller
```

OUI が起動します。[第 3.1 項「Oracle Developer Suite のインストール」](#) の手順に進みます。

2.7.4.3 サイレント・モードおよび非対話モードでのインストーラの実行

付録 C 「[サイレント・インストールおよび非インタラクティブ・インストール](#)」を参照してください。

3

インストール手順

インストール手順に進む前に、[第2章「インストールする前に」](#)を参照し、インストール前の準備作業を完了しておいてください。

この章では、インストール処理およびその後の作業について、手順を追って説明します。説明する項目は次のとおりです。

- [Oracle Developer Suite のインストール](#)
- [インストール完了後の作業](#)

3.1 Oracle Developer Suite のインストール

OUI の起動方法については、[第 2.7.4 項「インストーラの起動」](#) を参照してください。

注意：

- **(Windows のみ)** インストール中に Windows システム・ファイル・エラーが発生した場合は、「OK」をクリックしてエラー・ダイアログ・ボックスを閉じ、[第 2.7.4.1.1 項「Windows システム・ファイルのインストール」](#) の手順に従ってください。
 - Oracle Universal Installer (OUI) の画面は、現在のロケールで指定された言語で表示されます。
-

インストーラを起動すると、まず前提条件が自動的に確認されます。このような確認は、「ようこそ」画面の前に表示されるコマンドライン・ウィンドウで実行されます。前提条件の確認に失敗すると、エラー・メッセージが表示され、インストーラが停止します。インストーラによって自動的に実行される前提条件の確認については、[第 2.7.2 項「インストーラによる前提条件の確認」](#) を参照してください。

次に、インストーラの「ようこそ」画面が表示されます。

1. 「ようこそ」画面に表示された内容を確認し、「次へ」をクリックします。

「ようこそ」画面には、Oracle Universal Installer (OUI) に関する情報が記載されています。

「ようこそ」画面および OUI の各画面には、次のボタンが表示されます。

- **ヘルプ**：これをクリックすると、各画面の機能についての説明が表示されます。
- **インストール済の製品**：これをクリックすると、現在インストール済の製品の表示やアンインストールが実行されます。
- **戻る**：これをクリックすると、前の画面に戻ります。このボタンは「ようこそ」画面では使用できません。
- **次へ**：これをクリックすると、次の画面に進みます。このボタンは、一部の画面では使用できません。
- **インストール**：これをクリックすると、ファイルのインストールが開始されます。

注意： このボタンは、「サマリー」画面が表示されるまで使用できません。

- **取消**：これをクリックすると、インストール処理が停止し、OUI が終了します。

「ようこそ」画面には、前述以外にも次の 2 つのボタンが表示されます。

- **製品の削除**:これをクリックすると、個別の製品またはすべての製品がアンインストールされます。

- **バージョン情報**:これをクリックすると、OUI のバージョン番号が表示されます。

「インストール済の製品」オプションおよび「製品の削除」オプションの詳細は、[第 4.1.1 項「インストーラを使用したアンインストール手順](#) を参照してください。

2. コンピュータに初めて Oracle 製品をインストールする場合は、インストール関連ファイル用のインベントリ・ディレクトリが作成されます（インベントリ・ディレクトリの詳細は、[第 2.7.3 項「インストーラのインベントリ・ディレクトリ](#) を参照してください）。ベース・ディレクトリの作成処理は、Windows と UNIX で異なります。

- **Windows**: インストーラによってディレクトリ `system_default_drive\Program Files\Oracle\Inventory` が作成されます。この `system_default_drive` は Windows をインストールしているドライブ（通常は C）を示します。

- **UNIX**: 「インベントリ・ディレクトリの指定」画面が表示されます。インベントリ・ディレクトリの場所には既存のディレクトリを入力する必要があります。たとえば、次のようなディレクトリを使用できます。

`/private1/oraInventory`

ファイル・システムを参照してインベントリ・ディレクトリを選択する場合は、「参照」ボタンを使用します。

インストール処理を続行するには、「OK」をクリックします。

3. **UNIX のみ**: (最初のインストール時のみ) 「UNIX グループ名」画面で UNIX グループ名を入力します。

「UNIX グループ名」画面は、そのコンピュータで初めてインストーラを起動したときにのみ表示されます。この画面を使用して、インベントリ・ディレクトリに対して読み取りおよび書き込みの権限を持つグループを指定します。詳細は[第 2.6.6 項「UNIX のアカウントおよびグループの作成](#) を参照してください。

UNIX グループ名: UNIX グループの名前を入力します。このグループは、インベントリ・ディレクトリに対して読み取りおよび書き込みのアクセス権を持つ必要があります。インストーラの起動に使用する UNIX ユーザーは、このグループのメンバーである必要があります。

終了したら、「次へ」をクリックして続行します。

4. **UNIX のみ**: 画面が表示され、シェル・スクリプト `orainstRoot.sh` を実行するよう要求されます。このスクリプトは、`root` 権限で実行する必要があります。シェル・スクリプトを実行するとき、`orainstRoot.sh` の前に「`./`」の入力が必要になる場合もあります。

画面にシェル・スクリプト・ファイルの場所が表示されます。以降のインストール処理でコンポーネントを識別できるように、このスクリプトによって、コンピュータにインストールされたコンポーネントへのポインタが作成されます。スクリプトによって `/var/opt/oracle/oraInst.loc` (Linux では `/etc/oraInst.loc`) ファイルが生成され、インベントリ・ディレクトリへのポインタがそのファイルに記録されます。

このスクリプトを実行した後は元の画面に戻り、「続行」をクリックして先に進みます。

5. 「ファイルの場所の指定」画面で、インストール元およびインストール先のパスを確認し、Oracle ホーム名を入力または選択します。

「ファイルの場所の指定」画面で、インストール元およびインストール先を絶対パスで入力します。

- **ソース**: `products.jar` ファイルの絶対パスで、この場所からインストールを行います。インストール・プログラムの `products.jar` ファイルのデフォルト値が検出されて使用されます。このパスは変更しないでください。
- **インストール先**: Oracle ホームの名前および絶対パスで、この場所に製品がインストールされます。

デフォルトの名前およびパスを使用しても、他の名前を選択してもかまいません。詳細は第 2.4.1 項「Oracle ホームに関する注意事項」を参照してください。

注意: Oracle ホームは、実在する絶対パスでなければなりません。環境変数名や空白を含むことはできません。

次の既存のディレクトリを、Oracle Developer Suite のインストール先として指定しないでください。

- Oracle9iDS リリース 2 (9.0.2) のホーム・ディレクトリ
- Oracle Internet Developer Suite (Oracle Developer Suite の旧リリース) のホーム・ディレクトリ
- Oracle データベース (Oracle8i、Oracle9i を含む) のホーム・ディレクトリ
Oracle ホームの詳細は、第 2.4 項「1つの Oracle ホームでの共存」を参照してください。
- **参照**: ファイル・システムを参照してインストール元あるいはインストール先のディレクトリを指定する場合は、「参照」ボタンをクリックします。
情報の入力が終わったら、「次へ」をクリックして続行します。

6. インストール先のコンピュータがハードウェア・クラスタの一部である場合は、「ハードウェアのクラスタ・インストール・モードの指定」画面が表示される場合があります。その場合は、「單一ノードまたはコールド・フェイルオーバー・クラスタのインストール」オプションを選択すると、現行のインストール・ノードにのみインストールが実行されます（このリリースではアクティブ・フェイルオーバー・クラスタのインストール・オプションはサポートされていません）。
7. インストール・タイプを選択する画面で、実行するインストールのタイプ、およびインストールする製品言語を選択します。使用可能なインストール・オプションは次のとおりです。
 - **J2EE Development:** Oracle9i JDeveloper およびそのサブコンポーネント（Oracle Business Intelligence Beans、UIX、Bali、XDK）と、Oracle Application Server Containers for J2EE（OC4J）をインストールします。OC4J は、テスト用のデフォルトのリスナーとして設定されます。
 - **Business Intelligence:**（Windows のみ）Oracle Discoverer Administrator（Oracle Discoverer Desktop を含む）および Oracle Reports Developer をインストールします。さらに、OC4J および Oracle Application Server Reports Services もインストールします。OC4J はテスト用のデフォルトのリスナーとして設定されます。

注意： Oracle BI Beans は、JDeveloper のコンポーネントです。Oracle BI Beans を使用するには、J2EE Development オプションも選択してインストールしてください。

- **Rapid Application Development:**（Windows のみ）Oracle Forms Developer、Oracle Designer、Oracle Software Configuration Manager、Oracle Reports Developer および Oracle9i JDeveloper をインストールします。さらに、OC4J、Oracle Application Server Reports Services および Oracle Application Server Forms Services もインストールします。OC4J はテスト用のデフォルトのリスナーとして設定されます。
- **完全:** Oracle Developer Suite のコンポーネントをすべてインストールします。ただし、UNIX の場合、使用できないコンポーネントがあります。UNIX の場合にインストールされる Oracle Developer Suite のコンポーネントについては、[表 2-3 「オペレーティング・システムと Oracle Developer Suite コンポーネント」](#) を参照してください。

- **製品の言語**: Oracle Developer Suite の実行時に表示される言語を選択するには、「製品の言語」ボタンをクリックして「言語の選択」画面を表示します。複数の言語をインストールし、NLS_LANG 環境変数を変更して、言語を切り替えることもできます。実行時に、NLS_LANG で指定された言語の翻訳ファイルが使用可能であれば、その製品は指定された言語で表示されます。使用可能でない場合は英語で表示されます。

「言語の選択」画面で、インストールした製品の実行時に表示する言語を選択します。英語を使用するロケールでインストーラを実行している場合は、英語しか選択されません。英語以外の言語を使用するロケールでインストーラを実行している場合は、英語とそのロケールのデフォルト言語が選択されます。

「言語の選択」画面で、インストールする言語を複数選択できます。選択するには、「使用可能な言語」リストから「選択された言語」リストへ言語を移動します。操作方法は次のとおりです。

- 「使用可能な言語」リストから、1つまたは複数の言語を選択します。複数の言語を選択する場合は、1つの言語を選択し、[Ctrl] キーを押しながら別の言語を選択します。なお、ここで選択した言語は、インストール・プログラムの表示言語とは関係ありません。
- 言語を選択した後、「>」ボタンをクリックすると、選択した言語が「選択された言語」リストに移動します。
- すべての言語を選択する場合は、「>>」ボタンをクリックします。
- 選択を取り消したいときは、その言語をクリックして、「<」ボタンをクリックします。選択した言語が「使用可能な言語」リストに戻ります。すべての言語の選択を取り消す場合は、「<<」ボタンをクリックします。
- 言語の選択が終わったら、「OK」をクリックして続行します。

実行するインストール・タイプと表示する製品言語の選択が終了したら、「次へ」をクリックして続行します。

8. J2EE 以外のインストール・タイプでは、送信メール・サーバー情報を指定する画面が表示されます。この画面には、Oracle Application Server Reports Services (Reports Services) が、電子メールで報告書の配布やジョブ完了通知の送信を行う場合に使用する送信メール・サーバーの名前を入力します。

たとえば、送信メール・サーバー名は、`mysmt01.mycorp.com` のように指定します。

この機能を使用しない場合は、名前を空白にしておきます。

終了したら、「次へ」をクリックして続行します。

-
9. **HP-UX のみ: JDK ホーム・ディレクトリの選択画面で、HP Java 2 SDK 1.4.1 ディレクトリの絶対パスを入力します。「次へ」をクリックして続行します。**

注意: HP-UX 版の Oracle Developer Suite には、Java SDK が含まれていません。Oracle Developer Suite のインストールを開始する前に、ユーザー自身で Java SDK をインストールする必要があります。HP Java SDK の要件については、[表 2-7 「HP-UX オペレーティング・システムのソフトウェア要件」](#) を参照してください。HP Java SDK の入手方法とインストール方法については、[第 2.6.1 項「全般的なチェックリスト」](#) を参照してください。

10. 「サマリー」画面の情報を確認し、「インストール」をクリックします。ファイルのインストールが開始されます。

実際のインストール処理を開始する前に、「サマリー」画面で設定した内容を確認できます。「サマリー」リストには、インストール元およびインストール先の場所、インストール・タイプ、製品言語のほか、必要なディスク領域や、インストールされるコンポーネントがまとめられています。

設定を変更するには、「戻る」をクリックして適切な画面に戻ります。

注意: ディスク容量が不足している場合、「必要な領域」に赤字で表示されます。

11. 「インストール」画面が表示され、必要な Oracle Developer Suite ファイルのコピーが開始されます。インストールの進行状況も表示されます。

製品のインストール処理中は「インストール」画面が表示されています。インストール処理には、ファイルのコピーやリンク、実行決定ポイント、計算などのアクションの実行が含まれます。この画面では次の操作を行います。

- インストール処理の進行を監視する。
- インストール・ログ・ファイルの完全パスを確認する。インストール・ログ・ファイルについての詳細は、[第 2.7.3 項「インストーラのインベントリ・ディレクトリ」](#) を参照してください。
- 「インストールの中止」をクリックしてインストール処理を中断する。この場合、製品すべてのインストールを停止する（デフォルト）か、特定のコンポーネントのみのインストールを停止するかを選択できます。通常は、製品すべてのインストールを停止するようお薦めします。特定のコンポーネントのインストールのみを停止した場合、これに関連するコンポーネントが正常に動作しなくなるかもしれません。

12. Oracle Net Configuration Assistant の実行中に、「Configuration Assistant」画面が表示される場合があります。Oracle Net Configuration Assistant は、基本的なネットワーク・コンポーネントを設定し、`tnsnames.ora` および `sqlnet.ora` ファイルを作成します。Oracle Net Configuration Assistant ツールは、インストーラによって起動されます。Oracle Net Configuration Assistant の「ようこそ」画面にある「ヘルプ」をクリックすると、このツールの使用方法についての説明が表示されます。

この画面の操作が終わったら、「次へ」をクリックして続行します。

注意: Configuration Assistant は、実行中に UI が表示されないサイレント・モードで実行される場合もあります。また、Configuration Assistant が完了する前に短時間だけ UI が表示される場合もあります。UI が表示されてインストールが停止する場合は、Configuration Assistant にエラーが発生しています。

「Configuration Assistant」画面では次の操作を行います。

- 設定処理を監視する。
- 「中止」をクリックして構成ツールを終了する。
- 構成ツールによって指定された設定値を表示する。構成ツール名をクリックすると、設定値の詳細が表示されます。
- 設定が正常に完了しなかった場合、「再試行」をクリックして構成ツールを再度実行する。

Windows のユーザー補助機能を使用している場合: ユーザー補助機能を使用していて、スクリーン・リーダーに何か問題が発生した場合は、次の操作を行います。

- a. [ALT]+[F4] キーを押して Net Configuration Assistant の処理を中断し、OUI を終了します。この操作は Oracle Developer Suite のインストール処理には影響ありません。Net Configuration Assistant ツールが終了するのみです。
- b. Java Access Bridge 1.0.2 を、JRE 1.1.8 のある場所にインストールします。Java Access Bridge 1.0.2 のダウンロードやインストール手順については、[第 2.6.4 項「Java Access Bridge のインストール \(Windows のみ\)」](#) を参照してください。
- c. 次の環境変数を設定します。

```
ORACLE_OEM_CLASSPATH=program_drive:¥Program Files¥Oracle¥jre¥1.1.8¥lib¥access-bridge.jar;program_drive:¥Program Files¥Oracle¥jre¥1.1.8¥lib¥jaccess.jar
```

この `program_drive` は、ディレクトリ `Program Files` が格納されたドライブです。

- d. スクリーン・リーダーを再起動します。

- e. Windows の「スタート」メニューから、次の順に選択して Net Configuration Assistant ツールを再起動します。
- 「スタート」→「プログラム」→「Oracle - oracle_home」→「Configuration and Migration Tools」→「Net Configuration Assistant」
13. 「Configuration Assistant」画面がまだ表示されている場合は、「次へ」をクリックして続行します。
14. 製品のインストールが終了すると、インストールの終了画面が表示されます。
- インストール・プログラムを終了するには、「終了」をクリックします。インストール・プログラムの終了を確認するダイアログ・ボックスが表示されます。「はい」をクリックして終了するか、「いいえ」をクリックしてインストール・プログラムを続行します。
- 製品のインストールに成功した場合は、[第 3.2 項「インストール完了後の作業」](#)を参照して次の手順に進んでください。

3.2 インストール完了後の作業

Oracle Developer Suite のインストール完了後に必要な作業を、次の項に分けて説明します。

- 全般的なチェックリスト
- 各コンポーネントのインストール完了後の作業
- コンポーネントの起動
- その他のドキュメント

注意： 特に断りがないかぎり、*oracle_home* はインストール処理中に使用した Oracle Developer Suite のホーム・ディレクトリを表します。

3.2.1 全般的なチェックリスト

インストール完了後の全般的なチェックリストを確認し、インストール環境に当てはまる作業を行います。

3.2.1.1 更新

インストールが完了したら、リリース・ノートをご確認の上、Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) CD Pack にご使用の製品のパッチが同梱されている場合には最新のパッチを適用してください。また、動作要件に関する最新情報は次の URL をご確認ください。

<http://www.oracle.co.jp/products/system/index.html>

OTN-J (Oracle Technology Network Japan) の Web サイト (<http://otn.oracle.co.jp/>) では、開発者向けサービスと技術資料を確認することができます。

3.2.1.2 NLS

インストールしたコンポーネントの NLS サポートを有効にするために、インストール後に作業が必要になる場合があります。

3.2.1.2.1 コンポーネントの言語

Oracle Developer Suite コンポーネントのユーザー・インターフェースは、インストール時に選択した言語で表示できます。その場合は、`NLS_LANG` 環境変数を設定します。

`NLS_LANG` は、コンポーネントで使用される言語、地域および文字セットを指定する環境変数です。`NLS_LANG` を別の値に変更するまで、Oracle Developer Suite のすべてのコンポーネントで、最初の設定が使用されます。

`NLS_LANG` には、言語、地域および文字セットの 3 つの要素があります。これらの要素は次の書式で設定されます。

`<language>_<territory>.<character_set>`

たとえば、`NLS_LANG` に `Japanese_Japan.JA16EUC` と設定すると、日本語環境でコンポーネントが実行されます。また、日本における表記法などの慣習に従い、データを操作する文字セットとしては EUC を使用することを表します。

`NLS_LANG` の詳細は、『Oracle Application Server 10g グローバリゼーション・ガイド』を参照してください。

3.2.1.2.2 追加フォント

インストール中に製品言語（複数可）を選択すると、JDK でその言語を正しく表示できるよう自動的にフォントがインストールされます。フォントは、ディレクトリ `oracle_home/jdk/jre/lib/fonts` にインストールされます。

インストール後に、インストール時に選択しなかった言語でテキストを表示することが必要になる場合があります。Oracle9i JDeveloper、UIX、Oracle Reports Developer など、Java 依存コンポーネントを使用している場合には、Java で必要なフォントがインストールされていない場合があります。このような問題は、フォントを手動でインストールすることによって解決できます。

Oracle Developer Suite に付属するフォントを表 3-1 に示します。

表 3-1 Oracle Developer Suite に付属する NLS フォント

ファイル名	説明
ALBANWTJ.TTF	Albany WT 日本語フォント
ALBANWTK.TTF	Albany WT 韓国語フォント
ALBANWTS.TTF	Albany WT 簡体字中国語フォント
ALBANWTT.TTF	Albany WT 繁体字中国語フォント

表 3-1 Oracle Developer Suite に付属する NLS フォント（続き）

ファイル名	説明
ALBANYWT.TTF	日本語、中国語、韓国語を除く、英語以外の Albany WT フォント

フォントをインストールするには、表から該当するフォント名を選択し、次の手順を行います。

- CD-ROM の場合：**「Disk 2」というラベルが付いた Oracle Developer Suite CD-ROM をマウントします。各プラットフォームに CD-ROM をマウントする方法については、[第 2.7.4 項「インストーラの起動」](#)を参照してください。

DVD の場合：「Oracle Developer Suite and Documentation」というラベルが付いた Oracle Developer Suite DVD をマウントします。各プラットフォームに DVD をマウントする方法については、[第 2.7.4 項「インストーラの起動」](#)を参照してください。

- インストーラが起動した場合は、終了します。インストーラは、フォントのインストールには使用しません。
- CD-ROM の場合：**CD-ROM のルート・ディレクトリにいったん移動して、サブディレクトリ `/extras/fonts` に移動します。

DVD の場合：DVD のルート・ディレクトリにいったん移動して、サブディレクトリ `/developer_suite/extras/fonts` に移動します。

- フォント・ファイルを `oracle_home/jdk/jre/lib/fonts` にコピーします。

3.2.1.3 TNS 名

選択したインストール・タイプにより、`tnsnames.ora` および `sqlnet.ora` ファイルが、`oracle_home\NETWORK\ADMIN` ディレクトリ（Windows の場合）または `oracle_home/NETWORK/ADMIN` ディレクトリ（UNIX の場合）にインストールされます。このファイルは、テキスト・エディタを使用して手動で更新することも、構成ツールである Oracle Net Configuration Assistant を使用することもできます。構成ツールの詳細は、『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』または『Net8 管理者ガイド』を参照してください。

3.2.1.4 ポート番号

インストーラにより、ポートを必要とする Oracle Developer Suite コンポーネントに、ポートが自動的に割り当てられます。コンポーネントのインストール時にポートの競合が検出されると、コンポーネントに割り当てられたポート番号の範囲内で、別のポート番号が選択されます。インストール後は、ポートの割当てを記述したファイルが作成されます。ポートの割当てが妥当かどうかを確認してください。

ポートの割当てを記述したこのファイルを `portlist.ini` といいます。このファイルは、`oracle_home\INSTALL` ディレクトリ（Windows）または `oracle_home/install` ディ

レクトリ（UNIX）にあります。このファイルには、「ポート名 = ポート値」という形式で、コンポーネントごとのポート割当が記述されています。次に例を示します。

```
Oracle Java Object Cache port = 7000
Oracle Intelligent Agent = 1748, 1754, 1808, 1809
```

表 3-2 に、各コンポーネントのデフォルトのポート番号と、競合が検出された場合に使用されるポート番号の範囲を示します。

表 3-2 ポート番号

コンポーネント	デフォルトのポート番号	ポート番号の範囲
OC4J（Oracle Forms および Oracle Reports のテスト用）	<ul style="list-style-type: none"> ■ HTTP リスナー: 8888 ■ RMI: 23910 ■ JMS: 9240 	8888 ~ 8907 23910 ~ 23929 9240 ~ 9259
OC4J（JDeveloper のテスト用）	<ul style="list-style-type: none"> ■ HTTP リスナー: 8888 	8888 ~ 8907

OC4J の両方のインスタンスをインストールするタイプを選択すると、インスタンス間での競合や他のポート番号との競合が発生しないポート番号が設定されます。

3.2.1.5 Oracle Developer Suite 用の OC4J インスタンス

- Oracle Forms および Oracle Reports のテスト用の Oracle Developer Suite OC4J のインスタンスを起動または停止するには、次の手順を行います。
 - **UNIX:** `oracle_home/j2ee/DevSuite` ディレクトリにある次のスクリプトを使用します。
 - `startinst.sh`
 - `stopinst.sh`
 - **Windows:** `oracle_home\j2ee\DevSuite` ディレクトリにある次のスクリプトを使用します。
 - `startinst.bat`
 - `stopinst.bat`

または、次のいずれかの方法で「スタート」メニューからスクリプトにアクセスします。

「スタート」→「プログラム」→「Oracle Developer Suite - `oracle_home`」→「Forms Developer」

「スタート」→「プログラム」→「Oracle Developer Suite - `oracle_home`」→「Reports Developer」

その後、次の操作を行います。

- OC4J インスタンスを起動するには、「Start OC4J Instance」を選択します。
- OC4J インスタンスを停止するには、「Shutdown OC4J Instance」を選択します。

3.2.1.6 ユーザー補助機能（Windows のみ）

スクリーン・リーダーなどのユーザー補助機能を使用して、Java ベースのアプリケーションやアプレットで作業する場合、Oracle Developer Suite をインストールした Windows ベースのコンピュータ上のすべての Java 仮想マシンに、Sun の Java Access Bridge がインストールされている必要があります。

インストーラを実行すると、コンピュータに JDK/JRE 1.4.1 および JDK/JRE 1.1.8 用のファイルがインストールされます。ただし、Java Access Bridge 1.0.3 用のファイルは、JDK/JRE 1.4.1 の環境にしかインストールされません。

JDK/JRE 1.1.8 のもとで動作する Oracle Developer Suite のコンポーネントでユーザー補助機能を活用するためには、製品版の Java Access Bridge 1.0.2 を、JDK/JRE 1.1.8 の側にもインストールする必要があります。インストール手順については、[第 2.6.4 項「Java Access Bridge のインストール（Windows のみ）」](#) を参照してください。Java Access Bridge をインストールしたら、次の手順でファイルが正しく設定されているかどうかを確認します。

Java Access Bridge のファイルがインストールされたことの確認：

以下の手順は、Java Access Bridge 1.0.2 の ZIP ファイルをダウンロードし、accessbridge_home という名前の一時ディレクトリに展開して、インストールが済んでいることを仮定しています。詳細は[第 2.6.4 項「Java Access Bridge のインストール（Windows のみ）」](#) を参照してください。

1. .jar ファイルの access-bridge.jar および jaccess.jar が、フォルダ Program Files¥Oracle¥jre¥1.1.8¥lib に追加されたことを確認します。
2. 2つの .DLL ファイルの JavaAccessBridge.dll および WindowsAccessBridge.dll が、フォルダ Winnt¥System32 に追加されたことを確認します。これで、前述のファイルが、システム・パスで参照される場所にあることが確認できます。
3. .jar ファイルの access-bridge.jar および jaccess-1_3.jar が、フォルダ oracle_home¥jdk¥jre¥lib¥ext に追加されたことを確認します。追加されなかった場合は、accessbridge_home¥installer¥installerFiles からコピーします。
4. 2つの .DLL ファイル、JavaAccessBridge.dll および WindowsAccessBridge.dll が、フォルダ oracle_home¥jdk¥jre¥lib¥ext に追加されたことを確認します。このファイルがない場合は、次の場所からコピーします。accessbridge_home¥installer¥installerFiles
5. PATH 環境変数に、.DLL ファイルのインストール先ディレクトリである oracle_home¥jdk¥jre¥lib¥ext が追加されたことを確認します。

6. ORACLE_OEM_CLASSPATH 環境変数に、JRE 1.1.8 用に Access Bridge ファイルをインストールした次のディレクトリが追加されたことを確認します。

```
ORACLE_OEM_CLASSPATH=program_drive:¥Program Files¥Oracle¥jre¥1.1.8¥lib¥  
access-bridge.jar;program_drive:¥Program Files¥Oracle¥jre¥1.1.8¥lib¥  
jaccess.jar
```

この *program_drive* は、ディレクトリ Program Files があるドライブを示します。

7. ファイル accessibility.properties が、フォルダ oracle_home¥jdk¥jre¥lib および Program Files¥Oracle¥jre¥1.1.8¥lib にあることを確認します。

このファイルがない場合は、次の場所からコピーします。

```
accessbridge_home¥installer¥installerFiles
```

8. accessibility.properties ファイルに、次のような記述があることを確認します。

```
assistive_technologies=com.sun.java.accessibility.AccessBridge
```

3.2.2 各コンポーネントのインストール完了後の作業

各コンポーネントのインストール完了後のチェックリストを示します。確認の上、必要な作業を行ってください。

なお、以降の作業を行う前に、必ずリリース・ノートをご確認ください。リリース・ノートには、日本語環境で行うべき追加のインストール手順が記載されています。

3.2.2.1 Oracle9i JDeveloper

JDeveloper を有効に活用できるよう、次に説明する手順を行ってください。対応するデプロイ環境については、[第 B.1 項「Oracle9i JDeveloper」](#) を参照してください。

3.2.2.1.1 旧リリースからのユーザー設定の移行

JDeveloper (9.0.2/9.0.3) の製品版から JDeveloper (9.0.4) にユーザー設定を移行できます。手順については、[第 A.2.1 項「リリース 9.0.2/9.0.3 からリリース 9.0.4 への JDeveloper ユーザー設定の移行」](#) を参照してください。

Oracle JDeveloper リリース 3.2.3 から 9.0.4 に直接移行することはできません。

3.2.2.1.2 JDeveloper の拡張機能の有効化

JDeveloper の拡張機能を使用するには、まず OTN からファイルをダウンロードする必要があります。拡張機能には、次のものがあります。

- JUnit
- WebDAV
- iSQL*Plus

拡張機能を自動的にダウンロードおよびインストールするには、次の手順を行います。

1. JDeveloper を起動します。
2. メイン・メニューから、「ヘルプ」→「更新の確認」を選択します。まだインストールしていない拡張機能や、インストールしてある拡張機能の新しいバージョンが表示されます。
3. 必要な拡張機能を選択し、インストールします。

拡張機能を手動でダウンロードするには、次の手順を行います。

1. OTN の JDeveloper (9.0.4) 拡張機能のページ (<http://otn.oracle.com/software/products/jdev/content.html>) を表示します。
2. 拡張機能を選択します。
3. 指示に従って zip ファイルをダウンロードします。

拡張機能を手動でインストールするには、次の手順を行います。

1. 使用しているコンピュータで稼動中の JDeveloper のインスタンスがあれば、すべて停止します。
2. 拡張機能のアーカイブで、インストールに関して他の指示がないか確認します。
3. ダウンロードした zip ファイルを、ディレクトリ `oracle_home¥jdev¥lib¥ext` に展開します。
4. JDeveloper を再起動します。再起動後は、拡張機能を使用できます。

JDeveloper の拡張機能の詳細は、JDeveloper のオンライン・ヘルプを参照してください。

3.2.2.1.3 ソース・コード管理の有効化 (Windows のみ)

JDeveloper 側から、Oracle Software Configuration Manager (Oracle SCM) を使用してソース・コードを管理するには、Oracle SCM リポジトリに接続する必要があります。リポジトリは、Oracle データベース内にあらかじめ作成しておいてください。データベース内にリポジトリを作成するには、「Rapid Application Development」または「完全」オプションでインストールを行い、Oracle SCM に付属の Repository Administration Utility を使用します。リポジトリの作成手順については、『Oracle Software Configuration Manager Repository インストレーション・ガイド』を参照してください。このドキュメントは、Windows のスタート・メニューから参照できます。

3.2.2.1.4 フォントの問題 (UNIX の場合)

UNIX 上で JDeveloper を起動すると、次のようなエラー・メッセージが表示される場合があります。

```
Font specified in font.properties not found  
[--symbol-medium-r-normal--*-%d-*-*-p-*--adobe-fontspecific]
```

これは、必要なフォントが JDK から使用できるように設定されていないことを表します。JDeveloper はデフォルトで、各 JDK に含まれるファイル `font.properties` の記述に従います。しかし、ファイルに記述されたフォントがコンピュータで使用できないと、前述のようなエラー・メッセージが表示されます。これを解消するには、記述どおりにフォントをインストールするか、`font.properties` ファイルの記述を変更する必要があります。新しいフォントをインストールする手順については、各コンピュータの製造元にお問い合わせください。`font.properties` ファイルの修正方法については、JDK の配布元が作成しているドキュメント、または次の Web サイトにある、Sun 社の『フォントの概要』ドキュメントを参照してください。

<http://java.sun.com/j2se/1.3/ja/docs/ja/guide/intl/addingfonts.html>

3.2.2.1.5 ドキュメントのホスティング

ホストされたドキュメントを使用するように IDE オプションを設定した場合、JDeveloper は OTN でホストされるドキュメントを使用するよう、あらかじめ設定されます。OTN で設定されるドキュメントには、次の URL でアクセスします。

http://otn.oracle.com/hosted_doc/jdev/jdeveloper/jdeveloper.hs

なお、ホストされたヘルプ・システムを初めて起動するときには、初期化のために数分かかる場合があります。

前述のサイト以外にも、独自にホストを設定してドキュメントのホスティングを行うことができます。ファイアウォールで保護されている場合、ネットワークの通信速度が遅い場合、または JDeveloper ドキュメントに情報を追加する場合などに、独自のホストを設定すると便利です。JDeveloper ドキュメントの拡張については、JDeveloper に付属している Oracle Help for Java (OHJ) に関するドキュメントを参照してください。

JDeveloper ドキュメントをホストするには、次の手順を行います。

- `oracle_home/jdev/doc/ohj` にある jar ファイルを解凍し、Web サーバーに置きます。基本インストールを行う場合、ドキュメントを OTN からダウンロードする必要があります。jar ファイルは、それぞれ別のディレクトリに解凍します。
- `jdeveloper.hs` ファイルを修正して、サーバー上に置いた個々のヘルプ・ファイルの URL を正しく指すようにします。このファイルの記述例は、`oracle_home/jdev/doc/ohj/jdeveloper.jar` 内の `jdeveloper-hosted-example.xml` を参照してください。

ファイルの修正後、各ユーザーは、JDeveloper が新しく指定したサーバーを使用するように設定する必要があります。操作方法は次のとおりです。

1. JDeveloper のメイン・メニューから、「ツール」→「設定」を選択します。
2. 「ドキュメント」を選択します。
3. 「ホストのドキュメントを使用」ラジオ・ボタンを選択します。

4. また、サーバー上にある `jdeveloper.hs` ファイルの URL を指定します。その URL では、デフォルトのポート（80）を使用している場合であっても、ポート番号を指定してください。

3.2.2.1.6 Terminal Server/ マルチユーザー環境での JDeveloper の使用法

JDeveloper を Microsoft Terminal Server または Citrix MetaFrame 環境にインストールして、1 つの JDeveloper を多数のクライアントがアクセスできるように設定できます。すべての場合において、プロジェクトをローカルに保存できます。

マルチユーザー環境に JDeveloper をインストールおよび設定するとき、最高の性能で運用できるように、ユーザー数やサーバーの処理能力などの利用状況やリソースを把握しておく必要があります。

Citrix MetaFrame Server または Microsoft Terminal Server への JDeveloper のインストール

JDeveloper をインストールするには管理者権限が必要です。

- Citrix または Microsoft Server に JDeveloper をインストールするには、次の手順を行います。
 - J2EE Development インストール・タイプを選択し、JDeveloper をインストールします。
 - ユーザーのホーム・ディレクトリを表す環境変数を、次のように定義します。

マルチユーザー環境におけるユーザー・ホーム・ディレクトリの設定

(以下は Windows の場合の説明ですが、同じ考え方が UNIX の場合にも適用されます。)

Terminal Server 環境で JDeveloper を起動する前に、JDeveloper が個々のユーザーのホーム・ディレクトリを正しく識別できるように、ユーザーのホーム・ディレクトリを表す環境変数を定義して、各ユーザーに対する値を設定する必要があります。環境変数の定義と設定を行わないと、`oracle_home\jdev` がすべてのユーザーのホーム・ディレクトリとして使用されます。すべてのユーザーにこのディレクトリを使用すると、動作が不安定になる可能性があります。

- ユーザー・ホーム環境変数名を定義するには、次の手順を行います。
 1. テキスト・エディタで、ファイル `oracle_home\jdev\bin\jdev.conf` を開きます。ワードパッドなど、UNIX の改行文字を認識できるエディタを使用してください。
 2. 次のエントリを検索します。

```
SetUserHomeVariable JDEV_USER_DIR
```

これは、JDeveloper が起動時に検索する、デフォルトの環境変数名です。Terminal Server の管理者は、コンピュータの命名規則に従ってこの変数名を変更できます。

3. ファイルを保存します。ワードパッドを使用する場合、テキストのみの書式でファイルを保存してよいかどうか、警告が表示されます。この警告は無視してもかまいません。
- **環境変数を設定するには、次の手順を行います。**

注意： マルチユーザー・コンピュータで JDeveloper を使用する場合、すべてのユーザーが次の操作を行う必要があります。

1. Windows の「スタート」メニューから、「設定」→「コントロールパネル」→「システム」を選択します。
2. 「環境」タブを選択します。
3. ユーザーレベルの環境変数に、JDEV_USER_DIR または前の手順で選択した名前を追加します。
4. この値にホーム・ディレクトリ（たとえば N:\users\jdoe）を設定し、「OK」をクリックします。
5. コマンド・シェルを開き、次のように入力して、変数の設定を確認します。

set

次のような出力が得られます。

```
JDEV_USER_DIR=N:\users\jdoe
```

6. JDeveloper を起動します。
ユーザー・ホーム・ディレクトリを作成するかどうか問われます。「はい」を選択します。
7. 「ヘルプ」メニューから「バージョン情報」を選択し、ide.user.dir にユーザーのホーム・ディレクトリが設定されていることを確認します。

JDeveloper を稼動するための Terminal Server クライアントの設定

以下の説明は、Citrix MetaFrame または Microsoft Terminal Server のクライアントをローカルにすでにインストールし、システム管理者によって JDeveloper のインストールおよび設定が行われたと仮定しています。

- **JDeveloper 用に Terminal Server クライアントを設定するには、次の手順を行います。**
1. Terminal Server クライアントの画面は、256 色以上に設定する必要があります。これは JDK の要件によるものです。
 2. Terminal Server にログインします。

3. ユーザーのホーム・ディレクトリを表す環境変数の名前が定義済であることを確認します。コンピュータで使用される命名規則については、システム管理者に問い合わせてください。デフォルト値は JDEV_USER_DIR です。
4. ユーザー・ホーム・ディレクトリを表す環境変数を設定するには、次の手順を行います。
 - Windows の「スタート」メニューから、「設定」→「コントロールパネル」→「システム」を選択します。
 - 「環境」タブをクリックします。
 - ユーザーの環境変数にホーム・ディレクトリを設定し、「OK」をクリックします。たとえば、ユーザーのホーム・ディレクトリへのパスを含む変数として JDEV_USER_DIR を定義できます。
 - コマンド・シェルを開き、次のように入力して、変数の設定が正しいことを確認します。

```
set
```

次のような出力が得られます。

```
JDEV_USER_DIR=n:\\users\\jdoe
```

5. JDeveloper を起動します。
6. ユーザー・ホーム・ディレクトリを作成するかどうか問われます。「はい」を選択します。
7. 「ヘルプ」メニューから「バージョン情報」を選択し、ide.user.dir にユーザーのホーム・ディレクトリが設定されていることを確認します。

マルチユーザー環境で JDeveloper を起動すると、次のようなエラーが発生することがあります。

The system DLL ole32.dll was relocated in memory. The application will not run properly. The relocation occurred because the DLL Dynamically Allocated Memory occupied an address range reserved for Windows NT system DLLs. The vendor supplying the DLL should be contacted for a new DLL.

この場合、oracle_home\\jdev\\bin\\jdev.conf ファイルに次の行を追加してください。

```
AddVMOption -Xheapbase10000000
```

ワードパッドなど、UNIX の改行文字を認識できるエディタを使用してください。これでもまだエラーが発生する場合は、数を変更してみてください。ワードパッドを使用する場合、テキストのみの書式でファイルを保存してよいかどうか、警告が表示されます。この警告は無視してください。

さらに、プロジェクトの設定でも、同じ値でオプションを設定する必要があります。これには、「プロジェクト」メニューから「デフォルトのプロジェクト設定」を選択して「実行」ノードを開き、「Java オプション」を選択してオプションを変更します。

すべてのユーザーがこの設定を使用できるように、JDeveloper を終了してから管理者としてログインし、次のファイル

```
oracle_home¥jdev¥multi¥system¥DefaultWorkspace¥Project1.jpr
```

を次の場所にコピーしてください。

```
userhome¥system¥DefaultWorkspace¥Project1.jpr
```

3.2.2.1.7 JDeveloper で非埋込みモードの OC4J を使用

J2EE Development オプションでインストールを行った場合、Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) の機能をすべて利用できます。JDeveloper でアプリケーションのテストを行う場合、埋込みモードの OC4J を利用するので、設定を変更する必要はありません。サーバーでも同じ設定を使用する場合は、JDeveloper に付属のバージョンを使用できます。

非埋込みモードの OC4J サーバーを設定するには、次の手順を行います。

1. `oracle_home/j2ee/home` ディレクトリのコマンドラインで、次のコマンドを実行します。

```
java -jar oc4j.jar -install
```

複数の jar ファイルが解凍されます。ここで管理者のパスワードを入力するよう求められます。

2. パスワードを入力し、[Enter] キーを押します。パスワードをもう一度入力して [Enter] キーを押し、パスワードを確認します。

このパスワードは忘れないように書き留めておきます。OC4J サーバーの管理と停止には、このパスワードが必要になります。

OC4J サーバーのインストールと設定は、これで完了です。サーバーを起動します。

注意： 管理者ユーザー名は現在 admin です。管理者パスワードは、ユーザーが先に入力したパスワードです。OC4J サーバーの管理と停止には、このユーザー名とパスワードを使用してください。

非埋込みモードの OC4J サーバーを起動するには、次の手順を行います。

- **Windows の場合 :** `oracle_home/j2ee/home` ディレクトリで、次のコマンドを実行します。

```
java -jar oc4j.jar admin password
```

この `password` は、前の手順で作成した管理者パスワードです。

複数の jar ファイルが自動的にデプロイされ、サーバーに次の行が表示されます。

```
Oracle Application Server Containers for J2EE 10g (9.0.4.0.0) initialized
```

- **UNIX の場合:** ディレクトリ `oracle_home/jdev/bin` に移動します。

- サーバーを起動する場合は、`start_oc4j` を次のように実行します。

```
oracle_home/jdev/bin/start_oc4j
```

- サーバーを停止する場合は、`stop_oc4j` を次のように実行します。

```
oracle_home/jdev/bin/stop_oc4j admin password
```

`password` には、前の手順で作成した管理者パスワードを使用します。

OC4J サーバーのインスタンスを調整する方法については、OC4J のドキュメントを参照してください。

注意: プロジェクトをデプロイするとき、サーバーが稼動している必要があります。

含まれるサーバーを使用しても、JDeveloper を使用してプロジェクトをテストしたり実行する妨げにはなりません。

3.2.2.1.8 JDeveloper でのユーザー補助機能の使用法（Windows のみ）

まず、第 3.2.1.6 項「ユーザー補助機能（Windows のみ）」の手順に従って、Java Access Bridge のファイルを正しくインストールします。次に、以下の手順で、JDeveloper が Java Access Bridge とともに動作することを確認します。

1. 3 つの DLL ファイル `JavaAccessBridge.dll`、`JAWTAccessBridge.dll` および `WindowsAccessBridge.dll` が、JDeveloper で正常に操作できるようにするには、システム・パスである `Winnt\System32` ディレクトリに追加されたことを確認します。追加されなかった場合は、`accessbridge_home\installer\installerFiles` からコピーします。
2. フォルダ `oracle_home\jdev\bin` にあるファイル `jdev.conf` を修正します。 `AddVMOption` 行が注釈になっているので、これを外して次のようにしてください。

```
#  
# Prepend patches to the bootclasspath. Currently, rtpatch.jar contains a  
# patch that fixes the javax.swing.JTree accessibility problems.  
# Uncomment the line below if you need to run JDeveloper under JAWS.  
#  
AddVMOption -Xbootclasspath/p:../../jdk/jre/lib/patches/rtpatch.jar
```

3. また、JDeveloper を稼動するには、OJVM のかわりに Hotspot を使用する必要があります。Hotspot を使用するには、`jdev.conf` ファイルの `SetJavaVM` 行を、次のように修正します。

```
SetJavaVM hotspot
```

4. スクリーン・リーダーを起動します。
5. JDeveloper を起動します。

前述の手順は、Windows で Windows ベースのスクリーン・リーダーを使用している場合を想定しています。JDeveloper を起動して、エラーが発生した場合は、まずエラー情報が含まれるコンソール・ウィンドウが表示され、次に JDeveloper のメイン・ウィンドウが表示されます。

3.2.2.2 Oracle Business Intelligence Beans

必要に応じて、インストール完了後に次の作業を行います。

3.2.2.2.1 データベースに関する注意事項

- Oracle BI Beans リリース 9.0.4 を使用するには、Oracle9i リリース 2 が必要です。
- JDeveloper 内からデータに接続する前に、Oracle9i リリース 2 のデータベースをインストールおよび設定しておく必要があります。基本的に、インストール作業が発生する場面として次の 3 つが考えられます。
 - 開発者が、自分自身のコンピュータに、個人的に使用する目的でデータベースをインストールする場合。[第 3.2.2.2.2 項「Oracle9i リリース 2 のデータベースを BI Beans と併用するための準備」](#) の説明に従ってデータベースを準備し、[第 3.2.2.2.3 項「その他の作業」](#) の説明に従い、必要に応じて追加作業を行います。
 - データベース管理者がインストールおよび設定したデータベースを、開発者が使用する場合。[第 3.2.2.2.2 項「Oracle9i リリース 2 のデータベースを BI Beans と併用するための準備」](#) の手順 4 に従い、準備作業の最終手順を実行して、JDeveloper のアプリケーション設定を更新または新規作成します。その後、[第 3.2.2.2.3 項「その他の作業」](#) の説明に従い、必要に応じて追加作業を行います。
 - データベース管理者が、他のユーザー用にデータベースをインストールおよび設定する場合。[第 3.2.2.2.2 項「Oracle9i リリース 2 のデータベースを BI Beans と併用するための準備」](#) の説明に従ってデータベースを準備します。準備作業の最終手順は実行しないでください。

JDeveloper の準備手順は、埋込みモードの OC4J インスタンスをはじめとして、JDeveloper 環境全体に影響します。

3.2.2.2 Oracle9i リリース 2 のデータベースを BI Beans と併用するための準備

Oracle9i リリース 2 に対して BI Beans を実行するには、次の作業をすべて行います。

1. Oracle9i Database Release 2 Enterprise Edition をインストールしていない場合は、インストールします。手順については、インストレーション・ガイドをご参照ください。Oracle9i OLAP を使用するためには、該当するプラットフォームのリリース・ノートをご確認の上、CD Pack に含まれる必要なパッチを適用する必要があります。

重要: データベース・クライアントをインストールするときには、Oracle Application Server や Oracle Developer Suite のホーム・ディレクトリにはインストールしないでください。

2. 『Best Practices for Tabular Cube Aggregation and Query Operations』に記載の設定に従って、データベースを設定します。このドキュメントにアクセスするには、Oracle Technology Network Japan (<http://otn.oracle.co.jp>) をご参照ください。BI Beans が正しく動作し実行されるようにするには、これらの設定に従う必要があります。
3. 『Oracle OLAP リファレンス リリース 2 (9.2.0.4)』および『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド リリース 2 (9.2.0.4)』の説明に従って、適切な OLAP メタデータを定義します。このドキュメントは、Oracle Technology Network (<http://otn.oracle.com/products/bi/9iolap.html>) で入手できます。メタデータの作成に使用する Oracle Enterprise Manager の OLAP 管理ツールのヘルプ・システムも参照してください。適切なメタデータを定義しないと、OLAP 問合せを作成できなくなります。
4. BI デザイナがすでにある場合は、アプリケーションの設定を更新して新しい OLAP データ・ソースを指定する（手順はヘルプ・トピック「Updating BI Beans Application Settings」を参照）、または BI Designer を新規作成する（手順はヘルプ・トピック「Creating a BI Designer Object」を参照）必要があります。

3.2.2.3 その他の作業

データベースの準備のほかに、必要に応じて次の作業を行います。

- Oracle Developer Suite には、Oracle9i リリース 1 の JDBC ドライバが付属していますが、Oracle BI Beans にはリリース 2 のドライバが必要です。そのため、JDBC ドライバ・ファイルをアップグレードする必要があります。Oracle BI Beans 9.0.3 でリリース 2 のドライバにアップグレードした場合でも、この作業は必要です。アップグレードするには、次の手順を行います。
 1. JDeveloper を起動します。
 2. 任意の BI Beans オブジェクトにアクセスします。メッセージが表示され、アップグレードするかどうかを聞かれます。
 3. 「はい」をクリックします。自動的にアップグレードが実行されます。`oracle_home/bibeans/jdbc/lib_92` ディレクトリから `oracle_home/jdev/lib/patches` ディレクトリに、ファイルがコピーされます。

4. JDeveloper を再起動してアップグレードを有効にします。

注意:

- この変更はすべてのプロジェクトに影響します。ただし、[第 A.3 項「Oracle Business Intelligence Beans」](#) の説明に従って、各プロジェクトの設定も変更する必要があります。
- 元のドライバに戻す場合は、`oracle_home/jdev/lib/patches` ディレクトリから、`classes12.jar` および `nls_charset12.jar` を削除するだけで済みます。
- JDeveloper を使用した設計作業中に、分析結果がプロジェクト内に保存されます。ただし、開発者またはエンドユーザーが、他の開発者やエンドユーザーと分析結果やオブジェクトを共有できるようにするには、BI Beans カタログをインストールおよび設定する必要があります。詳細は、ヘルプ・トピック「[Installing and Configuring the BI Beans Catalog](#)」を参照してください。
- アプリケーションをテストするには、選択したデプロイ環境をインストールする必要があります。詳細は、[第 B.1.3 項「Oracle Business Intelligence Beans」](#) の「[デプロイの要件](#)」を参照してください。
- **BI Beans カタログ:** 設計段階で BI Beans カタログとの接続に Oracle JDBC Thick (OCI) ドライバの使用予定がある場合は、`jdev.conf` ファイルを編集する必要があります。詳細は、JDeveloper のヘルプ・トピック「[リファレンス : Oracle の Type 2 JDBC ドライバ \(OCI\) に対する接続要件](#)」を参照してください。`jdev.conf` ファイルは、`oracle_home/jdev/bin` ディレクトリにあります。また、リリース 2 のクライアント・ファイルと JDBC ドライバ・ファイルで、バージョンを一致させる必要もあります。このため、ヘルプ・トピックの手順を実行するときには、リリース 2 のクライアント・ファイルが格納されている Oracle ホームを参照する必要があります。
- 手動によるアップグレードの詳細は、リリース・ノートを参照してください。

3.2.2.3 Oracle Reports Developer

- Oracle Application Server Portal の統合手順については、『[Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド](#)』を参照してください。
- Oracle OLAP Server の多次元データを基にレポートを作成する場合は、Oracle Reports Builder オンライン・ヘルプの Express データ・ソースの設定方法を参照してください。「[Express データソースの構成](#)」というトピックを検索します。Oracle Reports Developer のリリース・ノートにも、Oracle OLAP Server への接続準備に関する重要な情報が記載されています。

注意: HP-UX と Linux では、Oracle Reports から Oracle OLAP Server への接続はサポートされていません。

- Reports Services の起動および停止の手順については、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』を参照してください。
- 電子メールの送信に使用するサーバーは、Reports Server 構成ファイル、*reports_server_name.conf* で変更できます。このファイルは、*oracle_home\$\reports\$\conf* ディレクトリ (Windows) または *oracle_home/reports/conf* ディレクトリ (UNIX) にあります。
- Oracle Application Server に付属の Merant JDBC ドライバを使用するレポートは、Oracle Application Server のみでデプロイする必要があります。他のアプリケーション・サーバーに対する JDBC 問合せによりレポートをデプロイできるようにする場合は、Merant ドライバのライセンスを取得するか、開発およびデプロイ用に別の JDBC ドライバを使用する必要があります。

Oracle Application Server に付属の Merant JDBC ドライバを使用するには、Oracle Developer Suite をインストールしたときと同じ Oracle ホームに、Oracle Application Server をインストールします。このとき、インストール・オプションに J2EE と Web Cache を指定します。次に、*oracle_home\$\reports\$\conf\$\jdbcpds.conf* ファイル (Windows) または *oracle_home/reports/conf/jdbcpds.conf* ファイル (UNIX) で、Merant JDBC ドライバに関する情報を指定します。

ドライバに関する情報としては、通常、ドライバ名、接続文字列の書式、ドライバの Java クラスを指定します。

たとえば、Sybase を使用する場合、Merant ドライバに関する記述は次のようになります。

```
<driver name = "sybase-merant"
        sourceDatabase = "sybase"
        subProtocol = "merant:sybase"
        connectString = "jdbc:subProtocol://databaseName"
        class = "com.merant.datadirect.jdbc.sybase.SybaseDriver">
</driver>
```

ここで、

name は、Oracle Reports Developer で JDBC ドライバを特定するための一意な名前です。

sourceDatabase は、アクセスするデータベースの名前です。

subProtocol はドライバ固有の名前なので、該当するドライバのドキュメントを参照してください。たとえば、Merant ドライバを Sybase データベース用に使用する場合、*subProtocol* は *merant:sybase* となります。また、SQL Server データベース用の場合は、*sqlserver* となります。

connectString は、ドライバの接続文字列の書式です。

上の例では、

jdbc:subProtocol://databaseName と指定しています。

`class` はドライバのメイン Java クラス・ファイル名です。この値はドライバによって異なるので、それぞれのドキュメントを参照してください。たとえば、Sybase データベース用 Merant ドライバの場合

`com.merant.datadirect.jdbc.sybase.SybaseDriver`、SQL Server データベース用の場合は `com.merant.datadirect.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver` となります。

詳細は、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』の「JDBC PDS の構成と使用」を参照してください。`oracle_home$reports$conf$jdbcpds.conf` ファイル (Windows) または `oracle_home/reports/conf/jdbcpds.conf` ファイル (UNIX) にも、カスタム・ドライバの設定に関する説明があります。Oracle Reports Developer オンライン・ヘルプの「JDBC PDS」も参照してください。

Windows の場合のみ: Business Intelligence オプションでインストールした場合、Oracle Reports Developer から Oracle Software Configuration Manager のソース・コード管理機能を使用するには、Rapid Application Development オプションまたは完全オプションを再度インストールしてください。

3.2.2.4 Oracle Discoverer Administrator

- コンピュータに旧バージョンの Discoverer Administrator (従来の Discoverer Administration Edition に相当) がインストールされている場合、Oracle Discoverer Administrator で管理作業を行うには、End User Layer をアップグレードする必要があります (ただし、リリース 9.0.2.53 以降がインストールされている場合は、EUL のアップグレードは不要です)。『Oracle Discoverer Administrator 管理ガイド』の第 23 章「古いバージョンの Discoverer からのアップグレード」を参照してください。

3.2.2.5 Oracle Forms Developer

- Oracle Forms Developer 10g リリース 9.0.4 (Oracle Forms) でストアド Java オブジェクトを利用するには、必要な Java クラスおよび PL/SQL パッケージを Oracle データベースにインストールする必要があります。Oracle Forms Developer の Java Object サポートをインストールするには、次の手順を行います。

1. `oracle_home$dbs` ディレクトリ (Windows) または `oracle_home/dbs` ディレクトリ (UNIX) の中で、インストール・スクリプトを検索します。Java Object サポートをインストールするには、次のファイルが必要です。

```
dejavins.sql  
dejavaux.sql  
derefls.plb  
dereflb.plb  
dedbjava.jar
```

2. スクリプトが格納されているディレクトリから、SQL*Plus を起動します。

3. SYSTEM としてログインします。

インストールが正常に完了すれば、スキーマ SYSTEM の下に ORA_DE_REFLECTION パッケージ (derefls.plb および dereflb.plb) が見つかります。

- Oracle Application Server を使用して Web に Oracle Forms Developer アプリケーションをデプロイする方法については、『Oracle Application Server Forms Services 利用ガイド』を参照してください。
- Oracle Forms Developer アプリケーションを Forms6i から Oracle Forms Developer 10g に移行するために、開発者、システム管理者、データベース管理者が知っておくべき情報については、『Oracle Forms Developer and Forms Services: Forms アプリケーションの Forms6i からの移行』を参照してください。
- ソース管理やデバッガの機能を使用する場合の設定手順については、Oracle Forms Developer のオンライン・ヘルプを参照してください。
- オンライン・ヘルプを更新するには、次の OTN-J Web サイトから JAR ファイルをダウンロードしてください。

<http://otn.oracle.co.jp>

3.2.2.6 Oracle Software Configuration Manager (Oracle SCM)

- リポジトリをインストール、アップグレードまたは移行する手順については、『Oracle Software Configuration Manager Repository インストレーション・ガイド』を参照してください。このドキュメントは、Windows のスタート・メニューから参照できます。また、[第 A.7 項「Oracle Software Configuration Manager」](#) も参照してください。
- Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) CD Pack に Oracle Designer の最新のパッチセットが含まれている場合には、最新の 9.0.4 パッチ・セットを既存の Oracle ホームにインストールしてクライアント・ソフトウェアをアップグレードしておきます。これで、リポジトリを 2 回アップグレードする必要がなくなります。

3.2.2.7 Oracle Designer

- Oracle Designer で生成した Oracle Forms のフォームを実行するには、クライアントに JInitiator をインストールする必要があります。JInitiator をインストールするには、`oracle_home\jinit` ディレクトリに移動し、プログラム `jinit.exe` を実行します。生成した Oracle Forms のフォームの実行に必要なその他の手順は、Oracle Designer のリリース・ノートを参照してください。
- Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) CD Pack に Oracle Designer の最新のパッチセットが含まれている場合には、最新の 9.0.4 パッチ・セットを既存の Oracle ホームにインストールしてクライアント・ソフトウェアをアップグレードしておきます。これで、リポジトリを 2 回アップグレードする必要がなくなります。
- 新しいリポジトリをインストールする、または既存のリポジトリをアップグレードまたは移行する手順については、『Oracle Software Configuration Manager Repository イン

ストレーション・ガイド』を参照してください。このドキュメントは、Windows のスタート・メニューから参照できます。既存のリポジトリをアップグレードまたは移行する手順については、[第 A.8 項「Oracle Designer」](#) も参照してください。

3.2.3 コンポーネントの起動

Oracle Developer Suite のコンポーネントを起動する前に、前の項で説明したインストール完了後の全般的な作業およびコンポーネント固有の作業を完了しておいてください。また、コンポーネントを旧バージョンのアップグレードする場合は、アップグレードに必要な手順を必ず実行してください。各コンポーネントのアップグレード手順については、[付録 A 「アップグレードに関する注意」](#) を参照してください。

コンポーネントのインストール完了後の作業およびアップグレード作業が完了したら、次のようにコンポーネントを起動します。

3.2.3.1 Oracle9i JDeveloper および Oracle Business Intelligence Beans

Windows: JDeveloper を起動するには、プログラム `oracle_home\jdev\bin\jdevw.exe` を実行します。診断情報を表示するコンソール・ウィンドウを表示するには、プログラム `oracle_home\jdev\bin\jdev.exe` を実行します。

UNIX: JDeveloper を起動するには、プログラム `oracle_home/jdev/bin/jdev` を実行します。

Oracle Business Intelligence Beans は、JDeveloper の一部として使用できます。

3.2.3.2 Oracle Reports Developer

Windows: Reports Builder を起動するには、タスクバーから「スタート」→「プログラム」→「Oracle Developer Suite - oracle_home」→「Oracle Reports Developer」→「Reports Builder」を選択します。

UNIX: Oracle Reports Developer を起動するには、`oracle_home/bin` ディレクトリに移動し、`rwbuilder.sh` を実行します。

3.2.3.3 Oracle Discoverer

Oracle Developer Suite には、Oracle Discoverer Administrator および Oracle Discoverer Desktop という、Oracle Discoverer のコンポーネントが 2 つ含まれています。

3.2.3.3.1 Oracle Discoverer Administrator

Windows のみ: Oracle Discoverer Administrator を起動するには、次の手順を行います。

1. タスクバーから、

「スタート」→「プログラム」→「Oracle Developer Suite - oracle_home」→「Discoverer Administrator」を選択して、「Oracle Discoverer Administrator に接続」ダイアログ・ボックスを表示します。

2. 「ユーザー名」フィールドに、Discoverer Administrator の起動に使用するデータベース・ユーザーのユーザー名を入力します。
3. 「パスワード」フィールドに、Discoverer の起動に使用するデータベース・ユーザーのパスワードを入力します。
4. 次の説明に従って、「データベース」フィールドに接続先のデータベース名を指定します。
 - デフォルトの Oracle データベースにログインする場合は、「データベース」フィールドには何も入力しないでください。
 - デフォルト以外の Oracle データベースにログインする場合は、データベース名を指定します（使用するデータベース名が不明の場合は、データベース管理者に連絡してください）。
5. 「接続」ボタンをクリックして Discoverer Administrator を起動し、データベースに接続します。

3.2.3.3.2 Oracle Discoverer Desktop

Windows のみ : Oracle Discoverer Administrator を起動するには、次の手順を行います。

注意 : Oracle Discoverer Desktop で新しいワークブックを作成したり、既存のワークブックを開くには、End User Layer が存在している必要があります（End User Layer とは、Oracle Discoverer Administrator を使用して作成されたもの）。

1. タスクバーから、「スタート」→「プログラム」→「Oracle Developer Suite - oracle_home」→「Discoverer Desktop」を選択し、「Oracle Discoverer Desktop に接続」ダイアログ・ボックスを表示します。
2. 「ユーザー名」フィールドに、Discoverer Desktop の起動に使用するデータベース・ユーザーのユーザー名を入力します。
3. 「パスワード」フィールドに、Discoverer の起動に使用するデータベース・ユーザーのパスワードを入力します。
4. 次の説明に従って、「データベース」フィールドに接続先のデータベース名を指定します。
 - デフォルトの Oracle データベースにログインする場合は、「データベース」フィールドには何も入力しないでください。
 - デフォルト以外の Oracle データベースにログインする場合は、データベース名を指定します（使用するデータベース名が不明の場合は、データベース管理者に連絡してください）。
5. 「接続」ボタンをクリックして Discoverer Desktop を起動し、データベースに接続します。

3.2.3.4 Oracle Forms Developer

Windows: Forms Builder を起動するには、「スタート」→「プログラム」→「Oracle Developer Suite - oracle_home」→「Oracle Forms Developer」→「Forms Builder」を選択します。

UNIX: Oracle Forms Builder を起動するには、`oracle_home/bin` ディレクトリに移動し、`f90desm.sh` を実行します。

3.2.3.5 Oracle Software Configuration Manager (Oracle SCM)

Windows のみ: Oracle Software Configuration Manager を起動するには、タスクバーから「スタート」→「プログラム」→「Oracle Developer Suite - oracle_home」→「Software Configuration Manager」を選択します。次の表に示すメニュー・オプションから 1 つを選択します。

オプション	説明
Accessible Help	障害のある方のアクセスをサポートできるように、SCM オンライン・ヘルプ・システムを Oracle Help for Java 形式で開きます。
Command Line Tool Reference Guide	コマンドライン・ツールのドキュメントにアクセスします。
Configuration Management Overview	ソフトウェア構成管理の概要に関するドキュメントを開きます。
Online Help	SCM のオンライン・ヘルプにアクセスします。
Oracle SCM Repository Installation Guide	SCM のサーバー側リポジトリのインストール・ガイドを開きます。
Release Notes	SCM のリリース・ノートにアクセスします。
Repository Administration Utility	リポジトリのインストール、移行、およびアップグレードに使用するツールを起動します。
Repository Command Line Tool	リポジトリにコマンドライン・インターフェースが用意されているツールを起動します。
Repository Object Navigator	リポジトリの保守に使用するツールを起動します。
Use as Source Control for Forms and Reports	このオプションの使用方法については、SCM のドキュメントを参照してください。

3.2.3.6 Oracle Designer

Windows のみ: Oracle Designer を起動するには、「スタート」→「プログラム」→「Oracle Developer Suite - oracle_home」→「Designer」→「Oracle Designer」を選択します。

3.2.4 その他のドキュメント

すべてのコンポーネントにはそれぞれオンライン・ヘルプが付属し、製品とともに自動的にインストールされます。

リリース・ノートや、コンポーネントごとのインストール後の作業や設定に関するさらに詳しい情報は、リリース・ノートおよびコンポーネント別の管理ガイドまたは構成ガイドを参照してください。

Windows の場合、リリース・ノートや準備作業の情報にアクセスするには、「スタート」メニューから次の順に選択します。

- 「スタート」 → 「プログラム」 → 「Oracle Developer Suite - oracle_home」 → 「Release Notes」
- 「スタート」 → 「プログラム」 → 「Oracle Developer Suite - oracle_home」 → 「Documentation」 → 「スタート・ガイド」

また、ブラウザから、次のファイルを開くこともできます。

`oracle_home/doc/welcome/index.htm`

最新版のドキュメント、ホワイト・ペーパー、その他の付属資料は、次の OTN-J (Oracle Technology Network Japan) からもダウンロードできます。

<http://otn.oracle.co.jp>

インストール完了後の作業

4

アンインストールと再インストール

この章では、Oracle Developer Suite のアンインストールと再インストールの手順について説明します。説明する項目は次のとおりです。

- アンインストール
- 再インストール

4.1 アンインストール

次の項では、アンインストール手順について説明します。

4.1.1 インストーラを使用したアンインストール手順

1. Windows の場合は、アンインストール処理を開始する前に、Oracle サービスをすべて停止します。UNIX の場合は、アンインストール処理を開始する前に、Oracle プロセスをすべて停止してください。
2. インストーラを起動します。手順の詳細は、[第 2.7.4 項「インストーラの起動」](#) を参照してください。

注意： インストーラを起動すると、コンピュータのすべての Oracle ホームにインストールされた Oracle 製品およびコンポーネントが、すべて表示されます。製品およびコンポーネントは、必要なだけアンインストールできます。ここでは、Oracle Developer Suite のアンインストールについてのみ説明します。

Oracle Developer Suite のコンポーネントを、個別にアンインストールすることはできません。Oracle Developer Suite の 1 つのコンポーネントを選択してアンインストールしようとすると、Oracle Developer Suite のすべてのコンポーネントが削除されます。

インストーラが起動すると、「ようこそ」画面が表示されます。「製品の削除」をクリックします。

「ようこそ」画面には、アンインストール処理を行うボタンが 2 つあります。

- **製品の削除：**これをクリックすると、個別に指定した製品がアンインストールされます。
- **インストール済の製品：**これをクリックすると、現在インストール済の製品の表示やアンインストールが実行されます。

3. 「インベントリ」画面で、インストールされている製品の一覧を確認し、「Oracle Developer Suite 10g 9.0.4.0.0」を選択します。

「インベントリ」画面は、「ようこそ」画面で「製品の削除」をクリックするか、他の画面で「インストール済の製品」をクリックすると表示されます。

注意： 製品名の前に「+」という記号があれば、そこにさらにコンポーネントやファイルがインストールされていることを表します。

「+」記号をクリックすると、コンポーネントやファイルの名前が展開表示されます。

「インベントリ」画面は、1つまたは2つの、タブが付いたペインで構成されます。

「内容」ペインは必ず表示されます。現在コンピュータにインストールされている Oracle 製品が表示されます。このペインには次のボタンと製品情報が表示されます。

- **場所**: 選択された製品やコンポーネントの場所が絶対パスで表示されます。
- **空のホームを表示する**:これをクリックすると、インストールされた製品の表示が切り替わります。このチェックボックスをオンにすると、現在製品がインストールされていない Oracle ホームのディレクトリ情報が表示されます。
- **削除**:これをクリックすると、チェックを付けた製品がすべて、Oracle ホームからアンインストールされます。確認画面が表示されます。
- **ヘルプ**:これをクリックすると、「インベントリ」画面の機能についての説明が表示されます。
- **別名保存**:これをクリックすると、インストールされた製品名の一覧が、テキスト・ファイルに保存されます。「別名保存」をクリックすると、ファイル保存ダイアログ・ボックスが表示されます。ファイル名を入力し、「保存」をクリックすると、インストールされた製品名の一覧がそのテキスト・ファイルに保存されます。
- **閉じる**:これをクリックすると、「インベントリ」画面が閉じます。

「環境」ペインは、Windows プラットフォームで表示されます。コンピュータにインストールされたすべての Oracle ホームに現在設定されているパスと環境変数が表示されます。このペインには次のボタンと製品情報が表示されます。

- **セントラル・インベントリの場所**:これは、コンピュータにインストールされたすべての Oracle ホームに関する情報が含まれているディレクトリです。
- **Oracle ホームの一覧**:これは、コンピュータにインストールされた Oracle ホームの一覧です。Oracle ホームごとの名前とディレクトリ・パスが表示されます。
- **パス**:これは、Windows の PATH 環境変数の現在値です。
- **適用**:これをクリックすると、PATH 環境変数に Oracle ホーム・ディレクトリが追加されます。一覧から Oracle ホームを1つ以上選択し、「適用」をクリックすると、PATH 変数に追加されます。PATH 変数に表示される Oracle ホーム・ディレクトリの順序を変更するには、Oracle ホームの一覧の右側にある上矢印ボタンと下矢印ボタンを使用します。
- **ヘルプ**:これをクリックすると、「インベントリ」画面の機能についての説明が表示されます。
- **別名保存**:これをクリックすると、ディレクトリ情報がテキスト・ファイルに保存されます。「別名保存」をクリックすると、ファイル保存ダイアログ・ボックスが表示されます。ファイル名を入力します。すべての Oracle ホームと PATH 変数の一覧が、そのテキスト・ファイルに保存されます。
- **閉じる**:これをクリックすると、「インベントリ」画面が閉じます。

4. 「場所」 ボックスに表示されている Oracle Developer Suite の絶対パスをメモしてください。この情報は、インストーラが終了してから、ファイルやフォルダを手動で削除する場合に必要になります。

5. 準備ができたら「削除」をクリックします。

6. 「確認」画面で選択内容を確認し、「はい」をクリックします。

「確認」画面は、「インベントリ」画面で「削除」をクリックすると表示されます。

「確認」画面には、アンインストールの対象として選択した製品名が表示されます。必要に応じてスクロールし、製品名を確認してください。

「確認」画面には次のボタンがあります。

- **ヘルプ**: これをクリックすると、「確認」画面のヘルプが表示されます。
- **はい**: これをクリックすると、選択した製品のアンインストールが開始されます。
- **いいえ**: これをクリックすると、「インベントリ」画面に戻ります。選択した製品は Oracle ホームから削除されません。

「はい」をクリックして、アンインストールを開始します。

7. アンインストール処理の進行状況を監視します。

「削除」プログレス・バー画面は、「確認」画面で「はい」をクリックすると表示されます。Oracle Developer Suite のコンポーネントがすべて検出され、削除されます。

「削除」プログレス・バー画面には次のボタンがあります。

- **取消**: これをクリックすると、アンインストールが中断します。アンインストール処理の中断を確認するダイアログ・ボックスが表示されます。「はい」をクリックしてアンインストールを中止するか、「いいえ」をクリックしてアンインストールを続行します。

8. アンインストールが完了すると、再び「インベントリ」画面が表示されます。「閉じる」をクリックしてこの画面を終了し、「ようこそ」画面に戻ります。

9. 「ようこそ」画面で「取消」をクリックしてインストーラを終了します。インストーラを終了する確認画面が表示されたら「はい」をクリックします。

10. 残っているファイルやフォルダがあれば、手動で削除する必要があります。前の手順でメモした場所で、ファイルやフォルダを削除してください。

11. **Windows の場合のみ**: コンピュータを再起動します。

これで Oracle Developer Suite がアンインストールされました。

4.2 再インストール

インストーラを使用して、すでにインストールされている Oracle Developer Suite にコンポーネントを追加できます。これには、インストーラをもう一度起動して、必要なコンポーネントがインストールされるインストール・タイプを選択します。すでにインストールされているコンポーネントは上書きされません。

すでにインストールされている Oracle Developer Suite を上書きして完全に再インストールを行う場合は、いったんアンインストールしてから再インストールしてください。

関連項目： 第 4.1 項「[アンインストール](#)」

再インストール

A

アップグレードに関する注意

この付録では、Oracle Developer Suite の旧バージョンからの移行またはアップグレードについての基本的な情報を説明します。説明する項目は次のとおりです。

- [Oracle Developer Suite](#)
- [Oracle Business Intelligence Beans](#)
- [Oracle9i JDeveloper](#)
- [Oracle Reports Developer](#)
- [Oracle Discoverer Administrator](#)
- [Oracle Forms Developer](#)
- [Oracle Software Configuration Manager](#)
- [Oracle Designer](#)
- [その他のドキュメント](#)

A.1 Oracle Developer Suite

Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) の前のバージョンは、Oracle 9i Developer Suite リリース 2 (9.0.2) とそれ以前の Oracle Internet Developer Suite リリース 1.0.2.4.x に相当します。Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) のコンポーネントは、表 A-1 に示すように、すべてが新しいバージョンに変わりました。

表 A-1 Oracle Developer Suite で更新されたコンポーネント

コンポーネント	リリース 1	リリース 2 (9.0.2) バージョン	10g (9.0.4) バージョン
Oracle9i JDeveloper (Oracle Business Intelligence Beans を含む)	3.2.3 ¹	9.0.2.x	9.0.4.x
Oracle Reports Developer	6i リリース 2	9.0.2.x	9.0.4.x
Oracle Discoverer Administrator (従来の Discoverer Administration Edition に相当)、Oracle Discoverer Desktop を含む	4.1.37	9.0.2.x	9.0.4.x
Oracle Warehouse Builder	2.1.1.34.11 および 9.0.2.56.0	9.0.2.x	N/A ²
Oracle Forms Developer	6i リリース 2	9.0.2.x	9.0.4.x
Oracle Software Configuration Manager	6i リリース 4	9.0.2.x	9.0.4.x
Oracle Designer	6i リリース 4	9.0.2.x	9.0.4.x

¹ Oracle9i Business Intelligence Beans は、Oracle9iDS リリース 2 (9.0.2) が最初のリリースです。

² Oracle9i Warehouse Builder リリース 2 (9.2) は個別 CD として Oracle Developer Suite に同梱されています。

他にも個別にリリースされたコンポーネントがあります。たとえば、Oracle9i JDeveloper は、Oracle9i Developer Suite リリース 2 (9.0.2) の後で、リリース 9.0.3 としてリリースされました。

Oracle Internet Developer Suite リリース 1.0.2.x から Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) に移行するには、Oracle Developer Suite を新しい Oracle ホームにインストールする必要があります。旧バージョンがインストールされている Oracle ホームへの Oracle Developer Suite のインストールに関する情報は、第 2.4 項「1 つの Oracle ホームでの共存」を参照してください。

Oracle Developer Suite をインストールし、インストール後に必要な作業を実行したら、次の項の説明に従って各コンポーネントを移行します。

A.2 Oracle9i JDeveloper

JDeveloper 9.0.2/9.0.3 の製品版から JDeveloper 9.0.4 にユーザー設定を移行できます。システム設定、ライブラリ、および接続情報の移行が可能です。

リリース 3.2.3 から 9.0.4 に直接移行することはできません。

A.2.1 リリース 9.0.2/9.0.3 からリリース 9.0.4 への JDeveloper ユーザー設定の移行

注意： 次の手順に従い、別にインストールした JDeveloper からユーザー設定を移行した場合、移行先の JDeveloper すでに設定済の内容が失われる場合があります。

ユーザー設定を移行するには、次の手順を行います。

1. コマンドラインまたはシェル・プロンプトから、-migrate フラグを指定して JDeveloper を起動します。

```
jdev -migrate
```

「ユーザー設定の移行」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2. 移行する JDeveloper のバージョンを選択します。

「バージョン」ドロップダウン・リストに何も表示されない場合は、「参照」をクリックしてバージョンを検索します。ディレクトリ `previous_install_home/jdev/system` (Windows) または `previous_install_home/jdev/system` (UNIX) を選択します。ここで、`previous_install_home` は、移行元の JDeveloper がインストールされているホーム・ディレクトリを表します。

3. 移行する設定およびカスタマイズした設定を選択します。ここではすべてのオプションを選択することをお薦めします。

4. 「OK」をクリックします。ユーザー設定が移行されます。

A.2.2 移行に関するその他の注意事項

移行に関する注意事項の詳細は、JDeveloper オンライン・ヘルプの「JDeveloper スタート・ガイド」の項のトピック「Oracle9i JDeveloper 9.0.4 への移行方法」を参照してください。

A.3 Oracle Business Intelligence Beans

Oracle Business Intelligence Beans を旧リリースからアップグレードする場合は、 JDeveloper BI Beans プロジェクトを設定する必要があります。

A.3.1 リリース 9.0.3 からリリース 9.0.4 への Oracle BI Beans プロジェクトの 移行

Oracle BI Beans リリース 9.0.3 で作成されたプロジェクトをリリース 9.0.4 に移行するには、次の作業を順に行います。これらの手順は、移行するプロジェクトごとに実行する必要があります。

1. JDeveloper でプロジェクトを設定できるようにします。

JDeveloper 9.0.4 では、ワークスペースとプロジェクトで異なるファイル形式が使用されるため、必ず次の手順に従って既存のワークスペースとプロジェクトをアップグレードしてください。

- a. JDeveloper 9.0.4 で、該当するワークスペースを開きます。
- b. ワークスペースをアップグレードするように要求されたら、「はい」をクリックします。
- c. uiXML を使用するアプリケーションを移行する場合は、「UIX のリソースのアップグレード」ダイアログ・ボックスが表示されます。「何もしない」を選択します。手順 4 で、手動で移行を行います。

これで、ワークスペースおよびプロジェクト・ファイルが、9.0.3 形式から 9.0.4 形式に変更されます。

2. プロジェクトで使用されるライブラリをアップグレードします。

プロジェクトで使用されている OLAP ライブラリを更新するには、次の手順を行う必要があります。

- a. システム・ナビゲータでプロジェクト・ノードを右クリックし、ドロップダウン・リストから「プロジェクトの設定」を選択します。
- b. 「Development」で「ライブラリ」をクリックします。
- c. 使用可能なライブラリのリストから「OLAP API 92」を選択し、「移動」ボタン（「>」）をクリックして、選択したライブラリのリストに移動します。
- d. 選択したライブラリのリストから「OLAP API 901」を選択し、「削除」ボタン（「<」）をクリックしてリストから削除します。
- e. ダイアログ・ボックスは閉じないでください。次の手順に進みます。

3. プロジェクトの設定を更新します。

注意： この手順が必要になるのは、プロジェクトに何も追加しなかった場合だけです。プロジェクトにタグを追加したり、プロジェクトを拡張した場合、これらの作業は自動的に実行されます。

BI Beans プロジェクトには、Oracle9i リリース 2 JDBC ドライバが必要です。ドライバをアップグレードしていない場合は、アップグレードする必要があります。詳細は、「[その他の作業](#)」の第 3.2.2.2 項「[Oracle Business Intelligence Beans](#)」を参照してください。リリース 2 JDBC ドライバの場所が変更されたため、リリース 9.0.3 でアップグレードしている場合であっても新しいドライバへのアップグレードが必要です。ドライバのアップグレード後は、次のようにして各プロジェクトの Java オプションを更新する必要があります。

- a. 「プロジェクトの設定」ダイアログ・ボックスの「Development」で、「実行」をクリックします。
 - b. 「Java オプション」フィールドの *oracle_home* を、JDeveloper がインストールされているディレクトリの絶対パスに置き換えます。

```
-Djava.ext.dirs=oracle_home/bibeans/jdbc/lib_92
```
 - c. 「ライブラリ」をクリックします。
 - d. 「Oracle JDBC 92」を「使用可能なライブラリ」から「選択済のライブラリ」に移動します。
 - e. 「OK」をクリックします。
4. **cabo** ディレクトリをアップグレードします (HTML クライアント・アプリケーションのみ)。

JDeveloper で HTML プロジェクトを作成すると、*public_html* ディレクトリに *cabo* ディレクトリが作成されます。このディレクトリには、uiXML、および BI Beans のイメージ、スタイルシート、および JavaScript ファイルが含まれますが、これらはリリース間で異なる場合があります。このディレクトリをアップグレードするには、次の手順を行います。

- a. アップグレードするプロジェクトの *public_html* ディレクトリに移動します。
- b. *cabo* ディレクトリの名前を *cabo.9.0.3* に変更します。
- c. JDeveloper で、同じワークスペースに新しいプロジェクトを作成します。
- d. このプロジェクトを選択し、「ファイル」メニューから「新規」を選択します。
- e. 「Business Intelligence」カテゴリで、「Servlet アプリケーション」を選択します (サーブレットのアップグレードではない場合も、「Servlet アプリケーション」を選択して、最新のイメージを必ず取得してください)。

- f. サーブレット・ウィザードの画面に入力を行います。BI デザイナを指定した後は、デフォルトをそのまま使用してかまいません。サーブレットが生成されると、プロジェクトの新しい cab0 ディレクトリが作成されます。
- g. 新しいプロジェクトの public_html ディレクトリに移動し、新しい cab0 ディレクトリを、BI Beans 9.0.3 からアップグレードするプロジェクトの public_html ディレクトリにコピーします。
- h. 古いディレクトリ (cab0.9.0.3) に、他にもファイルが含まれている場合（新しいスタイルシートや .xss ファイルを作成していた場合など）は、それらのファイルも新しい cab0 ディレクトリにコピーする必要があります。
- i. (オプション) 新しく作成したプロジェクトは、削除してかまいません。

A.4 Oracle Reports Developer

- Reports 6i のサーバー用永続ファイルやサーバー構成ファイルを再利用する場合は、これらのファイルを Oracle Reports Server 10g 9.0.4 (Reports Server) のディレクトリにコピーできます。Reports Server により、6i のファイルが自動的に Reports Server 10g 9.0.4 の形式に変換されます。このためには、次のファイルをコピーします。

Windows の場合 :

- `6i_oracle_home\reports60\server\report_server_name.ora`
を次の場所にコピーしてください。
`10g_oracle_home\reports\conf\report_server_name.ora`
- `6i_oracle_home\reports60\server\report_server_name.dat`
を次の場所にコピーしてください。
`10g_oracle_home\reports\server\report_server_name.dat`

UNIX の場合 :

- `6i_oracle_home/reports60/server/report_server_name.ora`
を次の場所にコピーしてください。
`10g_oracle_home/reports/conf/report_server_name.ora`
- `6i_oracle_home/reports60/server/report_server_name.dat`
を次の場所にコピーしてください。
`10g_oracle_home/reports/server/report_server_name.dat`

- 旧バージョンの Oracle Reports から .rdf ファイルを開き、PL/SQL を再コンパイルする必要があります。

- Oracle9iAS リリース 1.0.x で Oracle Discoverer をインストールした場合、Visibroker 3.4 もインストールされています。Oracle Application Server Reports Services 10g (9.0.4) を使用するには Visibroker 4.5 が必要ですが、Visibroker 4.5 を Visibroker 3.4 と同時に実行することはできません。Oracle Application Server Reports Services 10g (9.0.4) を、旧バージョンの Oracle Discoverer と同じコンピュータにインストールする場合は、事前に Visibroker 3.4 を停止する必要があります。また、インストール後、旧バージョンの Oracle Discoverer を実行する必要がある場合は、Visibroker 4.5 を停止してから Visibroker 3.4 を起動してください。なお、再び Visibroker 4.5 を起動するまでは、Oracle Application Server Reports Services 10g (9.0.4) のコンポーネントは使用できません。

A.5 Oracle Discoverer Administrator

コンピュータに旧バージョンの Discoverer Administrator (従来の Discoverer Administration Edition に相当) がインストールされている場合、Oracle Discoverer Administrator で管理作業を行うには、End User Layer をアップグレードする必要があります (ただし、リリース 9.0.2.53 以降がインストールされている場合は、EUL のアップグレードは不要です)。

EUL のアップグレード方法については、『Oracle Discoverer Administrator 管理ガイド』の第 23 章「古いバージョンの Discoverer からのアップグレード」を参照してください。

A.6 Oracle Forms Developer

『Oracle Forms Developer and Forms Services: Forms アプリケーションの Forms 6i からの移行』を参照してください。

A.7 Oracle Software Configuration Manager

Oracle Software Configuration Manager は、従来の Oracle Repository に相当します。

Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) CD Pack に Oracle Designer の最新のパッチセットが含まれている場合には、最新の 9.0.4 パッチ・セットを既存の Oracle ホームにインストールしてクライアント・ソフトウェアをアップグレードしておきます。これで、リポジトリを 2 回アップグレードする必要がなくなります。

- リリース 6i より前のリポジトリから移行する場合は、次の手順を行います。
1. Rapid Application Development または完全インストール・オプションを指定して、Oracle Developer Suite 10g をインストールします。
 2. 新しいリポジトリをインストールします。手順については、『Oracle Software Configuration Manager Repository インストレーション・ガイド』を参照してください。このドキュメントは、Windows のスタート・メニューから参照できます。

3. リリース 6i より前の既存のリポジトリから、新しいリポジトリにデータを移行します。手順については、『Oracle Software Configuration Manager Repository インストレーション・ガイド』を参照してください。このドキュメントは、Windows のスタート・メニューから参照できます。
- リリース 6i 以降のリポジトリからアップグレードする場合は、次の手順を行います。
 - リリース 6i 以降のリポジトリをアップグレードします。手順については、『Oracle Software Configuration Manager Repository インストレーション・ガイド』を参照してください。このドキュメントは、Windows のスタート・メニューから参照できます。

A.8 Oracle Designer

Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) CD Pack に Oracle Designer の最新のパッチセットが含まれている場合には、最新の 9.0.4 パッチ・セットを既存の Oracle ホームにインストールしてクライアント・ソフトウェアをアップグレードしておきます。これで、リポジトリを 2 回アップグレードする必要がなくなります。

- リリース 6i より前のリポジトリから移行する場合は、次の手順を行います。
 1. Rapid Application Development または完全インストール・オプションを指定して、Oracle Developer Suite 10g をインストールします。
 2. 新しいリポジトリをインストールします。手順については、『Oracle Software Configuration Manager Repository インストレーション・ガイド』を参照してください。このドキュメントは、Windows のスタート・メニューから参照できます。
 3. リリース 6i より前の既存のリポジトリから、新しいリポジトリにデータを移行します。手順については、『Oracle Software Configuration Manager Repository インストレーション・ガイド』を参照してください。このドキュメントは、Windows のスタート・メニューから参照できます。
- リリース 6i 以降のリポジトリからアップグレードする場合は、次の手順を行います。
 - リリース 6i 以降のリポジトリをアップグレードします。手順については、『Oracle Software Configuration Manager Repository インストレーション・ガイド』を参照してください。このドキュメントは、Windows のスタート・メニューから参照できます。

A.9 その他のドキュメント

すべてのコンポーネントにはそれぞれオンライン・ヘルプが付属し、製品とともに自動的にインストールされます。

最新版のドキュメント、ホワイト・ペーパー、その他の付属資料は、次の OTN-J (Oracle Technology Network Japan) からもダウンロードできます。

<http://otn.oracle.co.jp>

B

コンポーネント

Oracle Developer Suite では、最新の Oracle アプリケーション開発およびビジネス・インテリジェンス・ツールが 1 つに統合されています。Java や XML などのインターネット標準技術に基づく製品群により、Oracle Application Server や Oracle Database を活用したアプリケーションを効率的に構築する、理想的な開発環境を実現できます。

この付録では、Oracle Developer Suite に付属する開発ツールについて説明します。説明する項目は次のとおりです。

[Oracle9i JDeveloper](#)

[Oracle Business Intelligence Beans](#)

[Oracle Reports Developer](#)

[Oracle Discoverer Administrator](#)

[Oracle Forms Developer](#)

[Oracle Software Configuration Manager](#)

[Oracle Designer](#)

[その他のドキュメント](#)

B.1 Oracle9i JDeveloper

Oracle9i JDeveloper は、J2EE および XML の開発環境で、E-Business アプリケーションや Web サービスを開発、デバッグ、デプロイするために必要な、様々な支援機能が組み込まれています。開発効率を向上するため、業界最速の Java デバッガや革新的なプロファイラ、そしてコード性能を分析改善する CodeCoach をはじめとする、開発の各工程にわたるツールが統合されています。さらに、アプレット、JavaBeans、JavaServer Pages、サーブレット、Enterprise JavaBeans などの標準 J2EE コンポーネントを容易に開発し、高品質を確保できるよう、ウィザード、エディタ、ビジュアル設計ツール、デプロイ・ツールも組み込まれています。

拡張性や処理性能に優れた J2EE アプリケーションを容易に開発できるよう、JDeveloper には Business Components for Java (BC4J) という、柔軟で拡張可能な J2EE フレームワークが付属しています。BC4J は、Sun の J2EE デザイン・パターンを実装するためのオブジェクト・リレーションナル・マッピング・ツールで、品質の高い J2EE アプリケーションを短期間で開発することができます。

B.1.1 対応するデプロイ環境

JDeveloper を使用して、様々な環境においてアプリケーションをデプロイできます。JDeveloper は Sun の Java SDK 1.4.1 に基づき、開発したアプリケーションやコンポーネントは、同じ SDK のバージョンが稼動する J2EE 認定プラットフォーム上でデプロイできます。

JDeveloper、および JDeveloper で開発したクライアントは様々な環境で動作しますが、このバージョンの JDeveloper は特に次の環境において認証されています。

- ブラウザ
 - Netscape Navigator 4.79 以降
 - Microsoft Internet Explorer 5.5 および 6.0
 - Java WebStart
- アプリケーション・サーバー
 - Oracle Application Server リリース 9.0.2、9.0.3 および 9.0.4
 - Oracle Application Server Containers for J2EE 9.0.2、9.0.3 および 9.0.4
 - Visibroker 4.5.1
 - WebLogic 6.1 および 7.0 の Service Pack 1
 - Apache Tomcat 4.1.12
 - JBoss 3.0.4 (Tomcat 4.1.12 併用)

- クライアント側のランタイム・プラットフォーム (JDeveloper で開発され、適切なアプリケーション / データベース・サーバーにデプロイされたアプリケーション、WebStart および JSP を利用する側のプラットフォーム)
 - Windows NT 4.0 (Service Pack 6a 以降)
 - Linux x86 (デスクトップ環境として KDE2 または GNOME を使用)
 - HP-UX (デスクトップ環境として CDE または VUE を使用)
- JDBC
 - Oracle Thin JDBC
 - Oracle JDBC-OCI8
 - Sun JDBC-ODBC Bridge
- データベース (接続して開発できるデータ・ソース)
 - Oracle9i RDBMS R9.0.1 および R9.2.0.2
 - Oracle8i RDBMS R8.1.7

Netscape Navigator や Microsoft Internet Explorer に組み込まれている Java Virtual Machine (JVM) は、JDeveloper で使用される JVM 1.4.1 より古いバージョンです。そのため、ユーザーのブラウザに JVM プラグインをインストールしなければならない場合があります。プラグインは、次のサイトからダウンロードできます。

http://java.sun.com/products/plugin/index_ja.html

B.1.2 オラクルの Web サイト

オラクル社では、様々な資料やソフトウェアを、Web を介して配布しています。代表的な Web サイトを紹介します。

- オラクル社（米国）のサイト
<http://www.oracle.com/>
- オラクル社（日本）のサイト
<http://www.oracle.co.jp/>
- Oracle9i JDeveloper
<http://www.oracle.co.jp/tools/jdeveloper/index.html>

- Oracle Technology Network (米国)
<http://otn.oracle.com/>
- Oracle Technology Network Japan (日本)
<http://otn.oracle.co.jp/>
- JDeveloper on OTN
<http://otn.oracle.co.jp/products/jdev/>
- JDeveloper OTN の会議室 (「掲示板」をクリック)
http://otn.oracle.co.jp/forum/9i_jdev.html

B.1.3 Oracle Business Intelligence Beans

Oracle Business Intelligence Beans は、JDeveloper に統合されたコンポーネントで、ビジネス・インテリジェンス機能を組み込んだアプリケーションの構築を可能にします。アプリケーションを HTML クライアント環境にデプロイすると、アプリケーションはサーバー側で実行され、その結果がユーザー側のブラウザに表示されます。アプリケーションを Java クライアント環境にデプロイすると、Java はユーザー側で実行されます。BI Beans の分析機能は、Oracle9i Database の新しい OLAP オプションを使用して実装されています。

Oracle BI Beans の主なコンポーネントは次のとおりです。

- プレゼンテーション Beans: グラフ、クロスタブ、表
- OLAP (data) beans: QueryBuilder、CalcBuilder、ディメンション・リスト
- BI Beans カタログおよび関連するデータ保存サービス
- ビジネス・インテリジェンス UIX コンポーネント (サーブレット) または JSP タグに基づいた、HTML クライアント用アプリケーション

B.1.3.1 デプロイの要件

この項では、デプロイ環境の前提条件を説明します。アプリケーションのデプロイについては、ヘルプ・システムを参照してください。目次で「Oracle Business Intelligence Beans」ノードを開き、アプリケーションのデプロイをクリックします。

データ・サーバー: OLAP オプションと必要なパッチ・セットをすべてインストールした、Oracle9i Enterprise Edition リリース 2 (9.2.0.3 以降)。必要なパッチ・セットの一覧、およびサポートされるデータベースのリリースに関する最新情報については、Oracle Technology Network Japan の Oracle BI Beans 製品ページ (<http://otn.oracle.co.jp/products/9iolap/index.html>) を参照してください。

メタデータ: ビジネス・インテリジェンス・アプリケーションに対応するよう、Oracle データベースに適切なメタデータを定義する必要があります。OLAP メタデータの定義については、Oracle9i のドキュメント『Oracle OLAP リファレンス リリース 2 (9.2.0.4)』およ

び『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド リリース 2 (9.2.0.4)』を参照してください。また、メタデータの作成ツールである Oracle Enterprise Manager の OLAP 管理ツールに付属しているヘルプ・システムも参照してください。Oracle Warehouse Builder を使用して、適切なメタデータを作成することもできます。

ブラウザ: HTML クライアント・アプリケーションで、ユーザーのブラウザが Cookie に対応している必要があります。

Unix プラットフォームの画像生成機能: UNIX 上の JSP やサーブレット・アプリケーション用の画像生成機能は、フレーム・バッファ・ハードウェアのないヘッドレス環境のコンピュータ上で実行する必要があります。次のようにして、明示的にヘッドレス・モードを有効にする必要があります。

1. JDeveloper のシステム・ナビゲータで、プロジェクト・ノードを右クリックし、ドロップダウン・リストから「プロジェクトの設定」を選択します。
2. 「Development」で「実行」をクリックします。
3. 次の Java オプションを追加します。

```
-Djava.awt.headless=true
```

Oracle Application Server にデプロイするアプリケーションの要件

Oracle BI Beans では、Oracle Application Server に付属するものとは異なる .jar ファイルが使用されます。Oracle Application Server に Oracle BI Beans アプリケーションをデプロイする場合は、『Oracle9i Business Intelligence Beans - BI Beans アプリケーションのための OC4J インスタンスの設定』の手順を実行する必要があります。このドキュメントは、Oracle Technology Network Japan の Oracle OLAP 製品ページ (<http://otn.oracle.co.jp/products/9iolap/index.html>) から入手できます。

BI Beans Catalog を使用するアプリケーションの要件

- **データベース:** BI Beans カタログは、Oracle9i Database リリース 2 に対応しています。
- **クライアント側のドライバ**
 - Oracle JDBC Thick (OCI) ドライバ。特にマルチユーザー環境では、より高い性能が得られます。また、WAN 環境で JDeveloper と併用することをお薦めします。このドライバは Oracle9i のインストール時にインストールされますが、設定が必要です。このドライバを設定するには、BI Beans を実行するコンピュータに Oracle9i クライアントをインストールする必要があります。Oracle9i クライアントは、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) (<http://otn.oracle.co.jp>) の Web サイトにある、Oracle9i ダウンロード・ページから単独でダウンロードできます。

または

- Oracle JDBC Thin (Pure Java) ドライバ。Oracle9i JDeveloper とともにインストールされます。WAN 環境以外で JDeveloper と併用することをお薦めします。

B.1.4 UIX

JDeveloper には UIX 技術のコンポーネントが統合されているため、サーブレットや JSP を使用する、HTML ベースのクライアントを短期間で構築できます。UIX は、J2EE 準拠の Web アプリケーションを構築するためのオープン・フレームワークです。UIX には、Java クラス・ライブラリ、API、パーサーのほか、ページ単位で画面を遷移する形態の Web アプリケーション（オンライン・ショッピング・アプリケーションなど）を作成するためのソフトウェアなども含まれています。UIX はサーバー・ベースの技術で、Java プログラミング言語で実装されますが、クライアントには Java は不要です。ブラウザさえあれば、UIX アプリケーションを表示できます。UIX は、HTML 準拠のブラウザやモバイル・デバイスなど、様々なクライアントをサポートします。UIX 技術は、`oracle.cabo` パッケージとそのサブパッケージに含まれています。

B.1.5 Bali

JDeveloper には Bali 技術コンポーネントが統合されており、Java アプレットや Java アプリケーションなど、Java をベースとした従来型のクライアントを短期間で構築するために利用できます。Bali は、Java ベースのクライアント・アプリケーションのプレゼンテーション層を柔軟に構築するためのフレームワークを構成します。Bali 技術は JFC (Java Foundation Classes) のフレームワーク上に構築され、Oracle Look and Feel の実装に活用できます。Java ベースの製品に統合するコンポーネントとして、Oracle Help for Java も提供されます。Bali 技術はすべて Java で実装され、`oracle.bali` パッケージおよびそのサブパッケージとしてまとまっています。

B.2 Oracle Reports Developer

Oracle Reports Developer は、動的データを基に高品質なレポートを作成し、Web 上に表示したり、紙に印刷したりするためのツールです。Oracle Reports Developer を使用して作成されたレポートは、すべて Oracle Application Server にシームレスにデプロイできます。Oracle Reports Developer を使用すると、必要なデータにアクセスし、任意の形式でレポートを作成してどこにでも配布できるので、情報の公開が容易になります。たとえば、SQL データベース、OLAP データベース、XML で記述されたデータ、JDBC に対応したデータ・ソースなどからデータを公開できます。

Oracle Application Server を使用して、HTML、PDF、区切り文字付きテキスト、RTF、PostScript、PCL、XML など、様々な形式の報告書を作成できます。さらに、独自のデータドリブン Java コンポーネントや、Oracle Reports Developer 用のカスタム JSP タグを、ウィザード・インターフェースを使用して HDML 文書に埋め込むことにより、HTML レポート・ページの機能を拡張できます。報告書作成の作業の大部分は、ウィザードによって行われます。また、報告書のテンプレートやデータのプレビュー機能を使用して、報告書の構成を簡単にカスタマイズできます。

B.3 Oracle Discoverer Administrator

Oracle Discoverer Administrator（従来の Oracle Discoverer Administration Edition に相当）は、業務ユーザー向けにデータのビューを設計および表示するためのツールです。業務担当者は、Discoverer Plus および Discoverer Viewer（Oracle Application Server に付属）を使用して、データ・ウェアハウス、データ・マート、およびオンライン・トランザクション処理システムのデータにアクセスできます。Oracle Discoverer Administrator には、Oracle Discoverer Desktop も含まれています。Discoverer Plus、Discoverer Desktop、および Discoverer Viewer のサポートに必要なツールは Oracle Discoverer Administrator だけです。

B.4 Oracle Forms Developer

Oracle Forms Developer は、短期間でアプリケーションを開発するためのツールです。様々な Java インタフェースを備え、データベースを活用した企業クラスのインターネット・アプリケーションを、高い生産性で構築できる環境を提供します。構築ソフトウェア、リエンタント・ウィザード、プロパティ・パレットを統合し、高機能で多言語に対応した対話フォームやビジネス論理を、最小限のコードで開発できます。Oracle Forms Developer を使用して開発したアプリケーションは、Oracle Application Server に付属の Forms サーブレットや Forms Listener サーブレットを使用することにより、ただちにインターネットにデプロイできます。

B.5 Oracle Software Configuration Manager

従来の Oracle Repository に相当する Oracle Software Configuration Manager (SCM) は、拡張性に富んだソフトウェア構成管理システムです。多数の開発者によって分担して行われるソフトウェア開発プロジェクトで、プロジェクトの規模や複雑さにかかわらず使用できます。リポジトリ・ベースのアーキテクチャにより、開発の各工程におけるデータを、構造化されているか否かにかかわらず管理できます。Oracle SCM には、バージョン管理やバージョン履歴、コンポーネント・ベースのアプリケーション・アーキテクチャ用構成管理、依存関係の管理などの機能が統合されています。

B.6 Oracle Designer

Oracle Designer を使用すると、データベースおよび、Java または HTML のユーザー・インターフェースのアプリケーションを、視覚的にモデル化して自動生成できます。Oracle Designer には、業務内容ごとの要件や多階層のインターネット・アプリケーションの設計を、短期間で、正確かつ効率よくモデル化、生成、および開発するための、ウィザード・ベースのツールが統合されています。従来のアプリケーション用に蓄積された設計データを取り込む機能が特色の 1 つで、これまでに費やしてきた作業が無駄になりません。

B.7 その他のドキュメント

すべてのコンポーネントに対してオンライン・ヘルプ・システムが自動的にインストールされます。

C

サイレント・インストールおよび非インタラクティブ・インストール

この章では、Oracle Developer Suite のサイレント・インストールおよび非インタラクティブ・インストールについて説明します。説明する項目は次のとおりです。

- 概要
- 要件
- インストールの準備
- レスポンス・ファイルの操作
- インストールの開始
- インストール完了後の作業

C.1 概要

Oracle Developer Suite には、非インタラクティブ・インストールの方式として、次の 2 つがあります。

- サイレント・インストール
- 非インタラクティブ・インストール

どちらの方式も、Windows と UNIX の両方のプラットフォームで利用できます。

C.1.1 サイレント・インストール

Oracle Developer Suite のサイレント・インストールを実行するには、インストーラにレスポンス・ファイルを与え、コマンドラインで `-silent` フラグを指定します。レスポンス・ファイルは、テキスト・ファイルです。

インストーラは、レスポンス・ファイルに記述された変数やパラメータの値を使用して、インストール時のすべてのプロンプトへのレスポンスを得ます。レスポンス・ファイルには、インストール時のすべてのプロンプトに対するレスポンスを記述します。サイレント・インストールでは、グラフィカルな出力は表示されません。

サイレント・インストールは、複数のコンピュータに同様のインストールを行う場合に使用します。また、サイレント・インストールは、コマンドラインを使用してリモートでインストールを行う場合にも使用できます。サイレント・インストールでは、情報を入力する必要も、注意すべきグラフィカル・ユーザー・インターフェースもないため、インストールを監視しなくても済みます。

C.1.2 非インタラクティブ・インストール

Oracle Developer Suite の非インタラクティブ・インストールを実行することもできます。その場合は、インストーラにレスポンス・ファイルを与えますが、コマンドラインで `-silent` フラグを指定する必要はありません。インストーラは、レスポンス・ファイルに記述された値やパラメータ値を使用して、一部またはすべてのユーザー・プロンプトへのレスポンスを得ます。インストーラのグラフィカル・ユーザー・インターフェースは、通常のインストールと同様です。すべてのプロンプトにレスポンスを指定しない場合は、インストール時に情報を入力できます。

非インタラクティブ・インストールは、特定のインストール画面を表示する必要がある場合や、一部の情報を対話的に入力する必要がある場合に使用します。

また、非インタラクティブ・インストールは、コマンドラインを使用してリモートでインストールを行う場合にも使用できます。

C.2 要件

インストールの要件の詳細は、[第 2 章「インストールする前に」](#) を参照してください。

C.3 インストールの準備

インストールを実行する前に、次の手順を行います。

1. 第 2.6 項「[インストールの準備](#)」に記載されているインストール前の準備作業を完了します。

注意： Oracle Developer Suite をインストールする前に、HP-UX Java SDK をダウンロードしてインストールする必要があります。インストール手順については、[第 2.6.1 項「全般的なチェックリスト」](#) を参照してください。

2. **Windows のみ** : Windows システム・ファイル (WSF) をインストールしておきます。インストール方法については、[第 2.7.4.1.1 項「Windows システム・ファイルのインストール」](#) を参照してください。
3. **UNIX のみ** : インストーラのインベントリ・ディレクトリを作成します。その場合は、使用する Oracle ホーム・ディレクトリに移動し、`oracle_home/oraInventory` などのサブディレクトリを作成します。インベントリ・ディレクトリの詳細は、[第 2.7.3 項「インストーラのインベントリ・ディレクトリ」](#) を参照してください。
4. **UNIX のみ** : コンピュータに初めて Oracle 製品をインストールする場合は、インベントリ・ディレクトリを参照するファイルを作成する必要があります。操作方法は次のとおりです。
 - a. `root` ユーザーとしてログインします。
 - b. ディレクトリ `/var/opt/oracle` を作成します (Linux x86 の場合を除きます)。
 - c. `/var/opt/oracle` ディレクトリ (Linux x86 の場合は、`/etc` ディレクトリ) で、ファイル `oraInst.loc` を作成し、次の行を挿入します。

```
inventory_loc=oracle_home/inventory_directory
```

```
inst_group=inventory_owner_group
```

ここで、

- `oracle_home` には、Oracle ホーム・ディレクトリを指定します。
- `inventory_directory` には、インベントリ・ディレクトリを指定します。
- `inventory_owner_group` には、`inventory_directory` への書込み権限を持つグループを指定します ([第 2.6.6.1 項「インストーラのインベントリの UNIX グループ名」](#) を参照)。

たとえば、次のような行を入力します。

```
inventory_loc=/private1/oracle/oraInventory
inst_group=devsuitegrp
```

注意： Linux x86 では、/var/opt/oracle/oraInst.loc ではなく、/etc/oraInst.loc を作成してください。

C.4 レスポンス・ファイルの操作

サイレント・インストールまたは非インタラクティブ・インストールでインストーラに情報を指定するには、レスポンス・ファイルを使用します。

最初は、レスポンス・ファイルのテンプレートを使用します。このテンプレートは、Oracle Developer Suite の製品 CD-ROM Disk 1 の stage\\${Response} ディレクトリ (Windows) または stage/Response ディレクトリ (UNIX) にあります。DVD の場合は、\\$developer_suite\stage\\${Response} ディレクトリ (Windows) または /developer_suite/stage/Response ディレクトリ (UNIX) にあります。レスポンス・ファイルのテンプレートは、次のように、Oracle Developer Suite のすべてのインストール・タイプ用に用意されています。

表 C-1 インストール・タイプ別レスポンス・ファイル名

インストール・タイプ	レスポンス・ファイルのテンプレート名
J2EE Development	oracle.ids.toplevel.development.J2EE.rsp
Business Intelligence (Windowsのみ)	oracle.ids.toplevel.development.BI.rsp
Rapid Application Development (Windowsのみ)	oracle.ids.toplevel.development.RAD.rsp
完全	oracle.ids.toplevel.development.Complete.rsp

テンプレート・ファイルには、レスポンス・ファイルのパラメータの定義が記述されています。

注意： 誤った設定のレスポンス・ファイルを使用してサイレント・インストールを実行すると、インストールが失敗します。

注意： Boolean のパラメータには、true または false を指定してください。

注意： HP-UX のみ：HP-UX 環境でレスポンス・ファイルを使用する場合は、手順が特殊なので、[第 C.4.1.4 項「HP-UX でのレスポンス・ファイルの使用方法」](#)を参照する必要があります。

C.4.1 Oracle Developer Suite のインストールに使用するレスポンス・ファイルのサンプル

次のテンプレート・ファイルのサンプルでは、読みやすさを重視して、パラメータを説明するコメント行は省略しています。コメント行は、CD-ROM または DVD のテンプレート・ファイルで参照できます。

C.4.1.1 Business Intelligence (Windows のみ)

インストール・タイプが Business Intelligence のサイレント・インストールに使用するレスポンス・ファイルのサンプルは、次のとおりです。イタリックで表示された値は、目的のレスポンスに応じて書き換える必要があります。

```
RESPONSEFILE_VERSION=2.2.1.0.0
FROM_LOCATION="../stage/products.jar"
FROM_LOCATION_CD_LABEL="Oracle Developer Suite 10g"
LOCATION_FOR_DISK2=".../Disk2"
ORACLE_HOME="C:\DevSuiteHome"
ORACLE_HOME_NAME="DevSuiteHome"
Toplevel_COMPONENT={"oracle.ids.toplevel.development","9.0.4.0.0"}
DEINSTALL_LIST={"oracle.ids.toplevel.development","9.0.4.0.0"}
SHOW_SPLASH_SCREEN=true
SHOW_WELCOME_PAGE=false
SHOW_COMPONENT_LOCATIONS_PAGE=false
SHOW_CUSTOM_TREE_PAGE=false
SHOW_SUMMARY_PAGE=true
SHOW_INSTALL_PROGRESS_PAGE=true
SHOW_REQUIRED_CONFIG_TOOL_PAGE=true
SHOW_CONFIG_TOOL_PAGE=true
SHOW_RELEASE_NOTES=true
SHOW_END_SESSION_PAGE=true
SHOW_EXIT_CONFIRMATION=true
NEXT_SESSION=false
NEXT_SESSION_ON_FAIL=true
SHOW_DEINSTALL_CONFIRMATION=true
SHOW_DEINSTALL_PROGRESS=true
ACCEPT_LICENSE AGREEMENT=true
RESTART_SYSTEM=true
COMPONENT_LANGUAGES={"en"}
INSTALL_TYPE="BI"
b_lite_install=true
```

```
mailServerName="servername.domainname"
oracle.wsf.verification:PROD_HOME="C:\DevSuiteHome"
oracle.wsf.install:PROD_HOME="C:\DevSuiteHome"
oracle.swd.jre:PROD_HOME="C:\DevSuiteHome"
```

C.4.1.2 完全インストール（Windows）

Windows 用のインストール・タイプが完全のサイレント・インストールに使用するレスポンス・ファイルのサンプルは、次のとおりです。イタリックで表示された値は、目的のレスポンスに応じて書き換える必要があります。

```
RESPONSEFILE_VERSION=2.2.1.0.0
FROM_LOCATION="..../stage/products.jar"
FROM_LOCATION_CD_LABEL="Oracle Developer Suite 10g"
LOCATION_FOR_DISK2="..../Disk2"
ORACLE_HOME="C:\DevSuiteHome"
ORACLE_HOME_NAME="DevSuiteHome"
Toplevel_COMPONENT={"oracle.ids.toplevel.development","9.0.4.0.0"}
DEINSTALL_LIST={"oracle.ids.toplevel.development","9.0.4.0.0"}
SHOW_SPLASH_SCREEN=true
SHOW_WELCOME_PAGE=false
SHOW_COMPONENT_LOCATIONS_PAGE=false
SHOW_CUSTOM_TREE_PAGE=false
SHOW_SUMMARY_PAGE=true
SHOW_INSTALL_PROGRESS_PAGE=true
SHOW_REQUIRED_CONFIG_TOOL_PAGE=true
SHOW_CONFIG_TOOL_PAGE=true
SHOW_RELEASE_NOTES=true
SHOW_END_SESSION_PAGE=true
SHOW_EXIT_CONFIRMATION=true
NEXT_SESSION=false
NEXT_SESSION_ON_FAIL=true
SHOW_DEINSTALL_CONFIRMATION=true
SHOW_DEINSTALL_PROGRESS=true
ACCEPT_LICENSE AGREEMENT=true
RESTART_SYSTEM=true
COMPONENT_LANGUAGES={"en"}
INSTALL_TYPE="Complete"
b_olite_install=true
mailServerName="servername.domainname"
oracle.wsf.verification:PROD_HOME="C:\DevSuiteHome"
oracle.wsf.install:PROD_HOME="C:\DevSuiteHome"
oracle.repository.ocxpack90:PROD_HOME="C:\DevSuiteHome"
oracle.swd.jre:PROD_HOME="C:\DevSuiteHome"
```

C.4.1.3 完全インストール（UNIX）

UNIX 用のインストール・タイプが完全のサイレント・インストールに使用するレスポンス・ファイルのサンプルは、次のとおりです。イタリックで表示された値は、目的のレスポンスに応じて書き換える必要があります。

```
RESPONSEFILE_VERSION=2.2.1.0.0
UNIX_GROUP_NAME=devsuitegrp
FROM_LOCATION="..../stage/products.jar"
FROM_LOCATION_CD_LABEL="Oracle Developer Suite 10g"
LOCATION_FOR_DISK2="..../Disk2"
ORACLE_HOME="/private/DevSuiteHome"
ORACLE_HOME_NAME="DevSuiteHome"
Toplevel_COMPONENT={"oracle.ids.toplevel.development","9.0.4.0.0"}
DEINSTALL_LIST={"oracle.ids.toplevel.development","9.0.4.0.0"}
SHOW_SPLASH_SCREEN=true
SHOW_WELCOME_PAGE=false
SHOW_COMPONENT_LOCATIONS_PAGE=false
SHOW_CUSTOM_TREE_PAGE=false
SHOW_SUMMARY_PAGE=true
SHOW_INSTALL_PROGRESS_PAGE=true
SHOW_REQUIRED_CONFIG_TOOL_PAGE=true
SHOW_CONFIG_TOOL_PAGE=true
SHOW_RELEASE_NOTES=true
SHOW_ROOTSH_CONFIRMATION=true
SHOW_END_SESSION_PAGE=true
SHOW_EXIT_CONFIRMATION=true
NEXT_SESSION=false
NEXT_SESSION_ON_FAIL=true
SHOW_DEINSTALL_CONFIRMATION=true
SHOW_DEINSTALL_PROGRESS=true
ACCEPT_LICENSE AGREEMENT=true
RESTART_SYSTEM=false
COMPONENT_LANGUAGES={"en"}
INSTALL_TYPE="Complete"
b_olite_install=true
mailServerName="servername.domainname"
PROD_HOME="/private/DevSuiteHome"
```

C.4.1.4 HP-UX でのレスポンス・ファイルの使用方法

HP-UX のみ: J2EE Development と完全の両方のレスポンス・ファイルに、JDKHome 変数を設定します。この変数により、Java 2 SDK 1.4.1 for PA-RISC の場所が特定されます。

たとえば、Java 2 SDK を次の場所にインストールしているとします。

```
/opt/java/java1.4.1
```

その場合は、レスポンス・ファイルに次の行を指定しておく必要があります。

```
JDKHome=/opt/java/java.1.4.1
```

必要に応じて、テキスト・エディタを使用し、レスポンス・ファイルにこの行を追加してください。

C.5 インストールの開始

インストール時にレスポンス・ファイルを使用するには、コマンド・プロンプトからインストーラを起動します。コマンドの種類は、インストール先のプラットフォームおよび、サイレント・インストールと非インタラクティブ・インストールのどちらを実行するかによって異なります。

C.5.1 サイレント・インストールでのインストーラの起動

インストーラをサイレント・インストールで起動するには、コマンド・プロンプトから次のように入力します。

- Windows

```
setup -silent -responseFile absolute_path_and_filename
```

- UNIX

```
./runInstaller -silent -responseFile absolute_path_and_filename
```

C.5.2 非インタラクティブ・インストールでのインストーラの起動

インストーラを非インタラクティブ・インストールで起動するには、コマンド・プロンプトから次のように入力します。

- Windows

```
setup -responseFile absolute_path_and_filename
```

- UNIX

```
./runInstaller -responseFile absolute_path_and_filename
```

C.6 インストール完了後の作業

非インタラクティブ・インストールまたはサイレント・インストールの結果は、`installActions.log` ファイルに記録されます。また、サイレント・インストールの場合は、`silentInstall.log` ファイルも作成されます。これらのログ・ファイルは、インベントリ・ディレクトリに作成されます。

インストールの終了後は、[第 3.2 項「インストール完了後の作業」](#) で説明されているインストール後の作業を行ってください。

インストール完了後の作業

D

トラブルシューティング

この付録では、Oracle Developer Suite のインストールにおけるトラブルシューティングの方法を一部紹介します。説明する項目は次のとおりです。

- [始める前に](#)
- [インストールに関するトラブルシューティング](#)
- [Oracle Developer Suite Configuration Assistant のトラブルシューティング](#)

D.1 始める前に

Oracle Developer Suite のインストール中に発生した問題を解決する前に、次の説明をお読みください。

- ハードウェアおよびインストール前の要件の確認
- リリース・ノートの確認

D.1.1 ハードウェアおよびインストール前の要件の確認

はじめに、Oracle Developer Suite のハードウェアおよびソフトウェア要件と、インストールの準備作業を確認します。

- 第 2.1 項「ハードウェア要件」で指定されているハードウェア要件を、ご使用のコンピュータが満たしていることを確認します。
- Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) が、ご使用のオペレーティング・システムに対応していることを確認します。対応するオペレーティング・システムの一覧は、第 2.2 項「サポートされるオペレーティング・システム」を参照してください。
- オペレーティング・システムが対応している場合、第 2.3 項「オペレーティング・システムのソフトウェア要件」で指定されているソフトウェア要件を満たしていることを確認します。
- 第 2.6 項「インストールの準備」の冒頭で指定されている、製品レベルでのインストールの準備作業がすべて完了していることを確認します。
- インストールする各コンポーネントについて、コンポーネントレベルでのインストールの準備作業がすべて完了していることを確認します。このような作業については、第 2.6.7 項「コンポーネント別のインストール準備作業」を参照してください。

D.1.2 リリース・ノートの確認

インストールの前に、Oracle Developer Suite のリリース・ノートをお読みください。次のリリース・ノートがあります。

- 『Oracle Developer Suite リリース・ノート 10g (9.0.4) for Windows and UNIX』は、Windows および UNIX プラットフォーム向けの製品レベルおよびコンポーネントレベルのリリース・ノートです。このマニュアルは、Oracle Technology Network Japan (<http://otn.oracle.co.jp>) でも入手できます。

D.2 インストールに関するトラブルシューティング

Oracle Developer Suite のインストール中にエラーが発生した場合は、次の手順を行います。

- インストーラは終了しないでください。インストーラを実行したままにしておくほうが、インストール・ログ・ファイルを簡単に検索できます。

- **入力の間違い:** インストール画面のどこかで誤った情報を入力したと考えられる場合は、「戻る」をクリックしてその画面まで戻り、情報を修正してからインストールを続行します。
- **コピーまたはリンクのエラー:** ファイルのコピーまたはリンク時のエラーが報告された場合は、次のようにします。
 1. エラーの内容をメモし、インストール・ログを参照して原因を探ります。インストール・ログは、Oracle インベントリ・ディレクトリのサブディレクトリ `logs` (Windows)、または `/logs` (UNIX) にあり、ファイル名はそれぞれ次のようになっています。

Windows の場合:

- `oracle_inventory\logs\installActionstimestamp.log`
- `oracle_inventory\logs\oraInstalltimestamp.err`
- `oracle_inventory\logs\oraInstalltimestamp.out`

UNIX の場合:

- `oracle_inventory/logs/installActionstimestamp.log`
- `oracle_inventory/logs/oraInstalltimestamp.err`
- `oracle_inventory/logs/oraInstalltimestamp.out`

文字列 `timestamp` は、インストールの開始時にファイル名に付加される値です。`timestamp` の形式は、`yyyy-mm-dd hh-mm-ss[AM|PM]` です。ここで、

- `yyyy` は、2003 のように、現在の年を表します。
- `mm` は、現在の月を表します。7 月の場合は 07 になります。
- `dd` は、現在の日付を表します。15 日の場合は 15 になります。
- `hh`、`mm` および `ss` は、それぞれ、インストールが開始された時間、分、秒を表します。
- `[AM/PM]` は、インストールが開始された時刻の AM または PM を表します。

`oracle_inventory` ディレクトリの場所は、コンピュータに最初に Oracle 製品をインストールするときに指定されます。ディレクトリおよびディレクトリの検索方法の詳細は、[第 2.5 項「インストーラによって使用されるディレクトリ](#) を参照してください。

2. インストールに失敗した場合は、[第 4 章「アンインストールと再インストール](#) の手順に従って、インストールした内容を削除してください。
3. エラーの原因となる問題を修正します。
4. もう一度 Oracle Developer Suite のインストールを開始します。

D.3 Oracle Developer Suite Configuration Assistant のトラブルシューティング

Configuration Assistant の実行中に発生したインストール・エラーに対してトラブルシューティングを行うには、次の手順を行います。

- [第 D.2 項「インストールに関するトラブルシューティング」](#) のインストール・ログ・ファイルを確認します。
- `oracle_home/cfgtoollogs` ディレクトリで、Oracle Developer Suite Configuration Assistant の特定のログ・ファイルを確認します。[表 D-2](#) に、Configuration Assistant の他のログ・ファイルの場所を示します。エラーの原因となった問題を修正してください。
- 「致命的エラー。再インストール」というメッセージが表示された場合は、ログ・ファイルを分析して原因を発見してください。手順の詳細は、[第 D.3.3 項「致命的エラーへの対応」](#) を参照してください。

D.3.1 Configuration Assistant の実行状態の判別

Oracle Developer Suite Configuration Assistant のエラーは、インストール画面の下部に表示されます。場合によっては、Configuration Assistant インタフェースにより、追加情報が表示されます。Configuration Assistant の実行状況は、結果で判断します。[表 D-1](#) に、結果コードを示します。

表 D-1 Configuration Assistant の結果コード

ステータス	結果コード
Configuration Assistant の成功	0
Configuration Assistant の失敗	1
Configuration Assistant の中止	-1

結果コードは、次のログ・ファイルに書き込まれます。

`oraInventory/logs/installActionsTimestamp.log`

D.3.2 Configuration Assistant のエラーの修正

インストール中、Configuration Assistant の画面が表示されているときには、Configuration Assistant が実行されています。Configuration Assistant が失敗した場合は、次の手順を行って問題を修正してください。

1. 該当するインストール・セッションのインストール・ログ・ファイルを確認します。

2. 各 Configuration Assistant のログ・ファイルを、`oracle_home/cfgtoollogs` ディレクトリで確認します。デフォルトのログ・ファイルの場所については、[表 D-2](#) を参照してください。
3. [表 D-2](#) の Configuration Assistant に関する項を参照します。
 - a. 失敗した Configuration Assistant に依存関係がある場合は、依存する Configuration Assistant を再度実行します。依存する Configuration Assistant の実行が成功している場合であっても、再度実行する必要があります。
 - b. オプションの Configuration Assistant が失敗しても、依存性がない場合は、残りの Configuration Assistant を実行します。中止されたオプションの Configuration Assistant の選択を解除し、次に表示されている Configuration Assistant を選択して、「再試行」をクリックします。
 - c. 失敗した Configuration Assistant を再度実行します。インストーラを使用している場合は、該当する Configuration Assistant を選択して、「再試行」をクリックします。

注意: [表 D-2](#) の Configuration Assistant の説明に、依存する事前作業の説明が含まれている場合は、該当する Configuration Assistant を実行する前に、これらの作業を実行する必要があります。

D.3.3 致命的エラーへの対応

Configuration Assistant のエラーの一部は、致命的エラーです。致命的エラーは、問題を修正して続行してもリカバリできません。現在インストールされている内容を削除して、Oracle Developer Suite を再インストールする必要があります。リカバリ手順は、次のとおりです。

1. 失敗したインストールの内容を削除します。手順については、[第 4.1 項「アンインストール」](#) を参照してください。
2. 致命的エラーの原因を修正します。
3. Oracle Developer Suite を再インストールします。
4. 致命的エラーが再発する場合は、インストールしたすべての Oracle 製品をコンピュータから削除します。手順については、[第 4.1.1 項「インストーラを使用したアンインストール手順」](#) を参照してください。

D.3.4 Oracle Developer Suite Configuration Assistant の説明

[表 D-2](#) に、Oracle Developer Suite のインストール中に実行される Configuration Assistant を示します。インストール・タイプによって、使用する Configuration Assistant が異なります。

注意：一部の Configuration Assistant は、実行中に UI が表示されないサイレント・モードで実行されます。

表 D-2 Oracle Developer Suite Configuration Assistant の説明

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
Oracle Net Configuration Assistant	Oracle Net Configuration Assistant は、データベース・リスナーと中間層の Oracle Application Server インスタンスを設定し、デフォルトで LDAP ネーミングを使用するようにします。	STDOUT/STDERR (すべてのメッセージはインストーラのウインドウに表示されます。)

索引

A

Access Bridge

 JDeveloper の設定 , 3-21
 インストール , 2-14, 3-13

B

Bali, B-6

BI Beans, 「Oracle BI Beans」を参照

C

Cabo, B-6

CD-ROM のマウント

 HP-UX, 2-26
 Linux, 2-27
 Solaris, 2-25

CLASSPATH 環境変数 , 2-13

D

DISPLAY 環境変数 , 2-16

DVD のマウント

 Solaris, 2-25

E

End User Layer のアップグレード , A-7

EUL のアップグレード , A-7

F

font.properties, 3-15

Forms Developer 用の OC4J

インスタンスの起動と停止 , 3-12
ポート番号 , 3-12

H

HP HP-UX オペレーティング・システム
 Java SDK の要件 , 2-13
 バージョン要件 , 2-8
 パッチセット要件 , 2-8
 HTTP リスナー , 3-12

J

Java Access Bridge
 JDeveloper の設定 , 3-21
 インストール , 2-14, 3-13
Java Object サポート , 3-26
JDBC OCI ドライバ , 3-24
JDBC ドライバ、BI Beans, 3-23
JDeveloper の拡張機能
 インストール , 3-14
 ダウンロード , 3-14
 有効化 , 3-14
JDeveloper 用の OC4J
 非埋込みモード , 3-20
 ポート番号 , 3-12
JDK, 2-14, 3-13
JMS, 3-12
JRE, 2-14, 3-13

L

LD_LIBRARY_PATH 環境変数 , 2-13
Linux オペレーティング・システム
 バージョン要件 , 2-9

パッチセット要件, 2-9

M

Merant JDBC ドライバ, 3-25
Microsoft Windows、要件, 2-4

N

Net Configuration Assistant, 3-8, D-6
Net Services, 3-11
NLS_LANG 環境変数, 3-10

O

OC4J リスナー, 3-5
Oracle BI Beans
 JDBC ドライバ, 3-23
 移行, A-4
 インストール完了後の作業, 3-22
 カタログ, 3-24
 説明, B-4
 データベース要件, 3-22
 デプロイの要件, B-4
Oracle Designer
 説明, B-7
Oracle Developer Suite のコンポーネント, B-1
Oracle Discoverer Administrator
 インストール完了後の作業, 3-26
 説明, B-7
Oracle Forms Developer
 インストール完了後の作業, 3-26
 説明, B-7
Oracle Net Configuration Assistant, 3-8, D-6
Oracle OLAP Server, 3-24
Oracle Reports Developer
 インストール完了後の作業, 3-24
 説明, B-6
Oracle SCM
 インストール完了後の作業, 3-27
 インストールの準備, 2-18
 説明, B-7
Oracle Universal Installer, 2-19
 起動手順 (UNIX), 2-25
 起動手順 (Windows), 2-23
ORACLE_HOME 環境変数, 2-15
 (「Oracle ホーム」も参照)

Oracle9i JDeveloper

 インストール完了後の作業, 3-14
 説明, B-2
 ドキュメントのホスティング, 3-16
 非埋込みモードの OC4J, 3-20
 マルチユーザー環境, 3-17
OracleAS Containers for J2EE, 3-5
OracleAS Forms Services, 3-5
OracleAS Portal の統合, 3-24
OracleAS Reports Services
 インストール, 3-5
 起動と停止, 3-25
oracle アカウントの属性, 2-18
Oracle データベースの互換性、「共存」、「データベース」を参照, 2-10
Oracle ホーム
 共存, 2-10
 設定, 2-15
 設定解除, 2-15
 ディレクトリ, 2-10
oraInventory ディレクトリ, 2-22

P

PATH 環境変数, 2-13
pkginfo コマンド, 2-6
portlist.ini ファイル, 3-11

R

Reports Developer 用の OC4J
 インスタンスの起動と停止, 3-12
 ポート番号, 3-12
Reports Server 構成ファイル, 3-25
Repository Administration Utility, 3-15
RMI, 3-12

S

SHLIB_PATH 環境変数, 2-13
Solaris オペレーティング・システム
 Solaris 6 および 7 のサポート, 1-5
 サポートされる Oracle Developer Suite コンポーネント, 2-4
 パッケージ要件, 2-7
 パッチセット要件, 2-5
sqlnet.ora, 3-11

startinst.bat, 3-12
startinst.sh, 3-12
stopinst.bat, 3-12
stopinst.sh, 3-12
Sun Solaris オペレーティング・システム, 「Solaris オペレーティング・システム」を参照

T

Terminal Server クライアント
JDeveloper 用の設定, 3-18
TMP 環境変数、設定, 2-16
TNS_ADMIN 環境変数, 2-17
tnsnames.ora, 3-11

U

UIX, B-6
UNIX アカウント、作成, 2-18
UNIX グループ、「グループ名」を参照
UNIX コンピュータ、フォントの問題, 3-15
UNIX にインストールされるコンポーネント、「インストールできるコンポーネント」を参照

V

var/opt ディレクトリ, 3-4

W

Windows オペレーティング・システム
Developer Suite のコンポーネント, 2-3
要件, 2-4
Windows システム・ファイルのインストール, 2-24
Windows にインストールされるコンポーネント、「インストールできるコンポーネント」を参照

あ

アップグレード
6i リポジトリ, A-7
End User Layer, A-7
（「移行」も参照）
アンインストール, 4-2
移行
Oracle BI Beans, A-4
Oracle Designer, A-8

Oracle Discoverer Administrator, A-7
Oracle Forms Developer, A-7
Oracle Reports Developer, A-6
Oracle SCM, A-7
Oracle9i JDeveloper, A-3
一時ディレクトリ
設定, 2-16
必要な領域, 2-2
インストール
Windows システム・ファイル, 2-24
言語, 3-6
サイレント, 1-7, C-2
製品、概要, 1-2
製品、操作手順, 3-2
手順、全般, 1-4
トラブルシューティング, D-2, D-3
非インタラクティブ, 1-7, C-2
必要な情報, 2-19
レスポンス・ファイル, C-4
インストール完了後の作業, 3-9
Oracle BI Beans, 3-22
Oracle Discoverer Administrator, 3-26
Oracle Forms Developer, 3-26
Oracle Reports Developer, 3-24
Oracle SCM, 3-27
Oracle9i JDeveloper, 3-14
インストールできるコンポーネント
UNIX, 1-3
Windows, 1-3
インストールの準備, 2-12
Oracle SCM, 2-18
インベントリ・ディレクトリ, 2-22
エラー
Windows システム・ファイル, 2-23
インストール（「トラブルシューティング」を参照）
オペレーティング・システム
Developer Suite のコンポーネント, 2-3
ソフトウェア要件, 2-4

か

拡張機能、「JDeveloper の拡張機能」を参照
カタログ、BI Beans, 3-24
環境変数
UNIX での設定, 2-15
リスト, 2-15
共存

Oracle Application Server, 2-10

Oracle ホーム, 2-10

旧バージョン, 2-10

データベース, 2-10

リリース 9.0.2, 2-10

グループ名, 2-17

言語

コンポーネントの実行時, 3-10

選択, 3-6

フォント, 3-10

構成ツール

Oracle Net Configuration Assistant, 3-8, D-6

互換性, 「共存」を参照

さ

再インストール, 4-5

サイレント・インストール, 「インストール」、「サイレント」を参照

サポートされるオペレーティング・システム, 2-3

システム・ファイル・エラー (Windows), 2-23

ストアド Java オブジェクト, 3-26

前提条件の確認, 1-6, 2-20

ソース・コード管理, 3-15, 3-26

ソフトウェア要件、オペレーティング・システム
, 2-4

た

ディスプレイの要件, 2-2

データベース要件

BI Beans, 3-22

デプロイ

Forms, 3-27

Reports, 3-24

対応する環境

BI Beans, B-4

JDeveloper, B-2

デプロイの要件

BI Beans, B-4

トラブルシューティング, D-2, D-3

ドキュメント

製品のヘルプ, 3-31

は

ハードウェア要件

CPU, 2-2

TMP 領域, 2-2

スワップ領域, 2-2

ディスク領域, 2-2

ディスプレイ, 2-2

ページファイル・サイズ, 2-2

メモリー, 2-2, 2-3

バージョン要件

HP HP-UX, 2-8

Linux, 2-9

Solaris, 2-5

パッケージ要件

HP HP-UX, 2-8

Linux, 2-9

Solaris, 2-7

パッチセット要件

HP HP-UX, 2-8

Linux, 2-9

Solaris, 2-5

非インタラクティブ・インストール, 「インストール」、

「非インタラクティブ」を参照

フォント

UNIX の問題, 3-15

追加言語, 3-10

プロセッサ要件, 「ハードウェア要件」を参照

ホストされたドキュメント、JDeveloper, 3-16

ポート番号, 3-11

ま

メール・サーバー, 3-6

メモリー要件, 2-2, 2-3

や

ユーザー補助機能, 2-14, 3-13

要件

CPU (「ハードウェア要件」を参照)

オペレーティング・システム・ソフトウェア (「ソ

フトウェア要件」を参照)

ハードウェア (「ハードウェア要件」を参照)

ら

ランタイム・サービス, 3-5

リスナー、OC4J, 3-5

リポジトリ, 3-27

レスポンス・ファイル、操作 , C-4
ロケール、Oracle Universal Installer の設定 , 2-13

